

有明町文化財調査報告書 第14集

ひと の
一 野 遺 跡 Ⅱ

2001

長崎県有明町教育委員会



有明町文化財調査報告書 第14集

ひと の
一 野 遺 跡 Ⅱ

2001

長崎県有明町教育委員会



卷頭カラー〔1〕 調査地土層状況

卷頭カラー(2) 6号石室铁刀出土状况



発刊にあたって

このたび平成12年10月から平成13年2月にかけて実施いたしました、一野遺跡の調査報告書を刊行することになりました。

一野遺跡はこれまでに数回の調査がおこなわれ、縄文時代から古墳時代の遺構や遺物が多数発見されています。特に縄文時代早期の条痕土器については、「一野式」と呼ばれ一野遺跡が標識遺跡となっています。

今回の調査でも「一野式」の出土が予想されていましたが、調査を進めていくうちに周溝を持つ古墳がつぎつぎと発見され、古墳群であることが判明しました。周溝を持つ古墳は長崎県では初めての発見であり、古墳に伴って完形の高壙や鉄刀も出土し、これらは貴重な資料になるものと思われます。有明町には、この他に縄文時代の大野原遺跡や松尾遺跡など貴重な文化遺産が数多く残されています。

多種の文化財は貴重な財産であり、後世に伝えることは私たちの責務であります。

本書が文化財保護行政及び学問の進展に寄与することができれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査の実施にあたって御理解と御協力をいただきました関係者の皆様と、作業に従事して下さいました皆様に対し、衷心より感謝申し上げ、発刊のことばにかえさせていただきます。

平成13年3月

有明町教育長 宮川 武利

例　　言

1. 本報告書は、平成12年度の国庫補助事業として実施した、長崎県南高来郡有明町大三東一野に所在する一野遺跡の駐車場・倉庫建設に伴う緊急発掘調査報告書である。

2. 調査は有明町教育委員会が主体となり、県文化課の指導を受け実施した。

3. 調査関係者

調査主体	有明町教育委員会	教育長	官川 武利
		教育次長	官崎 政信
		課長補佐	松本 正
調査担当	有明町教育委員会	主事補	宇土 靖之
調査指導	長崎県教育庁文化課	埋蔵文化財班	
		係長	副島 和明
		係長	官崎 貴夫
		文化財調査員	竹中 哲朗
調査協力	有明町企画課	係長	酒井 和幸
		主事	小林 真澄

4. 出土人骨の分析については、分部哲氏（長崎大学医学部解剖学第二教室）にお願いし、玉稿を賜った。

5. 石材に関する知見については長岡信治氏（長崎大学教育学部地理学教室）にご教授いただいた。

6. 金属器の保存処理については、福岡市埋蔵文化財センターに依頼したが、処理期間の関係から結果等については本書に掲載できなかった。後日発表の機会を設けたい。

7. 発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の方々にご教授をいただいた。

小田富士雄・武末純一（福岡大学人文学部教授）、蒲原宏行（佐賀県立博物館）、古門雅高・福田一志・本田秀樹・高原 愛・東 貴之（長崎県教育庁）、土橋啓介（島原市教育委員会）、辻田直人（国見町教育委員会）、大野安生（大村市教育委員会）、秀島貞康（諫早市教育委員会）、松尾昌広・渡辺康行（埋蔵文化財サポートシステム）

8. 7号墳の実測については、中村 幸（長崎県教育庁）、竹中隆一の協力を得た。

9. 遺物実測は、島田ミツヲ・宮本美雪・伊藤恵美子・近藤慶子・松尾美代子・黒川英子・濱本秀美的協力を得、トレースは、渡辺洋子・齊藤いずみ・近藤千鶴・小林理恵子の協力を得た。

10. 遺物復元は、石本充子の協力を得た。

11. 写真撮影は、竹中・宇土が行った。

12. 本書で用いた方位はすべて磁北であり、国土座標はI系による。

13. 発掘作業は以下の方に従事していただいた。

吉田猪治、稻田 守、西本敏政、和泉安男、柴田正行、柴田松一、稻田英雄、吉田秋義、木田保徳、宮本岩一、中村徳一、松本 進、菅 勝己、本多軍次、中村末男、坂本タエ子、宇土昭博、荒木恵子、木村光江、松崎幸吉、宮崎キヌエ、金子ツギエ、中村八重子

14. 出土遺物については、有明町総合文化会館内大野原資料館に展示・保管される予定である。

15. 石棺・石室については、有明町大三東二ツ石字長樂山に移築保存を行う予定である。

16. 本書の編集は竹中・宇土による。

本文目次

卷頭カラー(1) 調査地土層状況	
卷頭カラー(2) 6号石室鉄刀出土状況	
第1章 地理的・歴史的環境.....	2
第1節 地理的環境.....	2
第2節 歴史的環境.....	2
第2章 調　　査.....	5
第1節 調査の履歴.....	5
第2節 調査に至る経緯.....	5
第3節 調査方法.....	5
第4節 層　　位.....	5
第3章 遺構と遺物.....	7
第1節 遺構と遺物の出土状況.....	7
第2節 縄文時代の遺構と遺物.....	10
(1) 遺　　構.....	10
(2) 土　　器.....	10
(3) 石　　器.....	16
第3節 古　墳　群.....	17
(1) 1　号　墳.....	17
(2) 2　号　墳.....	23
(3) 3　号　墳.....	27
(4) 4　号　墳.....	33
(5) 5　号　墳.....	37
(6) 6　号　墳.....	43
(7) 7　号　墳.....	47
(8) 8　号　墳.....	51
(9) 層位出土遺物.....	55
(10) 国見高等学校考古展示室収蔵資料.....	57
第4章 古墳群の検討.....	59
第5章 自然科学分析.....	64

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	調査区及び範囲確認調査グリッド配置図	4
第3図	調査地土層断面図	6
第4図	グリッド及び遺構配置図	8 ~ 9
第5図	焼土跡実測図	10
第6図	不明土坑出土土器及び実測図	10
第7図	4層出土土器	12
第8図	4層・1~3層出土の土器	14
第9図	石器	15
第10図	1号墳 周溝及び土層図	18~19
第11図	1号墳 埋葬施設展開図	20
第12図	1号墳 周溝出土遺物	21
第13図	1号墳 鉄製品・砥石	22
第14図	1号墳 周溝出土砥石	22
第15図	2号墳 周溝出土遺物①	23
第16図	2号墳 周溝・遺物出土状況	24
第17図	2号墳 埋葬施設展開図	25
第18図	2号墳 出土遺物②	26
第19図	3号墳 周溝出土砥石	27
第20図	3号墳 周溝及び土層図	28~29
第21図	3号墳 埋葬施設検出状況	30
第22図	3号墳 周溝出土遺物	31
第23図	3号墳 埋葬施設擾乱土中出土遺物	31
第24図	4号墳 周溝・遺物出土状況	34
第25図	4号墳 周溝出土遺物	35
第26図	5号墳 周溝・遺物出土状況	38
第27図	5号墳 埋葬施設展開図	39
第28図	5号墳 周溝出土遺物①	40
第29図	5号墳 周溝出土遺物②	41
第30図	5号墳 周溝出土石器	42
第31図	6号墳 周溝・遺物出土状況	43
第32図	6号墳 埋葬施設展開図	44
第33図	6号墳 副葬鉄器	46
第34図	6号墳 周溝出土遺物	46
第35図	7号墳 周溝及び土層図	48~49
第36図	7号墳 周溝出土遺物	50
第37図	7号墳 出土遺物	50
第38図	8号墳 周溝・遺物出土状況	51

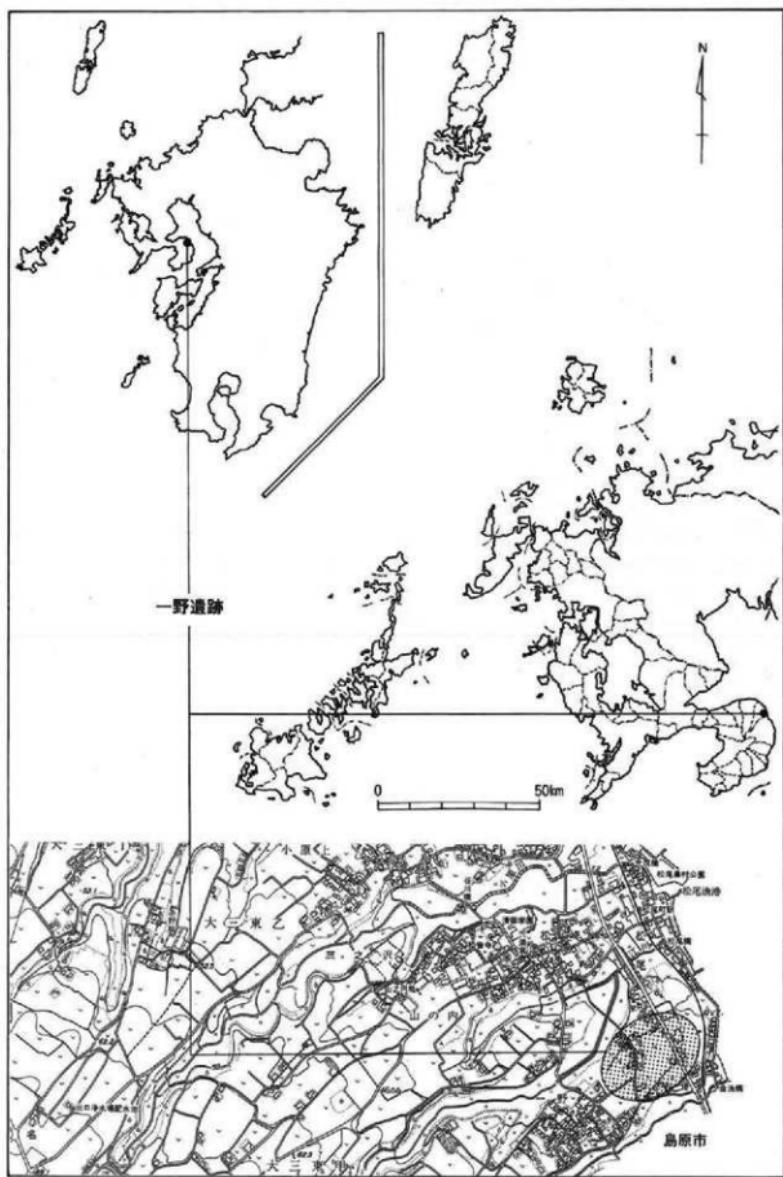
第39図	8号墳 周溝出土遺物	53
第40図	層位出土 弥生土器	55
第41図	層位出土 土師器	55
第42図	層位出土 須恵器①	56
第43図	層位出土 須恵器②	57
第44図	国見高等学校考古展示室収蔵資料	57
第45図	遺物集中区概念図	62

表 目 次

第1表	1号墳 出土土器観察表	21
第2表	2号墳 出土土器観察表	26
第3表	3号墳 出土土器観察表	32
第4表	4号墳 出土土器観察表	36
第5表	5号墳 出土土器観察表	41
第6表	6号墳 出土土器観察表	45
第7表	7号墳 出土土器観察表	50
第8表	8号墳 出土土器観察表	54
第9表	古墳組成表	59
第10表	周溝出土遺物一覧	59

写 真 図 版

- 図版1 遺跡遠景①～② 調査地から糸本県長洲方面 舞岳 調査地近景 作業状況①～③
- 図版2 土坑 焼土 一野式出土状況 弘法原式出土状況 三稜尖頭器出土状況 T P 1 南壁土層
国見高等学校考古展示室収蔵遺物
- 図版3 繩文土器①
- 図版4 繩文土器②
- 図版5 繩文土器③ 石器
- 図版6 埋葬施設・周溝出土の鉄製品 埋葬施設・周溝出土の石器
- 図版7 1号墳検出状況①～② 周溝内土師坏出土状況 埋葬施設 周溝内出土遺物
- 図版8 2号墳検出状況 埋葬施設①～② 周溝内遺物出土状況①～②
周溝底研石出土状況 2号墳周溝内出土遺物
- 図版9 3号墳検出状況 埋葬施設 周溝内遺物出土状況①～③ 3号墳周溝内出土遺物
- 図版10 4号墳検出状況① 4号墳検出状況② 周溝内遺物出土状況①～③ 4号墳周溝内出土遺物
- 図版11 5号墳周溝内遺物出土状況①～② 周溝完掘状況 埋葬施設①～③ 5号墳周溝内出土遺物
- 図版12 6号墳検出状況 埋葬施設①～② 副葬鉄器出土状況 周溝土師器壺出土状況 周溝内出土
遺物 副葬品
- 図版13 7号墳検出状況①～② 7号墳 周溝内出土遺物
- 図版14 8号墳検出状況 周溝内土師器高坏出土状況 8号墳 周溝内出土遺物



第1図 遺跡位置図

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

有明町の位置する島原半島は、長崎県南東部有明海と橋湾に胃袋状につきだした半島である。

半島の規模は、東西24km、南北32km、面積463km²で、中央部は雲仙岳を中心とした国立公園であり、海岸線一帯は島原半島県立自然公園となっている。地質・地形的には北部の雲仙火山地域と南部の南島原火山地域に大別でき、半島の4分の3を占める雲仙火山地域は、平成2年の普賢岳の噴火によりできた平成新山(1,489m)を主峰とする雲仙火山群の溶岩円頂丘を中心とし、標高300~400mを肩頂部として北部、東部、南東部に火山性扇状地が発達し裾野は有明海にのびる。南部の南島原火山地域は、第3記層を安山岩や玄武岩を主体とする溶岩が覆う火山性台地で、起伏に富む地形をなしている。海岸線の総延長は130kmであり、半島内の主要道路はほとんどが海岸線沿いを走り、鉄道(島原鉄道)も千々石・小浜・南串山町をのぞき海岸線に沿って走る。近年は、主要道路の複線とする農道(グリーンロード)の施設が進み、愛野町から島原市までの路線はほぼ完成している。また高規格道路の施設も計画されている。現行の行政区画では、雲仙岳を中心として放射状に1市16町に分かれているが、平成17年を目途に合併が行われる予定である。

有明町は、この島原半島北東部に位置する。地勢は、先述したように火山性扇状地であり、雲仙火山群を構成する舞岳(702m)を頂点とし、町域を北東方向に扇状に展開し、緩やかな傾斜で有明海に臨む。海岸線は5.9km南北9.8km、面積23.48km²、人口は12,340人(平成11年10月1日現在)で西は国見町、南は島原市に接し、農業と漁業が主産業である。舞岳を水源とする数条の河川は湯川江を除けば小河川であり、水田はこれら河川の流域に沿って分布するが流域面積は貧弱で豊かな扇状地を形成できず、水田面積は狭小である。台地上の耕作地についても水利が悪く地下水を汲み上げて対処しても畑作を営むのが限界であるが、黒ボクと呼ばれる土壌は畑作には適しており県内有数の畑作地帯となっている。また、漁業では地元で有明ガネと呼ばれるカニ漁と、遠浅の海岸を利用した海苔養殖が盛んであり、冬から春にかけては海岸線のほぼ全城に海苔養殖のコンポーズが立ち並ぶ。

一野遺跡は、町域東南端で島原市と接する三之沢名一野字野田、地元では「鼻ん先」と呼称する北に江川、南に金洗川に解析され東方向に有明海と接する標高10~20mの洪積段丘上に位置し、対岸の長洲町とは有明海をはさんで指揮の距離であり、かつて世界一を誇った三井グリーンランドの大観覧車を目視できる。遺跡は国道251号線、島原鉄道により南北に分断されるが、先の段丘上東西300m、南北650m程がその範囲と考えられる。

一野遺跡周辺には、周知の遺跡が多数知られ、北側の段丘には昭和53年の発掘調査で8~9世紀の遺構や遺物が出土した松尾遺跡、西には縄文から古代にかけての上一野遺跡、灰の久保遺跡、いずれも町内に存在し、南は弥生時代の墓域である景華園遺跡が知られる。

第2節 歴史的環境

長崎県遺跡地図には、町内の38遺跡が掲載されている。時代別では縄文19、弥生7、古墳13、古代(奈良)2、中世4となっている(重複あり)が、総じて時代的には重複する遺跡が多く、大野原遺跡などは当初弥生時代の遺跡とされていたものが、平成3年の町民プール建設に伴う調査では7~8世紀の須恵器などが多数出土し、平成9年の文化会館建設に伴う調査では縄文時代が主体ではあるが、

遺物的には弥生から古代のものが確認され、縄文～古代までの複合遺跡といえる。

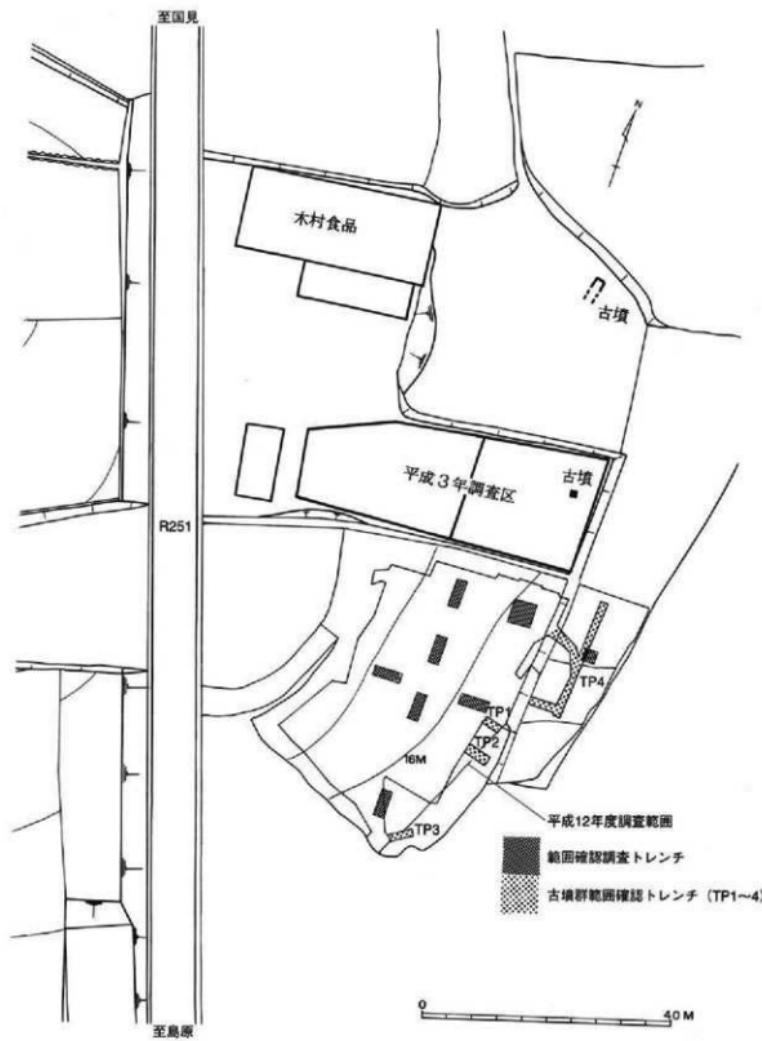
遺跡地図には旧石器時代の遺跡がないが、国見町の百花台・魚洗川遺跡と隣接する地域には存在する可能性があろう。縄文時代については、近年、先述の大野原遺跡の調査が行われている。平成9年に総合文化会館建設に伴う発掘調査、平成10年に総合福祉センターに伴う発掘調査が行われ、平成9年の発掘調査では、縄文後期の三万田式の土器が多量に出土し、良好な資料が得られている（報告書未刊行）。ほかに小原下遺跡、中田遺跡などが知られ、百人委員会、有明町教育委員会などにより発掘調査が行われている。弥生時代の遺跡については、一野遺跡・大野原遺跡などで石棺・壺棺などが発見されている、また妙法塚遺跡では壺棺が出土している。生活跡とよべる遺構についてはあまり知られていないが、平成3年の調査では隅丸方形の住居址が2軒確認されている。町内においては、すでに宅地となっていいる場所が比較的標高が低い台地上に集中している。このことが弥生時代の生活跡が発見できない要因にもなっていると思われる。

古墳時代については、高塚古墳としては平山古墳が知られる。墳丘はかろうじて存在し、玄室と前室の一部が残る。先述の妙法塚遺跡では工事の途中で石棺が発見され、鉄鏃と被葬者の骨が出土している。周囲ではかって土器や装饰品が採集できたとのことであり、また平家の落武者が葬られている等の話もあり、地元の人は漠然とではあるが墓域であろうという認識を持っているようだ。その他、口伝として古墳といわれるものも多い。古代については松尾遺跡から、土壙や貝類のつまつた柱穴とともに8世紀を中心とする土師器・須恵器などが出土し、大野原七反畠遺跡では8世紀前後の廃棄遺構が確認されている。中世については大野城跡が知られる。現在有明中学校・宅地によりその大半が占められているが、付近の道路は縱横に整然と配置され当時を忍ばせる。龍造寺氏、有馬氏が激突した沖田暉の戦いでは龍造寺方の兵站基地とり、ルイス・フロイスの『日本史』には「大野城は、高来の管轄地の最終端にあり、その城主は貧しかった。……しかも彼には、その場所が安全かつ、もっとも好都合に思えたので、彼はその城を離れ家、倉庫、食料庫とした。……不運な隆信が死んでしまったので、城主はただちに自分の真主であるドン・プロタジオに投降し、敵が城に貯えておいた軍需品をすべて受けることになった。」とある。

「鼻の先（はなんさき）」の地名については、民話に「鼻の先の名付け話」があり、「ある旅人が鼻の先でうちでのこづちを見つけ、きれいな着物とお金をたくさん出して肥後屋という旅館に泊まり鼻を伸ばしたり引っ込みたりするうちにとうとう鼻がなくなってしまった」という。これには裏の話があり、「肥後屋」という旅館は今も残されているが、昔は女郎宿でここでもらった病気で鼻が落ちたという話が脚色されたらしい。

（参考文献）

- 松田毅一・川崎桃太訳 1979 『フロイス 日本史10』西九州編II 中央公論社
有明町 1987 『有明町史』上巻
浦田和彦編 1992 『一野遺跡』（有明町文化財報告書第11集）有明町教育委員会
諫見富士郎 1993 『概要報告書 大野原七反畠遺跡』（有明町文化財報告書第10集）有明町教育委員会
長崎県教育委員会 1997 『原始古代の長崎県』資料編II
有明町 2000 『長崎県有明町勢要覧』
有明の歴史を語る会編 1111 『有明の歴史と風土』



第2図 調査区及び範囲確認調査グリッド配置図 (S=1/500)

第2章 調査

第1節 調査の履歴

昭和34年、国道251号線施設工事の際に壺棺と古墳時代の石室が発見され周知されるきっかけとなつた。

昭和34年に島原土木事務所、昭和38年には有明町教育委員会により発掘調査が行われ、壺棺3基、石棺5基、土壙1基が確認され、昭和52年には農作業中に古墳時代の石室と思われる遺構が発見されている。また、平成3年には有明町教育委員会が主体となり、県文化課が調査を担当し工場建設に伴う発掘調査が行われ、石棺1基、弥生時代の住居跡2基が確認された。その他、縄文時代早期の条痕文土器が多数発見され、水ノ江和同氏により形式分類がおこなわれ「一野式」と命名されている。

平成8年に県文化課により国庫補助事業として国道沿いの範囲確認調査が行われ、石棺が確認されている。この石棺は後の調査を期して土のうで倒壊を防止し埋め戻されている。平成11年には、県文化課による主要遺跡内容確認事業として遺跡全体を対象とした範囲確認調査が行われている。

第2節 調査に至る経緯

今回の調査は、有明町大三東甲711-1番地及び758-1番地の面積約1,200m²を対象とした駐車場・倉庫建設に伴う緊急発掘調査である。調査地は平成8年の範囲確認調査で石棺が発見され、縄文早期の土器、土師器などの包含層の存在も確認されており、工事に至る場合には事前に発掘調査が必要であるとされていたため、有明町教育委員会が主体となり国庫補助事業として発掘調査を実施した。

また発掘調査については県文化課の指導・協力を得た。

第3節 調査方法

調査地は国道沿いではあるが、開発により周囲が削平されており4m程の高台になっている。工事についてはこの高台の削平が計画されていたことから開発対象地全面の調査を実施した。

調査は平成8年に発見された石棺を検出するため甲711-1番地の北東部に東西20m、南北15mの調査区を設定、Ⅲ層上面まで重機による掘り下げを行い、その後国土座標による4×4mのグリッドを設定し調査を行った。調査地は「三愛工業」の駐車場として利用されていること、排土搬出の問題により、隨時、重機による拡張・掘り下げ、グリッド設定、埋め戻しをおこなった。

また甲758-1番地については、古墳の検出状況から新たな古墳の存在も考えられたため任意にトレンチを設定した。

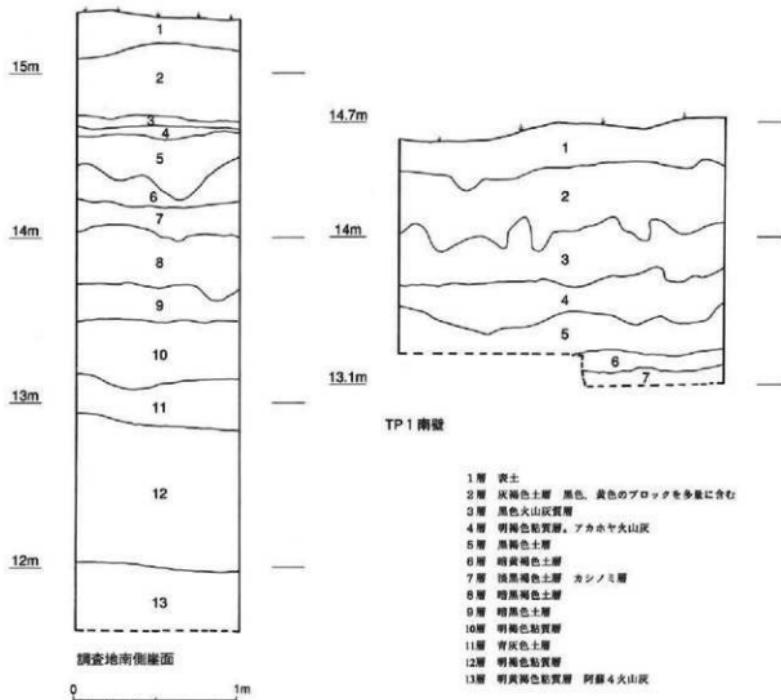
第4節 層位

調査区内、南側の崖面で13層に分けられる。(巻頭カラー(1))

1層は表土。駐車場として使用していたための碎石が部分的に存在する。2層は耕作土。灰褐色土層であるがゴボウ耕作の際に下層を切り込み黒色(3層)、黄色(4層)のブロックを多量に含む。3層は黒色土層。火山灰質でさらさらしている。縄文時代後期から中世までの包含層である。縄文時代の遺物も含まれるがゴボウ耕作による搅乱の為とも考えられる。1・2層は搅乱層であり、3層も部分的に搅乱される。

4層は明褐色土層。若干粘性がありしまりがよい。一野式など縄文時代早期の包含層である。アカホヤ火山灰の2次堆積層。5層は黒褐色土層。これより下層は無遺物層とされている。6層は暗黄褐色土層でややしまりがある。7層は黒褐色土層。5層よりもやや色調が暗い。地元でカシノミ層と呼ばれ、白い粒子を多量に含みブロック状に非常に固くしまっている。礫石原火砕流。8層は暗黒褐色土層。7層より色調が暗く非常に固くしまっている。白い粒子は含まないが小礫など不純物が多い。9層は暗黒色土層。しまりがある。3ミリほどの小礫をふくむが8層より量は少ない。10層は明褐色土層。粘質でややしまりがあり、炭化物を含む。11層は青灰色土層。安山岩の風化礫からなる層で炭化物を含む。火碎流。12層は明褐色土層。粘質で1cmほどの小礫を含む。10層と似る。13層は明黄褐色土層。砂質で2cmほどのオレンジ色の粒子、1cmほどの小礫、2mmほどの白い粒子(石英?)、炭化物を含む。ややしまりがある。阿蘇4火山灰層

本遺跡で3層とした黒色火山灰質の土層及び4層明褐色の土層は、河川域を除き町内大三東一帯にみられ、部分的な色調の変化はあるものの縄文時代の包含層として大まかな目安としている。



第3図 調査地土層断面図 (S=1/30)

第3章 遺構と遺物

第1節 遺構と遺物の出土状況

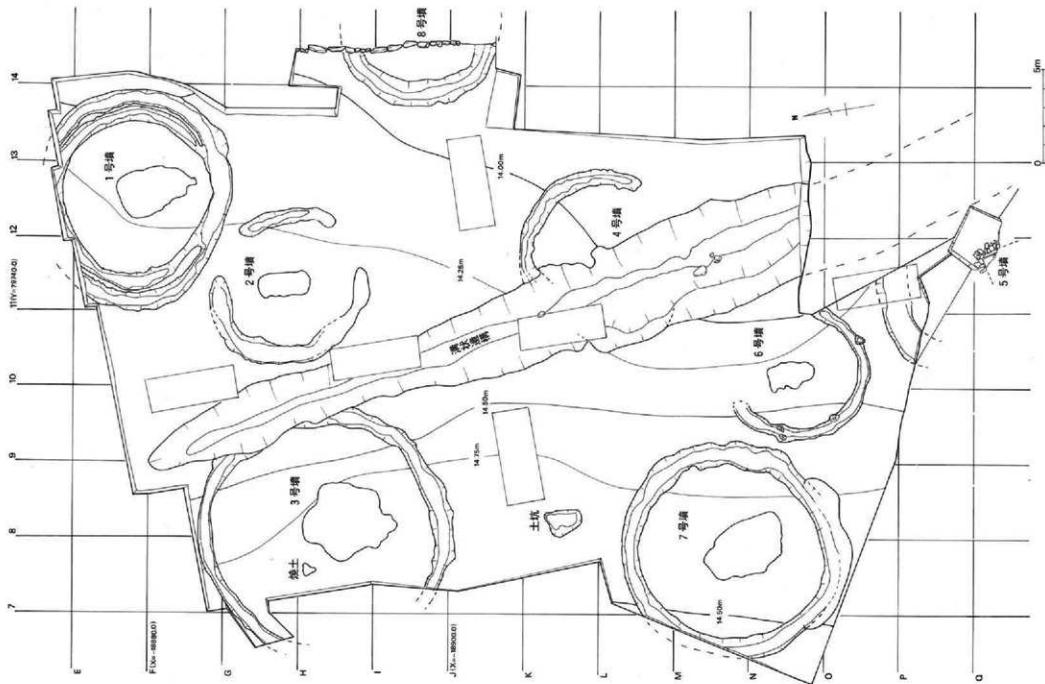
縄文時代から中世までの遺物が出土している。1・2層は耕作による搅乱層であり、3・4層についてもゴボウ耕作時のトレンチャーによる搅乱を部分的に受けている。5層より下の層では無遺物層となり遺物の確認はできない。

3層は、縄文時代後期から中世にかけての遺物が確認できた。遺構については、古墳の石室の石材が確認できたが、堀方は確認できていない。また周溝も3層では確認できなかったが、周溝の直上となる場所では土師器などが集中して出土している。

4層は、縄文早期から中期にかけての遺物が出土している。石室の掘方、周溝が確認できた。西から東方向に傾斜しており部分的にトレンチャーによる搅乱を受け、2号墳周辺は特に顕著である。合計8基の古墳が確認できたが、程度の差はあるが石室は破壊されている。1号墳・2号墳・6号墳は天井石を失っている。3号墳は石材が持ち出され搬出困難な巨大な石材は横倒しにされ、7号墳は石材がすべて運び出されている。4号墳・8号墳については石室が完全に破壊されている。4号墳の石室は調査地を北西方向から南東方向へはしる溝状の遺構によって破壊され、3号墳・5号墳の周溝も一部破壊されている。8号墳の石室については、現状の場所が隣接する畠との境界付近であり、もともと傾斜地であったものを造成を行い、段をつけて畠としているため、4層自体検出できなかった。残存する周溝の上部はあぜ道となっていたためトレンチャーによる搅乱がなく遺物は完形のものが残されている。5号墳も石室・周溝が、隣接する畠の削平時に破壊されている。

溝状遺構については性格不明であるが、古墳との切り合いから明らかに古墳の後にできたものであり、3層の土が流れ込んでいること、遺構内出土の遺物に中世のものが入らないこと、また、渡辺康行氏によれば「自然の水路は等高線と平行には走らない」という助言を得たことから、この溝状遺構は、古墳構築後、中世までの間に何らかの目的を持って人為的に構築されたものであろう。

5層については無遺物層であるが、縄文時代の遺構は5層・6層を掘り込んでいる。



第4図 グリッド及び遺構配置図 ($S=1/200$)

第2節 繩文時代の遺構と遺物

(1) 遺構

縄文時代の包含層の直下である5層より焼土跡及び土坑が確認されている。

1. 焼土跡

検出面では不定形であるが、中心部には検出面より約80cmの掘り込みがあり、炭化物が確認された。土器などは伴っていないため時期的なことははっきりしない。検出面は不均一な暗赤褐色な色調で、部分的に鮮やかな赤褐色に硬化している。

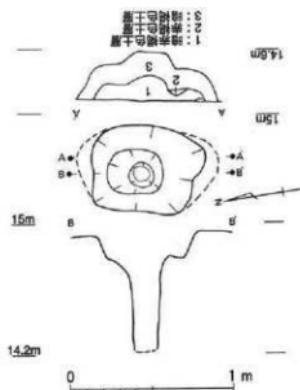
2. 土坑

土坑は、平面はややいびつな隅丸の方形を呈し、下部は段になって落ち込む。性格は不明であるが、一野式、手向式を伴っている。4層が堆積しているため縄文時代の遺構とした。

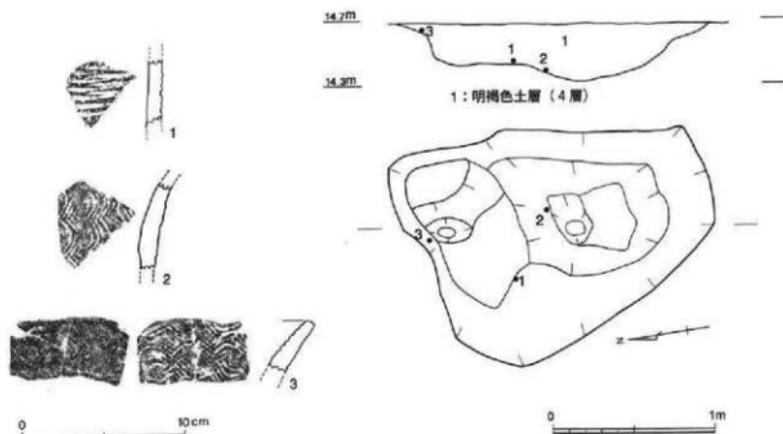
(2) 土器

土坑出土の土器

1は一野式胴部片、外面に縦方向の条痕を施したのち横位の条痕を施す。胎土は内面黄褐色、外面は赤みがかった黄褐色を呈する。2・3は手向式。3は口縁部片で、内面に山形の押型文を施す。2は頸部で、内面にやや丸みがかった縱位の山形の押型文を施す。



第5図 焼土跡実測図 (S=1/30)



第6図 不明土坑出土土器 (S=1/3) 及び実測図 (S=1/30)

4層出土の土器（第7図 3~25）

4~15は一野式である。すべて外面に縦方向の条痕を施した後、横方向の条痕を施す4~8は口縁部片。4~6は残存部が垂直に立ち上がり、7・8はわずかに外反する。4は縦の条痕を施した後、5条一組の横方向の条痕を施し、下部は波状の条痕を施す。口唇部から口縁内部にかけてヘラナデ調整を行う。胎土は内外面ともに黄褐色で外面はやや灰色をおびる。5は縦の条痕が薄く残され、器壁を非常に薄く削り出す。内面は斜めのヘラ削りのあと横・斜めに丁寧なヘラナデ調整を施す。内面黄褐色、外面赤褐色の胎土を呈す。6は8条一組の条痕を施す。胎土は内外面ともに淡黄褐色。内面は上部が横、下部は斜めのヘラナデ調整を施す。7は7条一組の条痕を施し一組ずつの間が幅広く残される。口唇部はヘラ削り調整。胎土は淡黄褐色で、内外面から補修孔を穿つ。8は横位と斜めに条痕を施す。口唇内部付近は雑な作りで、下部ではナデ調整を施す。胎土は灰黄色。9~15は胴部片。9は下部が無文となり調整もされていない。内面は下部から上部へ斜めのヘラ削りを行った後、上部は縦のヘラナデ調整を施す。灰褐色の胎土を呈し、小石を多く混入しどちらかといえば粗製。10は摩耗が激しく細部がはっきりとしない。図の位置では内面下部にヘラナデ調整を施すが、他者については口唇部付近にヘラナデ調整が施されるため上下が逆の可能性がある。灰黄色の胎土を呈す。11は直線的な条痕で、内面はヘラ削り調整を施す。胎土は暗赤褐色。12は横位の条痕旗文部と無文部の境で縦の条痕がはっきり残る。縦の条痕は6条一組であるが、横は若干条痕の幅に差があり、同一の原体か判断できない。内面は下方から上方へ斜めにヘラ削りの後、縦方向にヘラナデ調整を行う。胎土は赤褐色。13は外面は丁寧な作りで、無文の部分にはナデ調整を施す。内面はヘラ削り、ヘラナデ調整が施される。胎土は内外面ともに赤褐色で、内面はやや黒みを帯びる。14は条痕がはっきりとしている。内面は垂直方向にヘラナデ調整を施す。他と比べて小型の器形と思われる。胎土は内外面ともに黄褐色。15は横方向にやや波状の条痕を施した後斜めの条痕を施す。内面は上部は横方向のヘラ削り、下部はナデ調整を施す。胎土は灰黄色。

16は残存部は「へ」の字の沈線が施される。櫛状の施文具で沈線を数回なぞっている。横方向から上方へ屈曲し、さらに横方向へ屈曲、ゆるやかに下方へ湾曲する。内面はヘラ削り調整を施し口唇部付近は雑な指頭押圧調整が施される。胎土は黄褐色。

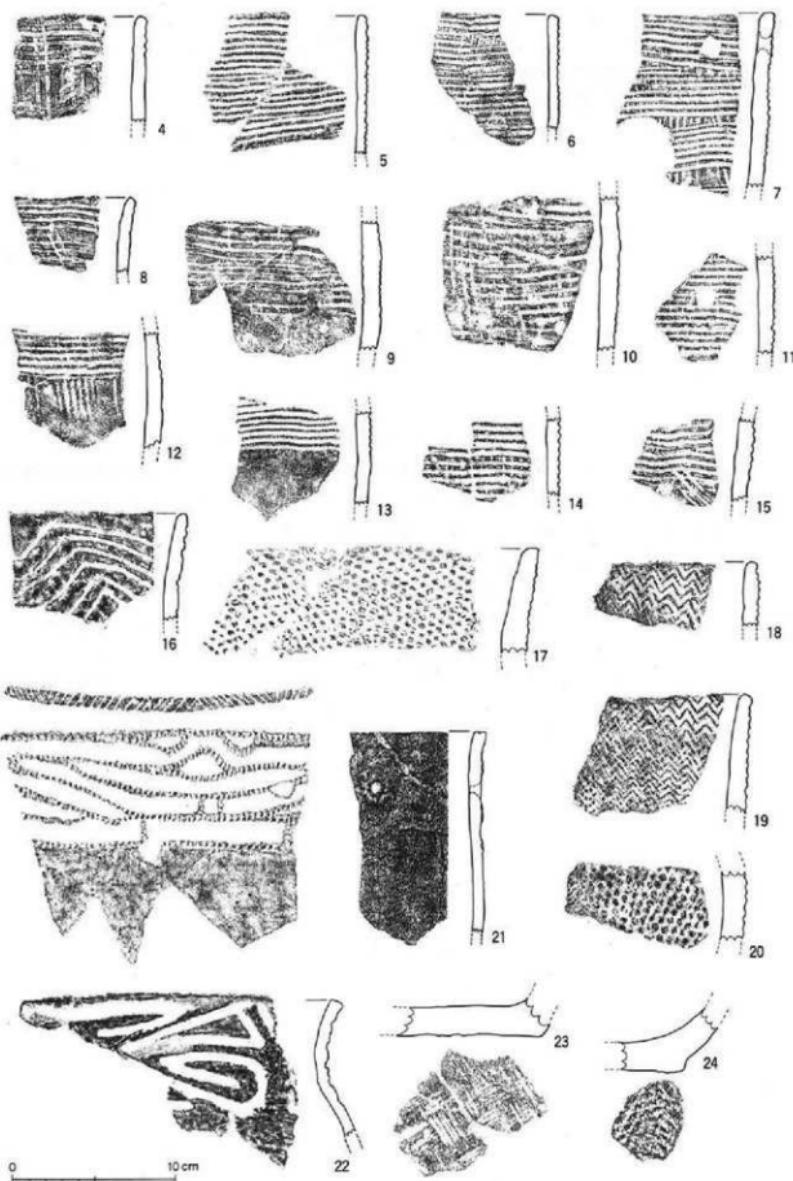
17~20は弘法原式、いずれも胎土に黒雲母が含まれる。17・20は外面に椭円の押型文を施す。17は口縁部片。やや外反しながら立ち上がり、器壁は厚い。内面は指頭押圧調整と横方向にヘラナデ調整を施す。胎土は黄褐色を呈す。20は胴部片。内面はナデ調整が施される。やや明るめの黄褐色を呈す。17・20は同一個体の可能性もある。

18・19はいずれも口縁部片で山形の押型文を施す。同一個体と思われ、外面は黄褐色、内面は淡灰色で口唇部付近は部分的に赤褐色を呈し、指頭押圧調整、ヘラナデ調整を施す。19は外面口唇部付近にやや大振りな山形文を施す。

21は並木式。胎土中に滑石粉を含み表面は滑らかである。平坦な口唇部に連続的な沈線を施し、外面に幅広の凹線を施した後刺突文を施す。胎土は黄褐色。外面から補修孔を穿つ。

22は口縁部で「く」の字状に外反し、平坦な口唇部。直線的な凹線が施される。内外面ナデ調整。胎土は角閃石、石英などを多量に含み非常にもろく、口縁部外面が褐色で、それ以外は淡黒色を呈す。

23・24は弘法原式の底部片。23は底面に網代压痕を施し、赤褐色を呈す。24は外面は指頭押圧調整を施し、底面に燃糸原体による押捺压痕が施される。胎土は黄褐色で石英粒を多量に含む。



第7図 4層出土土器 ($S=1/3$)

25は尖底の底部片。胎土は淡赤褐色。

1～3層出土の土器（第8図 26～54）

26～30は一野式の土器である。26～28は口縁部片。26は口唇部が膨らみ、器壁は厚めである。外面は直線的な条痕を施し、口唇部付近を欠損している。内面はナデ調整。胎土は黄褐色。27は膨らみ気味に直線的に立ち上がる。平坦な口唇部を持ち、口唇部から間を開けて波状の条痕を施す。胎土は内面が暗褐色、外面は黒褐色。28は他と比べて条痕が深く、16と施文方法が似る。口唇部はわずかに外反する。口唇部から内面にかけてヘラナデ調整を施す。胎土は内面口唇部付近は赤褐色で下部は淡灰色、外面は暗褐色を呈す。29・30は胴部片である。29は摩耗が著しい。上部欠損部からやや外反するようである。胎土は内外面ともに黄褐色。30は横方向の条痕は7状一組か。7と同様に一組ずつの間が幅広く残される。下部は継ぐ条痕のみとなるが、横方向の条痕を施文途中で止めている。下部は若干内湾する。内面は継ぐ方向にヘラ削りを行い、その後横ナデ調整を施す。胎土は内面は赤褐色、外面は暗褐色を呈す。

31は弘法原式の胴部片。外面は梢円の押型文を施し黒褐色を呈す。内面は黄褐色。

32・33は手向山式。32は口縁部片で平坦な口唇部。内面は横位の菱形、外面は継位の菱形の文様を施す。胎土は内外面とも黄褐色。33は外面は継位に間隔びした山形押型文を施す。胎土は赤褐色。

34・35は並木系か。34は口縁部片で口唇部に爪による沈線が施される。内外面は複雑なヘラナデ調整。胎土は内面は灰褐色、外面は黒褐色。35は胎土に滑石粉を含み、外面と口唇部に二列一組の刺突文が施される。胎土は黄褐色を呈し滑石粉により白く光沢する。

36・37は並木式の口縁部片。36は外反する波状口縁で、口唇部に不規則な交差する刻目を施す。内外面は無文。胎土は内面は灰褐色。外面は黄褐色を呈し石英を多量に含む。37は波状口縁で内湾気味に立ち上がる。口唇部は刻目を施し、内外面はナデ調整の後、刺突文を施す。内面は灰褐色、外面は赤褐色の胎土を呈す。

38は阿高式の口縁部片。わずかに外反し、口唇部に凹線を施す。胎土は内面は暗黄褐色、外面は黒褐色を呈す。39は胴部片。直線的な沈線の組み合わせの文様で、継やかに外反している。内面はヘラ削り、外面はナデ調整。内面は灰褐色、外面は淡黒色を呈す。

40は口縁部片。継方向の沈線を施し、口唇部は複雑な構造で波状口縁を作り出そうとしている。内外面はナデ調整を施すが調整は荒い。淡黒色の胎土を呈し、22とよく似る。

41は口縁部片。外面に継ぐ沈線と欠損してわかりにくいか下部に横方向の沈線が施される。赤褐色の胎土を呈す。

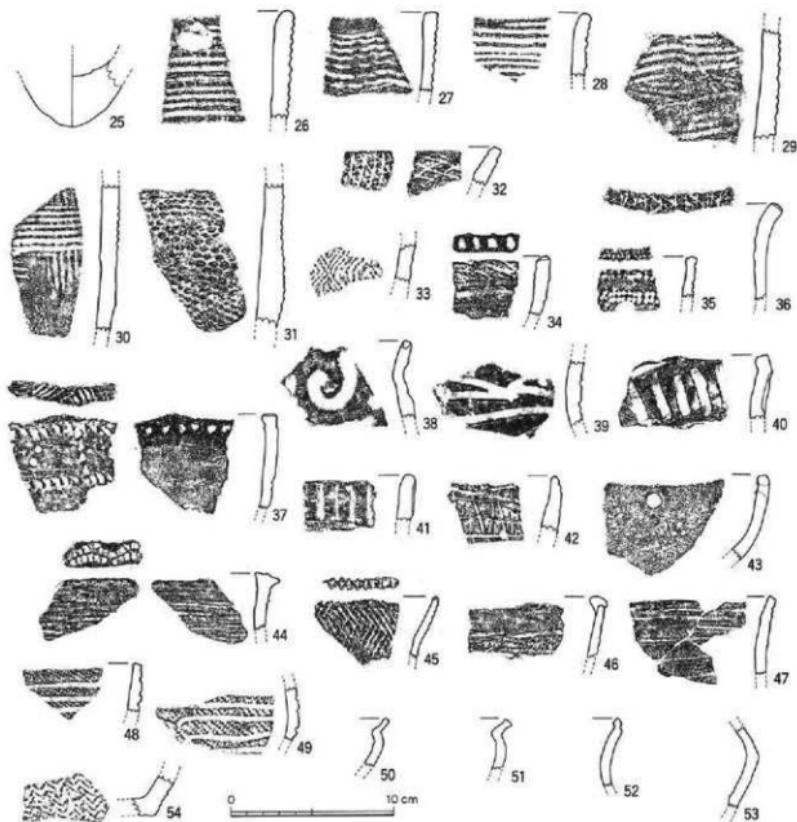
42は口縁部片。外面は格子状の沈線を施す。口唇部は施文後に押圧調整によりとがり気味に作り出し、波状口縁となる。胎土は赤褐色。

43は焼成前に穿孔を行っている。石英などの微少な細流を多量に含み灰褐色の胎土を呈する。

44は口唇部が極端に広がり平坦となり、二列の連続した刺突文を波状に施す。内外面はヘラ削り調整、胎土は内外面ともに黒褐色を呈す。

45は口縁部片。外反した後内湾しながら立ち上がる。口唇部に刻目を施し、外面は連続的な刺突文を格子状に施す。胎土は黄褐色を呈す。

48・49は三万田式。48は口縁部片。磨消繩文を施した後横走る沈線を施す。胎土は灰黄色。49は胴部片でX字文を施す。内面は灰黒色、外面は赤褐色の胎土を呈する。



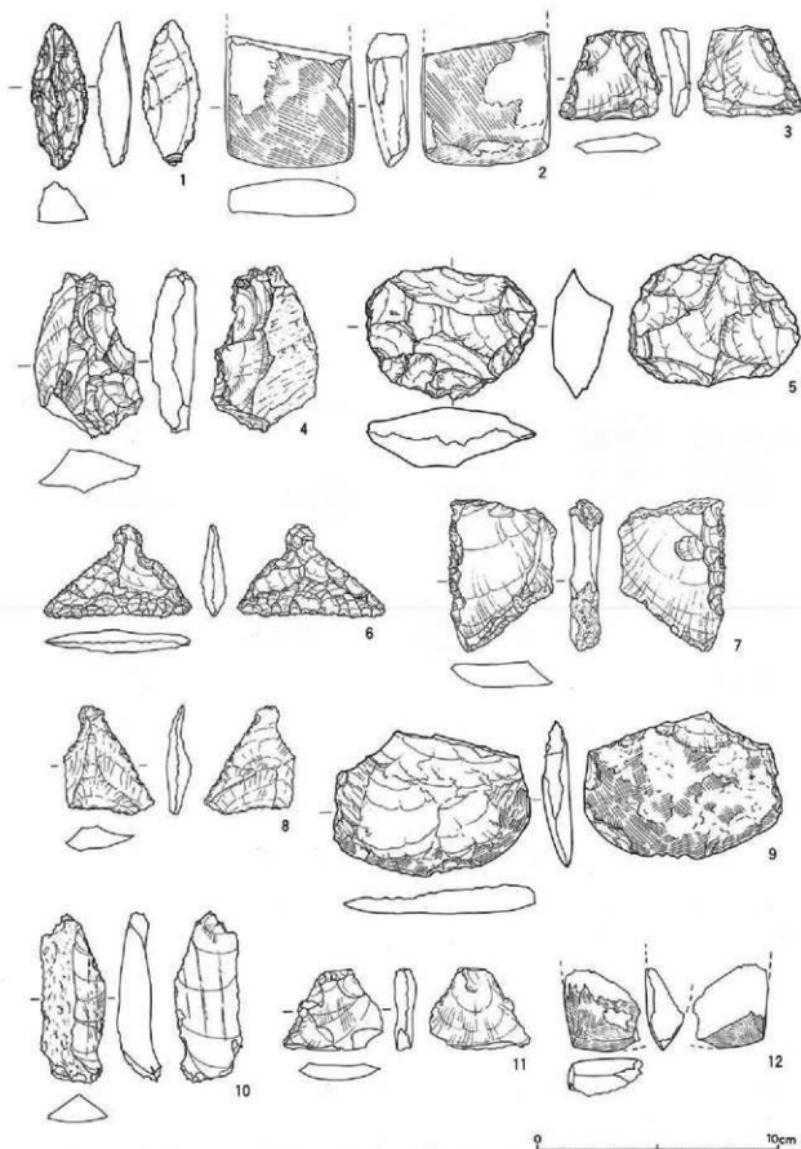
第8図 4層・1～3層出土土器 (S=1/3)

46・47・50～53は晩期の土器。46は裸石原式の口縁部片。口縁部にいびつなリボン状の突起を張り付け、外面はリボン状の突起から放射状に広がる沈線を施す。

50～53・47は黒川式の口縁部片。50は全体的に丸みを帯びたつくりで胴部・頸部のくびれ部分をわずかに削りだす。内外面ともに黄灰色、内面は黒みが強い。51は平坦な口唇部を持ち、内外面ともに丁寧に研磨され、赤褐色の胎土を呈す。52は口縁部に沈線を施しきれを強調している。内外面にヘラナデ調整を施し、内面は灰黄色、外面は黄白色の胎土を呈す。

47はわずかに外反し、外面は数条の沈線が入る。赤褐色の胎土を呈し内面は研磨されている。53は「く」の字に内湾する胴部片であり、47と同一個体と思われる。

54は弘法原式の底部片。底面付近まで山形押型文が施され、内面は灰黄色、外面は黄褐色の胎土を呈す。



第9図 石器 ($S=1/2$)

(3) 石器

4層出土の石器（第9図 2～5）

1は三稜尖頭器である。漆黒良質の黒曜石の横長薄片を素材とする。大まかな成形後細部調整を施し、柳葉形で基部裏面加工を施す。稜上調整を行い断面三角形となる。焼土跡付近での出土であるが出土地点は耕作による搅乱を受けている。

2は固結度の強い堆積岩を素材とする磨製石斧刃部片。側縁が平行し、弧状の刃部で片刃に近い。

3は玄武岩製の削器。左側縁に直線的な刃部を作り出し、全体的に摩耗している。

4は腰岳産の黒曜石製の石核。大型・厚手の石核から剥離された薄片素材の石核である。主要剥離面から多方向に雑な薄片剥離を行い、自然面側からも剥離を行っている。

5は玄武岩製の大型厚手の薄片を利用した打製収穫具。全面に大まかな剥離を行い、下縁に弧状の刃部を作り出す。縄文晩期後半の物であろう。

3層出土の石器（第9図 6～9・11）

6は石匙。両面加工が行われ、刃部と摘みに細かな調整が施される。玄武岩製。

7・8・11は玄武岩製の削器。7は灰黒色の玄武岩製で、大型の縱長薄片を素材とし、自然面から剥離されている。左側縁に直線的な刃部を持つ。調整は刃部付近に集中する。

8は右側縁が刃部となる。下縁にも二次加工を施し、上縁を摘みとすれば石匙の未製品の可能性もあるが、スクレイパーとしておく。灰黒色の玄武岩製。

11は主要剥離面左側縁に微細な使用痕が残る。淡黒色の玄武岩製。

9は安山岩製の薄片を利用した石包丁形石器。主要剥離面に大まかな調整を行い、下縁に弧状の刃部を持ち、刃部を中心に使用による摩耗が著しい。

その他の石器（第9図 10・12）

10は腰岳産の黒曜石の縱長薄片。左側縁に微細な使用痕が残る。12は蛇紋岩製の磨製石斧刃部片。残存部は全面に研磨される。

（参考文献）

- 小林達雄編 1988 「縄文土器大観」 1 草創期早期前期 小学館
小林達雄編 1988 「縄文土器大観」 3 中期Ⅱ 小学館
小林達雄編 1988 「縄文土器大観」 4 後期晩期続縄文 小学館
浦田和彦編 1992 「一野遺跡」（有明町文化財報告書第11集）有明町教育委員会
大川清・鈴木公雄・工業普通編 1996 「日本土器辞典」 雄山閣
長崎県教育委員会 1997 「原始古代の長崎県」 資料編Ⅱ
水ノ江和同 1998 「九州における押型文土器の地域性」「九州の押型文土器 一論功編一」
縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
渡辺康行 1999 「長崎県における縄文早期研究の現状と課題 一押型文土器出土遺跡を中心として」
『西海考古』創刊号 西海考古同人会
渡辺康行 1999 「一野式・弘法原式の設定をめぐって」『西海考古』創刊号 西海考古同人会

第3節 古 墳 群

今回の調査で検出された古墳は計8基を数え、すべて周溝をもつ古墳に復元できる。墳丘は地山面まですでに失われており、地山に掘りこまれた周溝を検出したのみであるが、埋葬施設の堀方や周溝覆土に落ち込んだ土器など貴重な資料を残しており、以下に周溝・埋葬施設の構造・出土遺物についてそれぞれ概要を述べていく。

(1) 1号墳(第10~14図・写真図版7)

D11~F13にかけて検出した古墳で、範囲確認調査時に埋葬施設のみは確認し、今回の古墳に関する調査の発端となった。周溝は全周し、中心よりやや南に竪穴系横穴式石室が検出された。埋葬施設はすでに天井石が失われ、西側壁が倒され、内部は搅乱されており、副葬品などはすでに失われていた。周溝からは石室横口部前面を中心に、土師器・須恵器が集中して出土している。

埋葬施設(第11図・写真図版7)

奥壁は一石で、それを挟むように側壁が立てられ、幅75cm長さ210cmを測る規模で、北側がやや広くなる。天井石はそれほど大きなものは想定できない。東側壁の根石は三石、西側壁では二石のみの構成であり、根石の高さは東西両側壁で異なっている。権石は幅約43cm厚さ約23cmの下部に重心部分がくるように埋め、横口部から粘土を用いた丁寧な裏込めを行っている。横口部は外開きになり、梢円形の石材を用いており、それほど堅固な構造はとらないものと思われる。埋葬施設の主軸はN-2.5°-Eである。西側壁2石に硬質の砂岩を用いて、他はすべて雲仙産の安山岩を用いている。

床面の検出は困難を極めたが、土層の状況から3層上面の海拔約13.80m付近に想定できた。横口部と石室床面との比高差は約25~30cmを測り、床面が低い。

堀方は石室の平面形に合わせて掘られ長さ3.7m幅2.5mを測り、横口部分でくびれる形を呈する。横口部分には袖石が立つ構造をとらず、土ではなく石で裏込めを行い横口の空洞部分を支える構造と思われる。

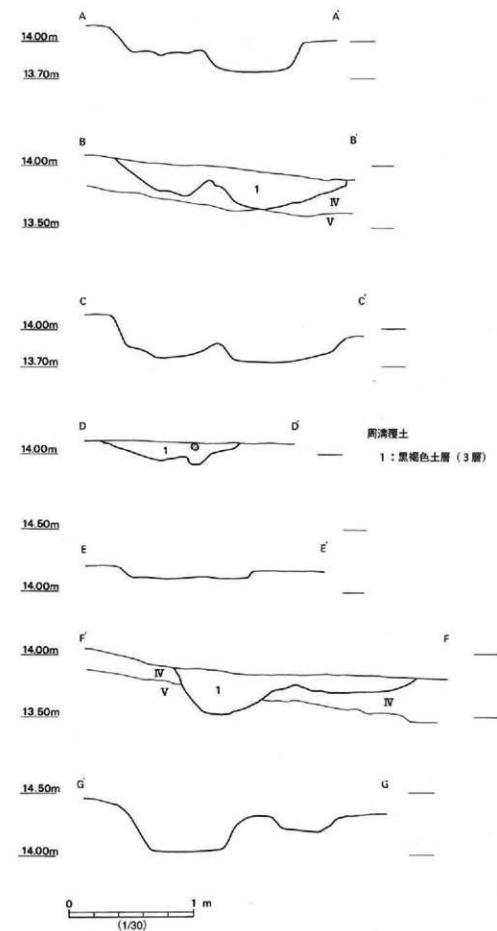
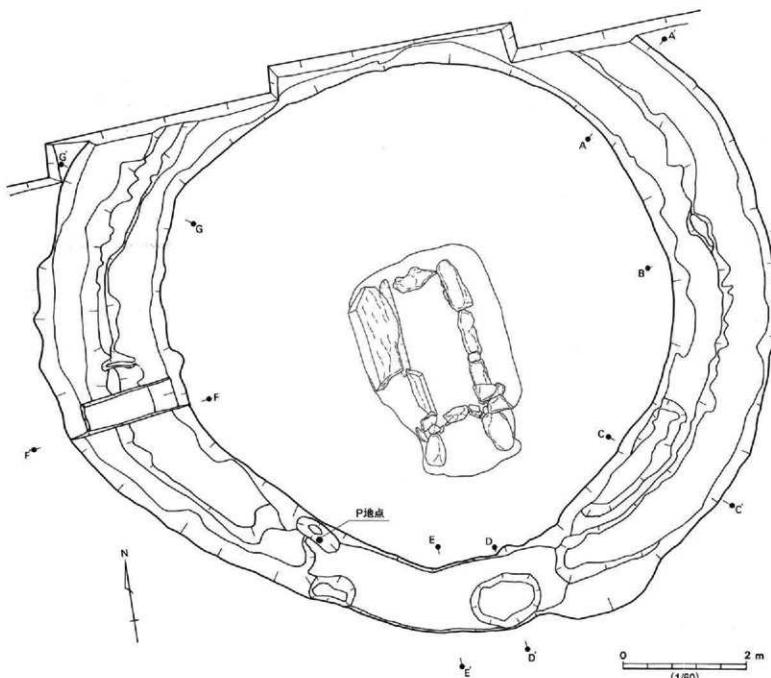
側壁と堀方の間には粘土や粘性のある黒褐色土が交互に入れ込まれ、根石上面付近で水平面を保っている。その上には明灰色粘土が帯状に敷かれており、その上にのる石材との目張りの役割を果たすものである。

同様な石材の組み方を行い、堀方や横口部の構造に共通性が多いものに、前島古墳群7号墳の竪穴系横口式石室がある。^[31] 石室規模もほとんど同じであるが、中村編年1~2~3期に位置づけられる龜が石室内から出土しており、時期は先行するものである。

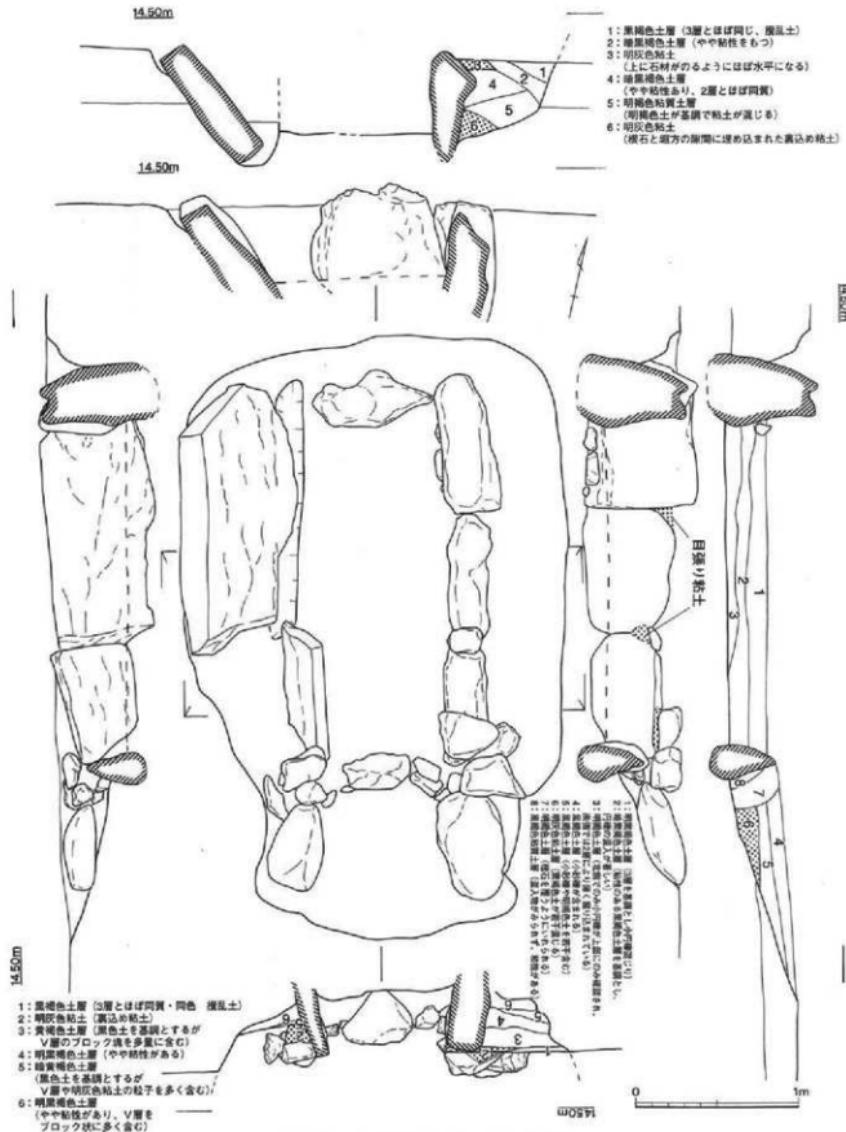
他例として長崎市曲崎古墳群があげられる。^[32] 横口部前面の構造は不明であるが、石室規模が共通している。しかし、袖石を立てているため構造的には1号墳埋葬施設に後続するものであろう。

周溝(第10図・写真図版7)

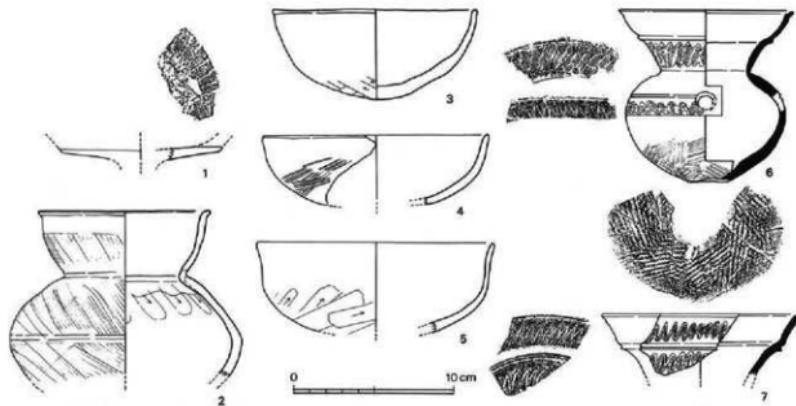
東西方向に長軸をもつ梢円形を呈しており、東西約11.6m南北約9.5m以上を測る。検出面最大幅は西側で約2.0mを測り、南側が狭くなり約1.05mを測る。検出面の海拔は南側立ち上がり付近で14.186m、西側で14.416m、北西側で14.44m、北東側で13.989m、東側で13.877mを測り、北西から東側に傾いている。周溝底の海拔は、南側で14.13m、南東側で13.86m、東側で13.7m、北東側で13.892m、北西側で14.062m、西側で14.054mを測り、西から東に傾いており、南側のみは14.13m付近で平坦面をつくり出している。南側には約3m幅で、土橋状の平坦面をつくっており、平均的な周溝底よりも浅く掘り残している。



第10図 1号墳 周溝及び土層図 (1/60・1/30)



第11図 1号墳埋葬施設展開図 (1/30)

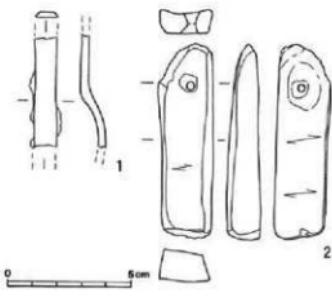


第12図 1号墳周溝出土物 (1/3)

第1表 1号墳出土土器観察表 (第12図1~7)

出土位置(図版番号)	種別	法量(cm)	形態的特徴	技術的特徴	胎土/色調
1号墳 (1-1)	土器部 高環	残存高: 1 径: 10	環部下半が水平に開く部の後は比較的明瞭である	内面: 横ナデ	金雲母・カセシ石系色板・白色粒が多い
1号墳 (1-3)	土器部 环	高: 5.6 径: 12.6 深: 4.75	丸底で口縁部は直立し、端部は丸い比較的深く、底部にかけて器壁が厚く造られる	内面: 不定方向のナデの後、口縁部の横ナデ外縁は底面に不定方向のナックリが残り、口縁部近くは横ナデ	金雲母・白色粒・カクセン石など多く0.5cm角の石英も含む 浅灰色10YR 8/3 ~ 4
1号墳 (1-4)	土器部 环	残存高: 4.3 径: 14.0 深: 4.5未満	直立気味に立ち上がる口縁部で端部は丸い底部にかけて厚く造られる	内面は横ナデ、外縁は底部下半は網毛目があり、口縁部は横ナデ	浅灰色10YR 8/3 ~ 4 金雲母・白色粒・カクセン石などが多い
1号墳 (1-5)	土器部 环	残存高: 5.5 径: 14.6 深: 5.5未満	直立気味の口縁部で端部は外反する比較的深く、底部にかけて器壁が厚く造られる	内面は横ナデ及び斜位のナデ、外縁は斜位下半に不定方向の手持ちヘラ削りがあり、口縁部は横ナデ	金雲母を多く含み、白色粒・カクセン石などが少く見られる 5Y R 7/3
1号墳 (1-2)	土器部 環	残存高: 10.5 口径: 10.6 底径: 7.5 側面最大径: 14.4 口縁部高: 4.0	口縁部は直立直上で急激に広がり、内傾しながら立ち上がり端部で外反する底部中段に最大径がある	全体に斜位の網毛目が施された後、口縫部と頭部をして底部中心にそれぞれ横ナデが施される。内面は底部下半にヘラ削りが施され、全体的にナデが施されたり直が施されている	金雲母・白色粒・カクセン石など多い 外縁は暗色2.5Y R 6/8下半に黒斑あり内面は底部から頭部にかけて黒斑が見られる
1号墳 (1-6)	頸部部 環	残存高: 10.6 口径: 10.6 底径: 5.4 側面最大径: 9.8 口縁部高: 3.75	小型の窓で側面最大径と口縁部径が近く、口縁部は直高の約1/3を占める口縁部は二重口縁となり下段に纏かし縫接法状況を示す底部には中央に二つの凹部を引きその間に櫛状皮状文を施す	底部外縁には縫合用の平行引手跡が残る。内部はやや明るい色を呈する口縫部外縁から頭部にかけて自然施釉がある	灰褐色7.5Y R 6/1 内部はやや明るい色を呈する口縫部外縁から頭部にかけて自然施釉がある
1号墳 (1-7)	頸部部 環	残存高: 3.8 復元径: 12.2	小型の窓で頭部の窓がはさむしている二重口縁の頭部部径は推定で約5cm程度を測る。縫接法による頭部部はがむら頭部部はがむらの影響を防ぐ。1~5cm間隔の形態である	底部外縫の二段ともに縫合縫接法状況がみられ、頭部の窓がはさむりあるいは既往に修理が施されている	白色粒を多く含み、黄白色粒が少量ある 灰色5Y R 4/1 口縫部外縁全体に自然施釉が厚くかかる

掘り込みは南側を除いて中央に稜を残して掘り込まれている。セクション図(第10図右側)では、稜の内側は平坦面を持ち、外側は深く掘り込まれていることが確認できる。それぞれの覆土は同じ黒褐色土である。稜は周溝の外周に沿うように中央につけられるが、南側では土橋状の北端部分に収束している。稜の外側のみが土橋状の部分に対応しているので、稜の内側は最終的には周溝ではなく、墳丘内に入り込むものとおもわれる。墳丘基壇面を盛る際に重要な役割を果たしているものと思われるが、具体的な目的は明らかにできなかった。今後類例を収集し追求せねばならない遺構である。



第13図 1号墳鉄製品・砾石 (1/2)

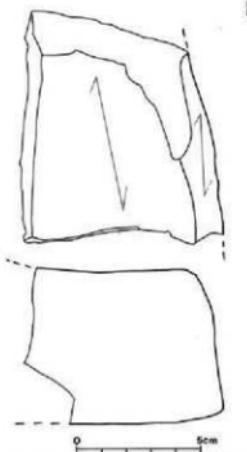
7がみられる。3以外は破片が散乱して出土し、7などは口縁部片のみの出土であった。

土師器高坏は比較的径の小さい部類である。小型の壺は直立する口縁部で胴部はまるく張る。坏は口縁部が外反するものはみられず直立するもので、比較的深みがある。図示したものの他には、小型壺の口縁部片が1点ある。直に開く口縁部で端部は外反しない特徴をもつ。

6は口縁部径と胴部最大径がほぼ同じで口縁部と胴部外面に細く丁寧な櫛描波状文を施す。底部外面は平行叩き痕を残し、内面は丁寧になでられる。底部は焼成後に穿孔される。口縁部高と胴部高がほぼ同じで、口径と胴部最大径もほぼ同じである。形態的特徴や、底部に平行叩き痕がのこる点などから、陶邑中村幅年1~4期にあたるものであろう。⁽¹³⁾

他に携帯用の砥石が1点出土している。(第13図 2) 硬質の砂岩製を用い、細長いつくりをしており両面から穿孔された穴を1つもつ。ほかに周溝から軟質の砂岩製の大型砥石もみられる。(第14図)

- 註1 福田一志『前島古墳群II』長崎県時津町教育委員会1994
- 2 下川達彌『曲崎古墳群調査報告書』長崎市教育委員会1977
- 3 中村 浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房(東京) 1981



第14図 1号墳周溝出土砾石 (1/2)

出土遺物 (第12~14図)

石室擾乱覆土からは細い板状の鉄片(第13図1)が1点検出された。幅9mm厚さ2mm、断面台形で屈曲部をもつ。

周溝覆土からは土師器・須恵器が出土しており、南北側を中心に出土している。(第12図)2はG-G'付近、6・7はF-F'付近にそれぞれ破片で集中して出土しており、3のみは石室前面西(P点)から完形品で出土している。

土師器では高坏壺部片1、直立する口縁部をもつ小型壺2、壺3~5、須恵器では小型の壺2点6・7がみられる。

7がみられる。3以外は破片が散乱して出土し、7などは口縁部片のみの出土であった。

土師器高坏は比較的径の小さい部類である。小型の壺は直立する口縁部で胴部はまるく張る。坏は

口縁部が外反するものはみられず直立するもので、比較的深みがある。図示したものの他には、小型

壺の口縁部片が1点ある。直に開く口縁部で端部は外反しない特徴をもつ。

6は口縁部径と胴部最大径がほぼ同じで口縁部と胴部外面に細く丁寧な櫛描波状文を施す。底部外面は平行叩き痕を残し、内面は丁寧になでられる。底部は焼成後に穿孔される。口縁部高と胴部高がほぼ同じで、口径と胴部最大径もほぼ同じである。形態的特徴や、底部に平行叩き痕がのこる点などから、陶邑中村幅年1~4期にあたるものであろう。⁽¹³⁾

他に携帯用の砥石が1点出土している。(第13図 2) 硬質の砂岩製を用い、細長いつくりをしており両面から穿孔された穴を1つもつ。ほかに周溝から軟質の砂岩製の大型砥石もみられる。(第14図)

(2) 2号墳 (第15~18図・写真図版8)

G10~H12にかけて検出され、復元径で約8mを測る円墳である。中心に箱式石棺を設け、内部は搅乱されていたが、搅乱土砂内から長頸繖4本が出土した。ほかに枕石2石が位置する付近から、齒骨が複数乱れた状態で出土している。周溝からは東側に土師器が集中して出土し、周溝底から携帶用の砥石が1点出土した。

埋葬施設 (第17図・写真図版8)

南北にはば合わせた南北軸の箱式石棺を埋葬施設とする。内法で南北約2m東西幅約40cmを測り、北側がやや広い。堀方は南北約2.85m東西約1.3mを測る。北小口石を挟み込むように側壁をおき、東西とも3石ずつである。南小口右は小口に蓋をするように置かれ、堀方との間に一石埋め込んでいる。側壁と堀方との間には粘土と黒褐色土を交互に埋め込んでおり、根石最高点のレベルに合わせて帯状に粘土を敷いている。その上にのせる石材との間の目張り粘土であろう。埋葬施設の主軸はN-13°-Wである。石材はすべて雲仙産安山岩を用いている。

周溝 (第16図・写真図版8)

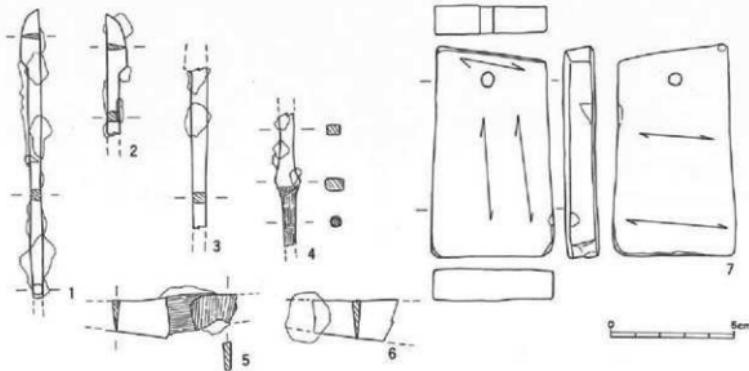
東側は約6m、西側は1/2周ほどが検出され、深さは10cm程度で残りは良くない。検出面は東から西に傾いており、周溝底も東と西とでは約10cmほどの高低差を持つ。南北側および北東側部分は掘られていなかった可能性もある。周溝西側で浮いた状態で、土師器が出土している。

出土遺物 (第15図・第18図・写真図版8)

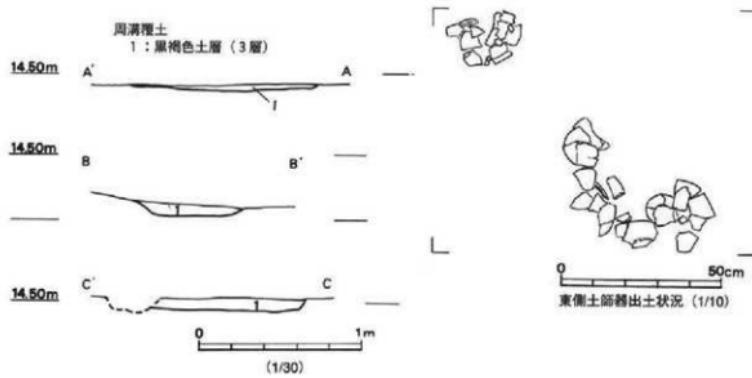
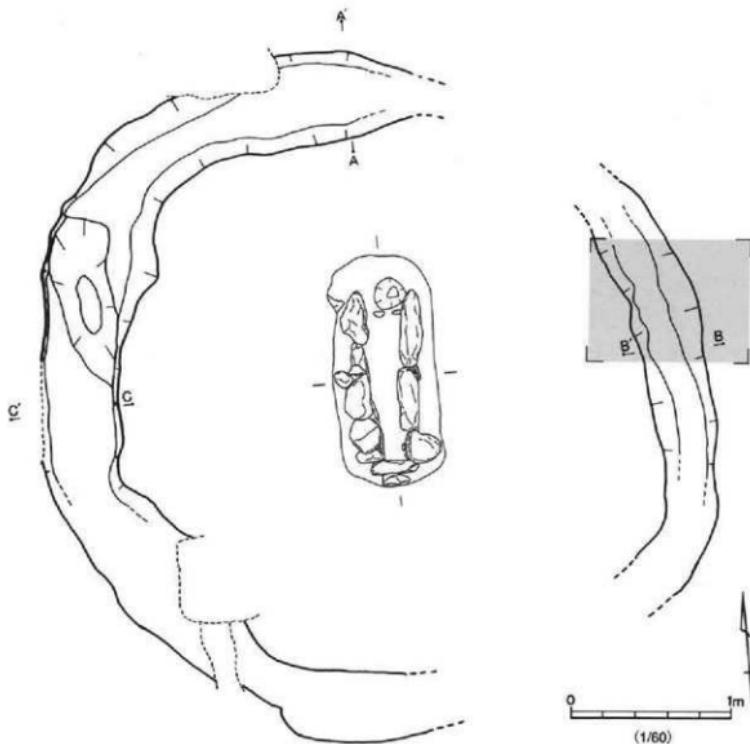
石室内から4個体分の長頸繖が搅乱覆土内より一括で出土している。(第15図1~4) 片刃で繖身から頭部まで1で12cm以上を測り、4にみる闊を持つタイプに復元できる。

周溝西側、石棺の真西から西北にあたる部分で土師器が集中して出土している。(第18図)

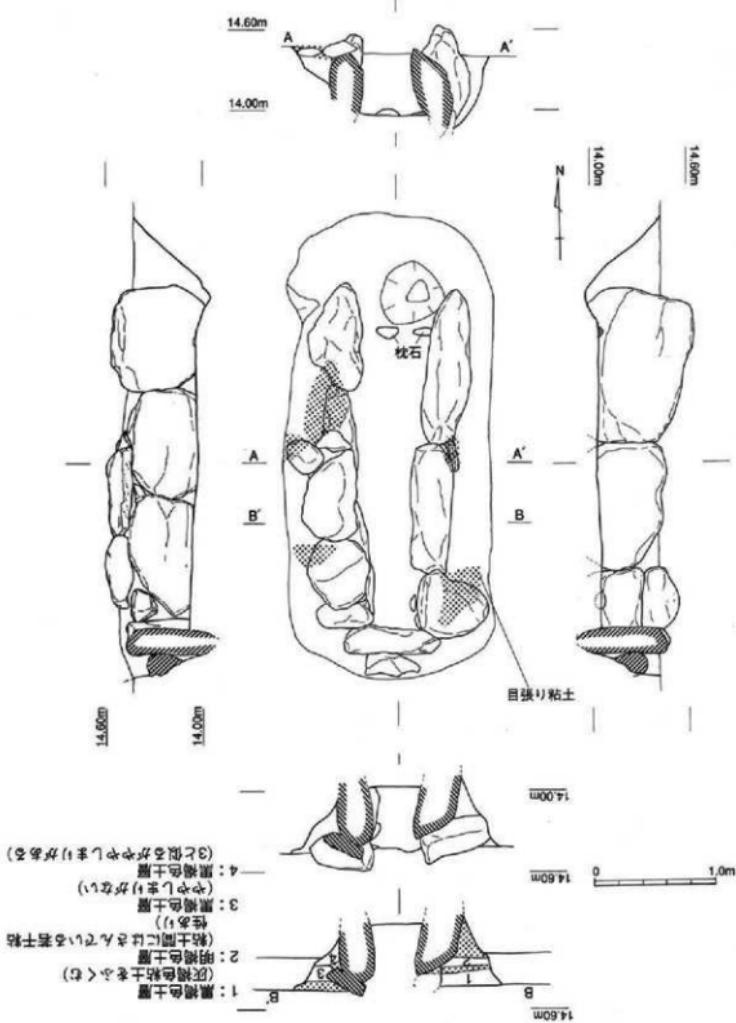
図示したものの他に高環片1、小型の甕の頭部片1・胴部片1が出土している。甕頭部片は直立する口縁形態に復元できる。合計で、高環7点、甕1、小型甕1、小型壺1が墳丘西側に供獻されていたものと思われる。



第15図 2号墳出土遺物① (1~4: 石棺出土 5~7: 周溝出土) (1/2)



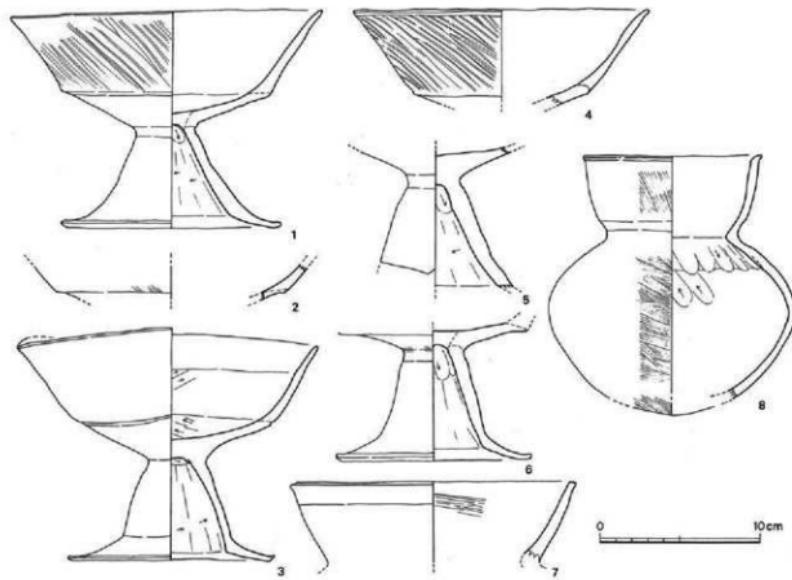
第16図 2号墳周溝・遺物出土状況 (1/60・1/30・1/10)



第17図 2号墳埋葬施設展開図 (1/30)

周溝覆土から刀子片2個体分が出土した。(第15図5~6) 5では柄に樹皮が2~3重に巻かれているのが確認でき一部木質も残る。切っ先部分は失われている。

また、土師器集中区すぐ南の周溝底から携帯用の砥石(7)が1点出土している。長方形の手のひらサイズのもので、砂岩製で硬質である。片面穿孔で、1号墳出土砥石に比べると非常に丁寧なつくりである。



第18図 2号墳出土遺物② (1/3)

第2表 2号墳出土土器観察表 (第18図1~8)

出土位置(因縁番号)	種別	法量(cm)	形態的特徴	技術的特徴	胎土/色調
2号墳(2-1)	土器器 高 环	全 高: 13.5 直径 口径: 19.1 环部外径: 12.8 环部深さ: 6.3 环 部 高: 6.8	环口縫合部: 直に立ち上がる 脚 部: 円錐状に広がり、縫合部は り返る	环部上半: 脚部の削毛調整 その最底部は横ナデ 脚部内面: 扇ナデ 脚部外側: 傾ナデ 环部との接合はソケット式で飛び出した 片柱はなぎられる	浅黄褐色10YR 8/3~4 环部内面 をもいた金面に舟が彫られていた様 子である 金雲母・カクゼン石が多く含み、赤色 粒や白色粒もみられる
2号墳(2-2)	土器器 高 环	全 高: 14.0 直径 口径: 14.0	环上半と下半との接合部の棱は削除で ある器壁は薄く造られる	内外共とも横ナデで、环部上半と下半 との接合部には削毛目が残る	浅褐色10YR 8/3~4 内面は舟 が彫られた8.5YR 7/6~8 金雲母・カクゼン石多く含み、白色 粒もみられる
2号墳(2-3)	土器器 高 环	全 高: 14.1 直径 口径: 18.3 环部外径: 11.4 脚 部: 12.6 环 部 深さ: 6.7 环 部 高: 8.0	脚 部: 円錐状に広がり。縫合部は反 り返る 环部と脚部の対は同じくらい 器壁は比較的厚い	环部内面: 不定方向の荒い削り 口縫合部外側: 橫ナデ 脚部内面: 右脚部の削り 脚部外側: 橫ナデ	にぶい橙色5YR 7/4~5YR 6 で外縁がやや明るい 金雲母・カクゼン石多く含み、白 色粒もみられる
2号墳(2-4)	土器器 高 环	残 存 高: 5.8 直径 口径: 18.0 环部外径: 10.7	直に立ち上がる口縫合部で縫合部はやや外 反する器壁は厚くつくられる	内部は横ナデで、外面は斜めの削 毛目がほどこされている後、縫合部は横ナデ が施されている	胎土・色調は2-1・2と近似するが、 外縁には部分的に明赤褐色2.5YR 5 /8
2号墳(2-5)	土器器 高 环	残 存 高: 8.3	円錐状にだらだらと広がる脚部で、环 部との接合はソケット式ではない	环部下半・脚部外面: 横ナデ 脚部内面はへう削りの後、面部のみナデ	环部内面は 橙黄褐色2.5YR 8/4 环部内面は 赤褐色3.5YR 6/8
2号墳(2-6)	土器器 高 环	残 存 高: 8.0 直径 脚部: 12.0 环部外径: 11.5 脚 部 高: 6.5	环部下半は水平に開き、脚部は2-1 ほど広がらない脚部は反り返る	脚部内面は削りが施され、内部頂部の 突起部ナデによりつぶされる外縁は横 ナデである 环部内面には舟が彫られる	金雲母・角閃石・白色粒・赤色粒が多い 焼成された胎土 浅黄褐色2.5YR 8/3~8/4 金雲母・角閃石・赤色・白色粒が多い
2号墳(2-7)	土器器 高	残 存 高: 5.0 口縫合部直径: 17.4	器内に内溝し直立する口縫合部	外縁横ナデ、内面は削毛調整の後、口 縫合部を中心に横ナデが施されている	浅黄褐色2.5YR 8/4 金雲母・カクゼン石が多い
2号墳(2-8)	土器器 高	復元高: 15.9 直径 口径: 11.0 脚部: 8.0 脚部最大径: 15.1	縫合部にくびれをもち直立する口縫合部で、 縫合部は外反する口縫合部は全高の2/3 を占める脚部外径は中位にある底部 はやや尖り気味である	外縁は全体的に削毛調整が行われ、脚 部の縫合部や口縫合部の調整に横ナデ が行われる内面は削り半分は不定方向の 横ナデ、上半に斜めのナデ、口縫合部は 横ナデがみられる	灰白色7.5YR 8/1 内面は黒褐色を 呈する 金雲母を多く含み、白色粒・赤色粒を 少許含む

(3) 3号墳 (第19~23図・写真図版9)

F6~I9にかけて検出され、周溝は全周すると思われ、埋葬施設は中心よりやや南寄りで検出された。石室に用いられた石材は東側に寄せて落とし込まれており、激しい搅乱を受けていた。しかし根石掘方の状況は確認でき、そのあり方から1号墳よりもやや大きめの石室に復元できる。出土遺物は石室南面周溝内に集中している。

埋葬施設 (第21図・写真図版9)

埋葬施設は石材が東側に寄せられていたが側壁根石と檐石の堀方が確認でき、内法で長さ約2.1m、幅約1.36mに復元できる。側壁に使用されていたと思われる石材が長さ約1.4m、幅約1.2mを測り、床面と天井石との高さは1mを越えるものと思われる。石材は石室内面にあたる偏平に加工された面に赤色顔料が塗られていた。搅乱覆土内には搅乱土砂のほかに白色粘土塊が複数確認され、堀方は一部目張り粘土が残る。埋葬施設の主軸はN-7°-Eを測る。石材はすべて雲仙産安山岩である。

石室の構造は1号墳よりも大きめの石材を用いており、1号墳よりも規模の大きいものであったと思われる。檐石全面の堀方は搅乱によって不明であるが、搅乱による掘り込みが前面に及んでいないため、1号墳とおなじく堅穴系横口式石室であったと思われる。

周溝 (第20図・写真図版9)

周溝は直径11.5~11.7mを測り、幅は南側で約1.1m、深さは南西側で最も深く33cmを測る。石室の中心は周溝円周の中心から南に約1.1m寄っており、石室奥壁堀方の中心が周溝円周の中心となっている。石室は周溝に対して南に寄っているものの、石室奥壁を周溝の中心に配置して、埋葬施設が築造されたものと思われる。

周溝の検出面の海拔は、周溝北側掘り込み肩部で14.75m、北西側で14.962m、北西側で14.57m、西側で14.577m、南西側で14.525m、南側で14.899mを測り、北側から南西側に傾いている。周溝底の海拔は、北西側で14.728m、北側で14.656m、北東側で14.42m、東側で14.325m、南東側で14.852m、南側で14.848mを測り、南側がやや高く、東側が低くなる。周溝底には上記のような海拔差の他に、南側に土橋状の削り出しがあり、周溝底よりも約10cm高い台状を呈している。台状部の海拔は約14.83m付近で水平面をつくっている。ちょうど石室前面にあたり、土橋としての目的が想定できる。

遺物の出土状態 (写真図版9)

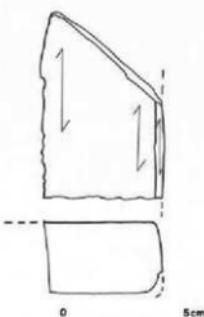
遺物は石室前面の周溝南側から集中して出土しており、土橋の西付近に集中して出土している。土師器壺6、小型の直口壺2、小型の壺1、須恵器壺蓋2、壺身2、提瓶1片が出土している。内土師器壺1個体と須恵器壺蓋1は完形品で出土し、土師器壺と小型の壺1個体、小型の壺は完形品近くに復元できた。

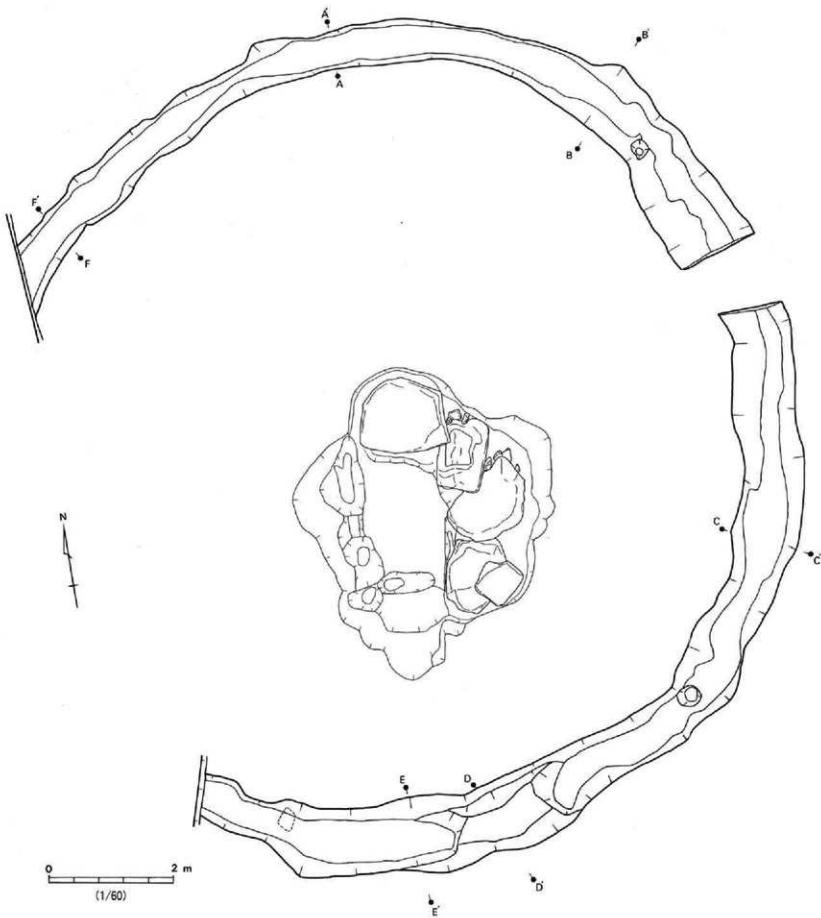
出土遺物 (第19図・第22~23図・写真図版9)

土師器 (第22図) 壺は端部が外反するもの(1)、端部外反するものの(2~6)がある。1は内外面に刷毛目が見られ、4~6には細かい丁寧なミガキが加えられている。土師器壺でミガキの技術がみられるのは3号墳出土品のみである。また、内溝する端部をもつ壺は3号墳のみにみられ、この時期に登場するものと考えられる。

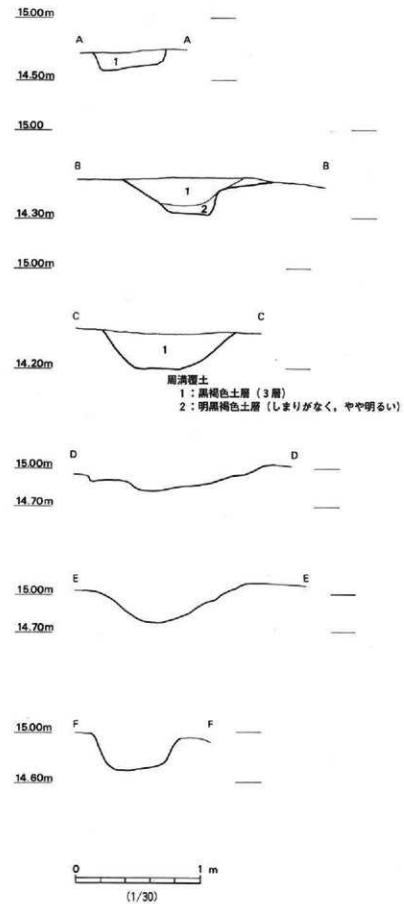
7は小型の丸底壺で、2・6・1号墳出土品に比べ、口縁部の開きが

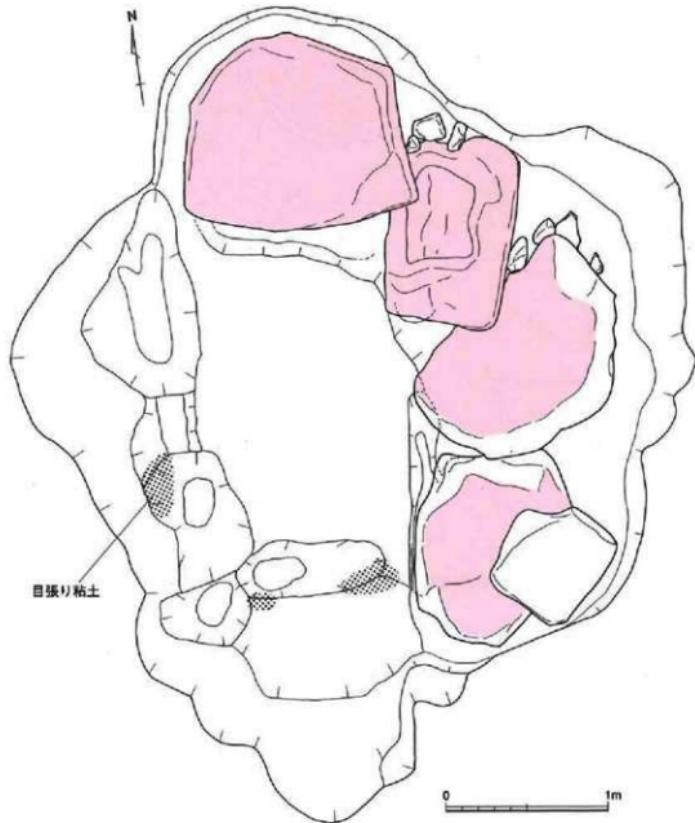
第19図 3号周溝出土砥石(1/2) 弱く直立気味であることが特徴的である。8も土師器の小型の壺である





第20図 3号墳 周溝及び土層図 (1/60・1/30)



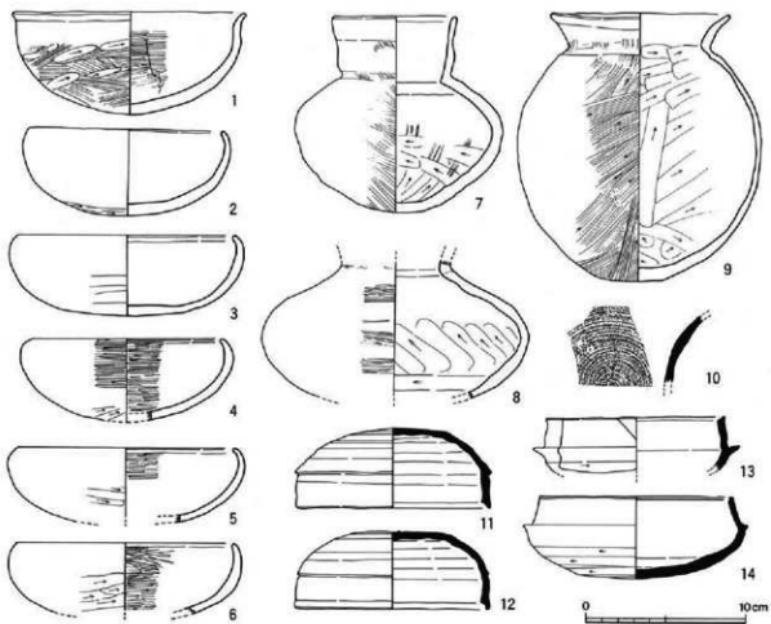


第21図 3号墳埋葬施設検出状況 (1/30・赤色顔料は配色)

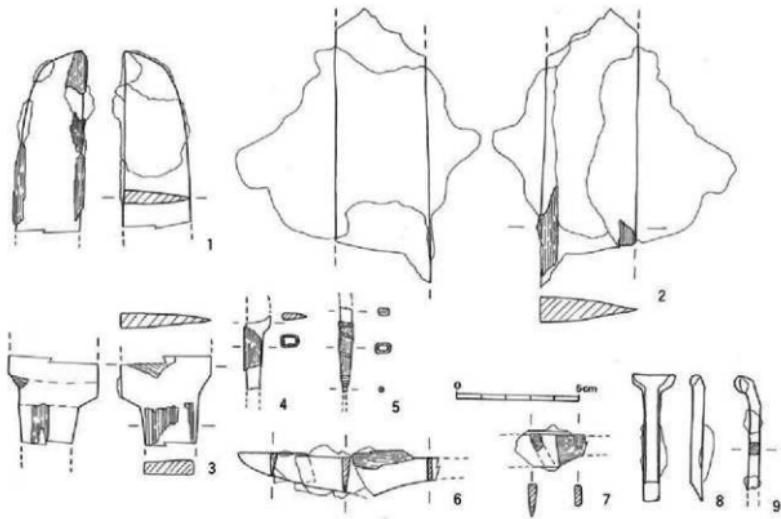
が、口縁部が失われてゐるが胴部の張りが強く、底部内面に横方向のヘラ削りがあり、外面にミガキ調整がみられるのも特徴である。

須恵器壺蓋二点は端部の縁が明瞭でしっかりしており、器腹も薄く深さもあり、5世紀代末葉（陶邑中村編年1—4～5期）に属するものであろう。口縁部から底までの高さが約2cmを測り、天井部は丸くつくれられ、器壁が均等に3～4mmにそろえられていることが特徴である。

須恵器壺身は二種あり、13のほうが壺蓋と同じような特徴を持ちセット関係と考えられる。14は口縁部径がやや大きく、立ち上がりが内溝気味で、11～13よりもやや新しい時期のものと思われるが、体部に張りがあり、立ち上がりも高く深みもあるので6世紀初頭までが下限であろう。提瓶（10）は胴部片であり、胴部が丸みを持っていることから6世紀前半代のものと考えられる。



第22図 3号墳周溝出土遺物 (1/3)



第23図 3号墳埋葬施設擾乱土中出土遺物 (1/2)

第23図は鉄製品で、2～8は周溝出土品、1は埋葬施設の搅乱土砂から出土したものである。

1は大刀の切先で残存長約7.3cm、厚さ0.5cmを測る。2も大刀であるが刀身部中程と思われ、一部に木質が残る。刃部幅は4.0cm、厚さは0.5cmを測る。3は刀での間部分で木質が残っているが、飲み口部分の構造は不明である。これらの大刀片はすべて1個体のものとは思われず、少なくとも2振の大刀が副葬されていたものと思われる。

第3表 3号墳出土器觀察表 (第22図 1～14)

出土位置	種別	法量 (cm)	形態的特徴	技術的特徴	出土色調
3号墳 (3-1) 南側集中区	土器部 环	全 高: 6.3 口 篦 部 径: 14.6 深 底: 5.7	底部は丸く口縁部は直立し、堀切が外 反する器部は口縁部近くは青いが部 門にかけて厚くなる底部内面中央がやや 窪む	外縁は網の刷毛により調整された後、 口縁部は横ナギで塗装される内部はヘラ により荒り調整が行われた後、ヘ ラ磨きが行わぬ口縁部に横ナギが残さ れる	褐色2.5YR 7/6～6/6 黒帯なし 金墨帶が多く含み、白色粒・赤色 粒も多い 焼成は良好であるが、内部は黒褐 色を呈する
3号墳 (3-2) 南側集中区	土器部 环	全 高: 5.3 口 篦 部 径: 12.0 底 大 径: 12.8 深 底: 4.6	口縁部が内傾し、比較的浅く底が丸い 器部は口縁部は厚く底部は厚く造られ てある	底盤が激しく、底面部には不定方向の ヘラ磨きがみられる	褐色2.5YR 8/8 8段部上半か ら口縁部にかけて黒帯がある 金墨帶が多く、1～2mm角の赤 色粒・白色粒が目立つ
3号墳 (3-3) 南側集中区	土器部 环	全 高: 4.9 口 篒 部 径: 13.4 底 大 径: 14.4 深 底: 4.3	口縁部が内傾し、比較的浅く底は平底 に寄りがい口縁部直下に最大径をとる 器部は横ナギがみられる	底盤が激しい。外観底部近くにヘラ 削りが、内面にはミミガキが、口縁部に は横ナギがみられる	浅米色2.5YR 8/4～4/6 金墨帶が多く、赤色粒・白色粒 が多い
3号墳 (3-4) 南側集中区	土器部 环	全 高: 5.0 口 篒 部 径: 11.8 底 大 径: 13.2 深 底: 4.5	口縁部が内傾し、比較的浅く底は平底 に寄りがい口縁部直下に最大径をとる 器部は横ナギがみられる	外観底部近くはヘラ磨き、口縁部近く はヘラミミガキで内面は全体的にヘラミ ミガキがみられる者に丁寧である	褐色2.5YR 6/6～8/6 金墨帶粒が多く、カクセン石や白 色粒も含む
3号墳 (3-5) 南側集中区	土器部 环	復 元 高: 4.7 口 篒 部 径: 13.5 底 大 径: 14.8 深 底: 4.4	丸く内傾する口縁部に丸い最大径は 口縁部直下にくる	脚部外側中位以下にはヘラ磨きがみられ て、内面は口縁部近くにヘラミミガキで内面 ができる外縁にミミガキは調理できまい る	褐色2.5YR 7/6～明褐色2.5 YR 5/5 金墨帶粒が、カクセン石が多く、白 色粒も含む
3号墳 (3-6) 南側集中区	土器部 环	残 存 高: 4.3 口 篒 部 径: 13.4 底 大 径: 14.4	丸く内傾する口縁部は最大径部分 が厚く、底部にかけて薄くなる	外観脚部の半ばはヘラ削りによりめら かに取扱っている内面は全体的にヘ ラミミガキが丁寧に行われている	褐色2.5YR 7/6～淡褐色5/5 8/4 脚部の表面はやや明るい 金墨帶粒が多く、白色粒・赤色粒 も含む
3号墳 (3-7) 南側集中区	土器部 环	全 高: 12.1 口 篒 部 径: 7.2 底 大 径: 6.7 脚 部 最大: 12.9 口 緒 部 最大: 11.0	底部近くではほぼ直立する口縁部に 丸い脚部原形部が張り出た最大径とな る口縁部は全高の1/3ほどを占め、脚 部は完全で、いる	全体的に脚部の剃毛目が時に散され るが附近にはストローカーが走る。口縁部 は横ナギで底部は中心に数枚軽に削 毛調整させたその上にナララルの脚部 には丸柱状の脚部底盤が残さる	淡米色10YR 8/4部分的に赤 褐色で脚部外側と脚部上半に部分 的に黒帯がある 金墨帶粒・白色粒・カクセン石が 多い時は普通
3号墳 (3-8) 南側集中区	土器部 环	残 存 高: 8.5 口 篒 部 径: 6.8 脚 部 最大: 16.6	脚部の張りが脚部様の二倍ほどに発達 している脚部最大径は中位以下にある	外縁は細かいヘラミミガキで行はれ、脚 部附近には削り、削毛がみられる内 面は全体的にナラミミガキされた後、底部 が削りで取扱う脚部内部は横ナギ	褐色 2.5YR 7/6～7/8 内面は淡褐色7.5YR 8/4 金墨帶粒が多い白色粒も含む
3号墳 (3-9) 南側集中区	土器部 环	全 高: 16.4 口 篒 部 径: 2.0 口 緒 部 径: 11.0 底 大 径: 8.5 脚 部 最大: 15.0	外反し脚部がさらに外反する口縁部に 中位に最大径をもつ丸い脚部原形の 中位はならなくて、底部はやや平底化 味である	脚部外側部は長いヘラトヨコの削 毛で、中位以上に口縁部は削毛が行は れると脚部内面下部にスリーカット長いヘ ラ削り、脚部は丸柱状のケズギがみられる 脚部付近がなぐられたのみで、底部は削 毛は残されて脚部底盤が残す	淡褐色10YR 8/4 口縫部から 底部にかけ外縁部分は底部内部には 灰褐色 金墨帶粒・カクセン石が多い白色粒 も含む
3号墳 (3-10) 南側集中区	須恵器 环	残 存 高: 4.0	脚部の張りがある比較的丸い形態であ る比較的丸い形態の器部の厚さは豊富である	内面にキキ、内面は明る工具あとをナ メ削りしており、丁寧な調理を行っている 内面は金属性的に横ナギで行はれた後、 脚部上部に天井井干にかけ右回転利用の ヘラカスリ(幅1-1.5cm)が行はれる内 面は右回転利用の横ナギ、内面中央には 直線的ななぐみられる	灰褐色 N 6 表面は少し白っぽい 白色粒多く含む 青色底10BG 6/1・5/1で、 外縫部に自然板がかかる カクセン石粒が少量、白色粒が含 まれる
3号墳 (3-11) 南側集中区	須恵器 环	全 高: 4.9 口 篒 部 径: 11.8 ～12.1(推定内径) 底 大 径: 2.2 脚 部 最大: 11.7 深 底: 4.5	口縁部が直下に下り、丸く深い天井井 干に接し口縁部内面の段は明瞭である 器部は厚く(4約4 mm)で厚いである 底部は厚く約4 mmで均一	全体的に丁寧な横ナギが行はれた後、 外縫部上部付近から右回転利用のヘラ カスリ(幅1-1.5cm)が行はれる内 面は右回転利用の横ナギ、内面中央には 直線的ななぐみられる	明るい灰色10Y 7/7 外面は自然 板が全面にかかる カクセン石粒が多く、白色粒や0.5 ～0.2mm角のものもある
3号墳 (3-12) 南側集中区	須恵器 环	全 高: 4.5 口 篒 部 径: 11.6 ～12.1(推定内径) 底 大 径: 2.3 脚 部 最大: 11.7 深 底: 4.3	立ち上がり受け部の崩壊が強く仕 上げられており、後づがはっきりして いる立ち上がりは内立し受け部は半平 たてにがる器部は立ち上がり約3 cm、 脚部は2 cmと薄い	全体的に丁寧な横ナギがみられ、受け 部下から右回転利用のヘラカスリがみ られるよく削らるしく上げられ、器 部も削り上げられている	灰色N 6 を呈する 白色粒を多く含む外縁は摩滅が少 ない
3号墳 (3-13) 南側集中区	須恵器 环	残 存 高: 3.3 口 篒 部 径: 11.2 ～11.5(推定内径) 底 大 径: 1.8	立ち上がり受け部の崩壊が強く仕 上げられており、後づがはっきりして いる立ち上がりは内立し受け部は半平 たてにがる器部は立ち上がり約3 cm、 脚部は2 cmと薄い	全体的に丁寧な横ナギがみられ、受け 部下から右回転利用のヘラカスリがみ られるよく削らるしく上げられ、器 部も削り上げられている	灰白色N 8 内面は特に白っぽ い外縁にやや薄い部分がみられる 白色粒・カクセン石・黄色粒など が多いやしまさりがない
3号墳 (3-14) 南側集中区	須恵器 环	全 高: 5.0 口 篒 部 径: 12.0 底 大 径: 13.8 深 底: 4.5	受け部は立ち上がり約3 cmである 内面は特に白っぽい	全体的に丁寧な横ナギがみられ、受け 部下から右回転利用のヘラカスリがみ られるよく削らるしく上げられ、器 部も削り上げられている	灰白色N 8 内面は特に白っぽ い外縁にやや薄い部分がみられる 白色粒・カクセン石・黄色粒など が多いやしまさりがない

4・5は鉄鉗で外面に木質が残っており、5は矢柄部分で桜の樹皮状のものが巻かれており、残りがよく光沢がみられる。長頭鎌である。

6・7は刀子片で、同一個体ではない。7の柄には木質部分の上に樹皮状のものが巻かれている。
8・9は不明鉄片である。

(4) 4号墳(第24~25図・写真図版10)

K10~L12にかけて検出され、埋葬施設と周溝の南北辺が大溝の掘削によって破壊されている。埋葬施設に使用された石材(雲仙産安山岩)の一部が大溝底から出土しており、2号墳とおなじく箱式石棺であった可能性が高い。東側の周溝は南側にのびず、4時で途切れている。2号墳と同じく周溝は全周しないものと思われる。

遺物は周溝東側と西側に集中して高環や坏などの土師器が浮いた状態で出土している。

周溝(第24図・写真図版10)

周溝は外周で直径およそ9mを測り、やや東西軸が長いようだがほぼ円形に復元できる。検出面の海拔は北側周溝掘り込み肩部で14.31m、東側で13.95m、南西側で13.88m、西側では14.17mを測り、北西側から南東方向に傾いている。周溝底部の海拔は、北側で13.97m、東側で13.77m、南西側で13.83m、西側では14.17mを測り、北西側から南東方向に傾いており、高低差は最大で約32cmを測る。

周溝の埋没状況は覆土の分層が困難であったために、確認が難しいが、北側のセクションでは覆土にみられる黒色土(1層)の下に、墳丘側から落ち込んだと思われるやや明るめの黒色土(2層)がみられた。また、墳裾におかれたと思われる土師器高環などが周溝底から浮いた状態で出土しており、周溝覆土内には墳丘の崩壊土砂が想定できる。

遺物出土状態(第24図・写真図版10)

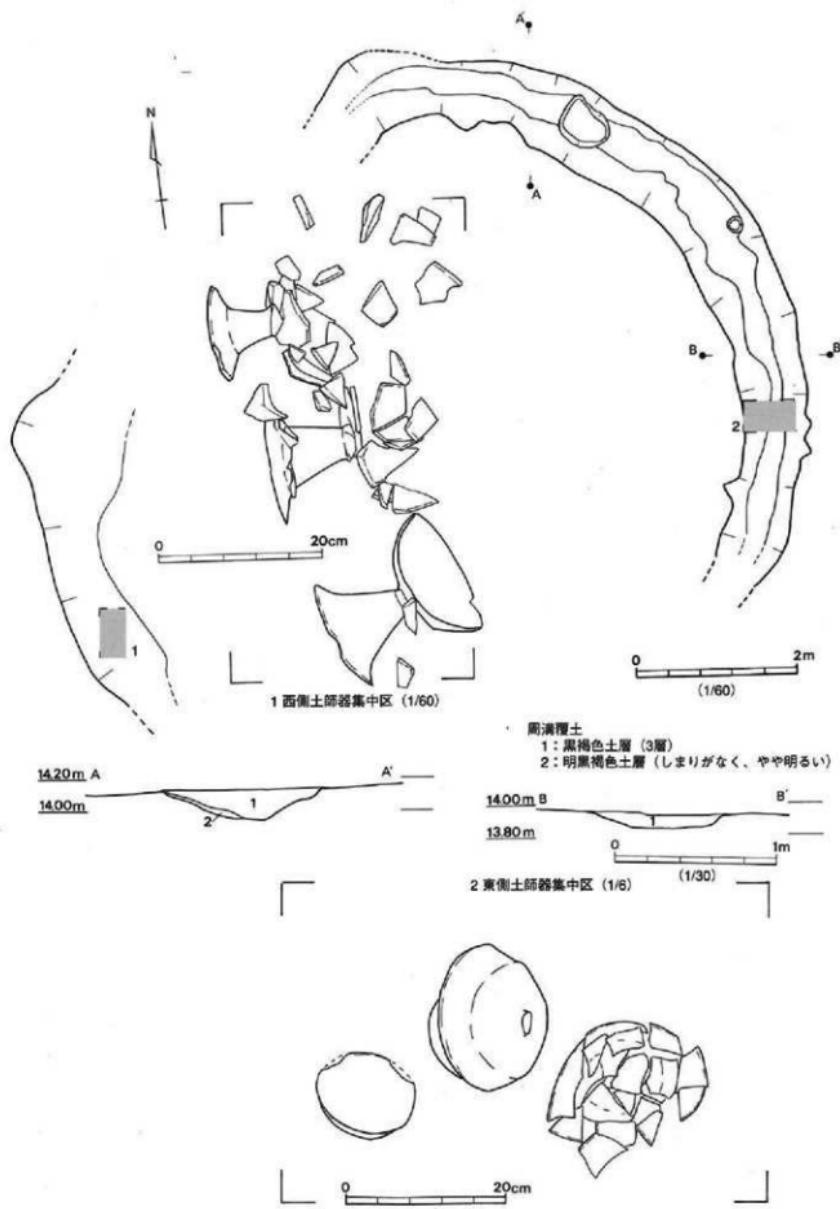
土師器を中心とした遺物は周溝内でも東側中央と西側中央から集中して出土している。西側集中区からは高環4個体(内3個体は完形近くに復元、残りは坏部のみ復元)、壺(胴部のみの復元)1個体が出土している。脚部が低く、坏部を東に向かって出土している。墳丘側から落ち込んだものと思われる。

東側集中区からは高環5個体分、坏5個体分、壺口縁部1、壺口縁部1片が出土している。坏は墳丘側から転がり込んだ状態で出土し、坏に被さるようにして高環坏部が出土している。墳丘裾置かれていたものが落ち込んだものと思われる。

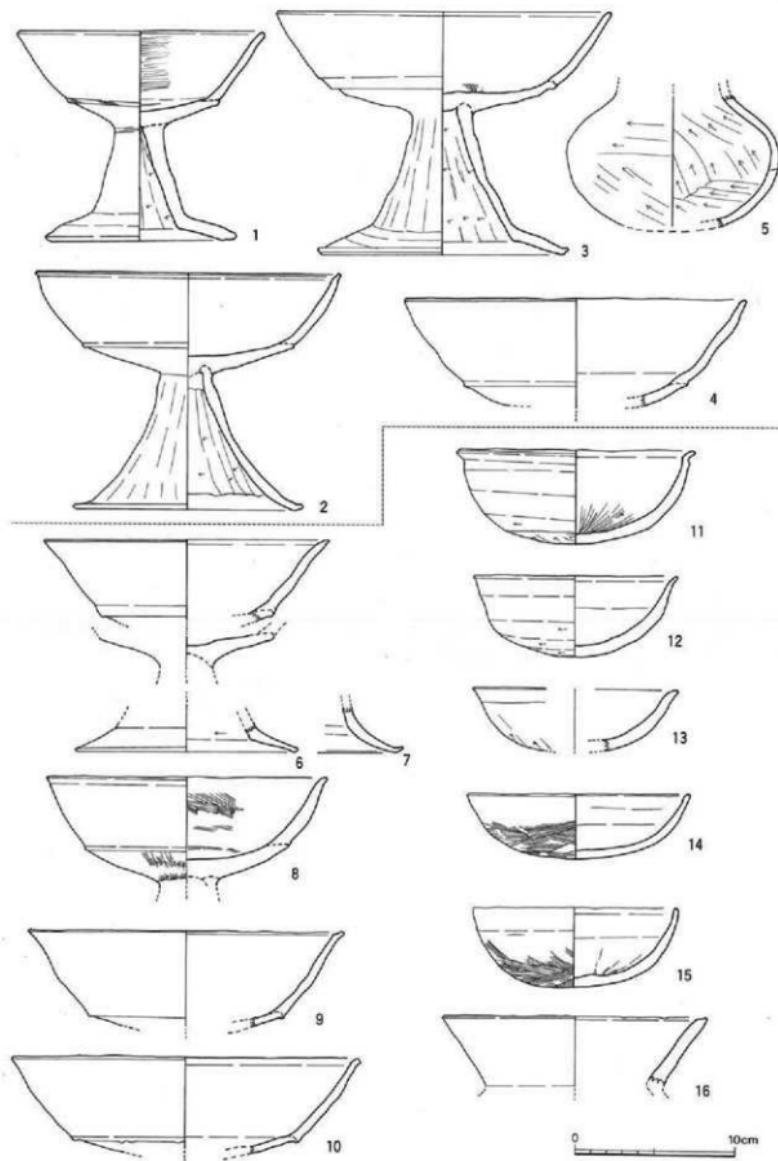
出土遺物(第25図・写真図版10)

1~5は周溝西側集中区から、6以下は東側集中区から出土した土師器である。1は小型の高環で脚部は裾部が急激に開く古い特徴を持っている。2~4は大型のもので、2は脚裾部が開くタイプで、3は脚部が円錐状に広がるタイプである。5は丸底壺で、口縁部が失われているが、胴部最大径が中位にあり、頸部には低い段をもっている。胴部最大径に対して頸部がそれほど大きくならず、肩も張らないタイプである。

6は1とおなじ形態的特徴をもつ高環に復元できる。7も同じく脚裾が開くタイプの高環であるが、脚部片のみの出土で6とは別個体である。8も小型の高環に復元でき器壁が厚く、口縁部は丸みをもって開き端部は外反する。9・10も高環であるが、6~8と比べ口縁部径が大きく、大型の部類に入る。



第24図 4号墳周溝・遺物出土状況 (1/60・1/30・1/6)



第25図 4号墳周溝出土遺物 (1~5: 西側集中区, 6以下: 東側集中区) (1/3)

11～15は坏で、11～13までは口縁端部が外反するタイプ、14は直に開く浅いタイプ、15の口縁部はほぼ直立し深いタイプである。外面の調整は14・15が刷毛調整を用いているのに対して、11～13まではハラケズリである。

16は壺の口縁部片で、直に開き端部は水平に面取りされている。他に、壺の口縁部で薄い器壁に直に開く口縁部をもつものがある。

第4表 4号墳出土土器觀察表(第25図 1～16)

出土位置	種別	法寸 (cm)	形態的特徴	技術的特徴	胎土・色調
4号墳(4-1) 西頭集中区	土師器 高 环	全 高: 12.9 口縁部 高: 6.7 环 壁 厚さ: 5.0 口縁部後径: 15.8 环 壁 後 径: 9.3 厚 部: 11.8	外反する口縁部で、端部は直に開き端部は急に開く。器壁は比較的厚くなってしまつたりである後は比較的明瞭	环部内外面は丁寧な横ナデである。端部下端とその他の部分は弱い刷毛調整。口縫部は後ろ側から端部にかけて横ナデで素千ヶギをもつていて、端部内面は一気に削り切られている。	外面: 淡青色5YR7/6 内面: 淡青色7.5YR8/6 金雲母粒が多く、白色粒も含み、キメが細かい精製されたもの
4号墳(4-2) 西頭集中区	土師器 高 环	全 高: 14.4 口縁部 高: 6.9 环 壁 厚さ: 5.6 口縁部後径: 18.4 环 壁 後 径: 13.0 厚 部: 14.1	丸みをもって立ち上がる端部で外反する。口縫部に「八」の字に開き端部は水平に開く。器壁外端部の後や端部は明瞭である4-1と比べて大型である	环部内外面は丁寧な横ナデである。端部下端とその他の部分は弱い刷毛調整。口縫部は後ろ側から端部にかけて横ナデで素千ヶギをもつていて、端部内面は一気に削り切られている。	淡黄褐色10YR7/4内部は黒褐色 金雲母粒が多く、白色粒や赤色粒も含む
4号墳(4-3) 西頭集中区	土師器 高 环	全 高: 15.0 口縁部 高: 8.7 环 壁 厚さ: 5.0 口縁部後径: 20.6 环 壁 後 径: 12.9 厚 部: 15.5	丸みをもって立ち上がる口縫部に、「八」の字に開き端部は水平に開く。器壁外端部は直に開き上端部は四く反り上がる。端部の後や端部は明瞭である4-1と比べて大型品である	环部上半内面は刷毛利用の横ナデで、端部は不定方向のナデ。端部内面は前方のケギにより削り取られた後、横ナデの内面は一気に削り切られている	外面: 淡青色5YR7/6 内面: 淡青色7.5YR8/4 金雲母粒、白色粒が多いメスは細かく精製されている
4号墳(4-4) 西頭集中区	土師器 高 环	残 存 高: 6.7 口縁部後径: 21.0 环 壁 後 径: 13.7	残してある口縫部、径は明瞭	内外面とも横ナデ	淡黄色2.5YR8/4 カゼン石金雲母多量、白色粒も含む
4号墳(4-5) 西頭集中区	土師器 重	残 存 高: 8.0 口縁部後径: 13.2 环 壁 後 径: 7.5	器壁中央が張り、端部は低い段をもつ	端部下端には削りのナデ、上半は横刷毛の横ナデ。内面は斜削りを主としたスリットの横ナデ	にふい色5YR7/4 金雲母粒、白色粒が少しきせ非常にちからで精製されている
4号墳(4-6) 東頭集中区	土師器 高 环	同一個体 环 壁 高: 5.0 口縁部後径: 13.7 环 壁 後 径: 10.7	同一個体で接合不可資料4-1と同じ法の高坏で、外反する口縫部で口縫部端部は直に外反する。端部は明瞭で、全体的に深い形状である	内面と上半とも横ナデが塗られ、端部内面は若干のケギがある	端2.5YR7/4 内面は明るい 金雲母粒、カゼン石・白色粒が多々。
4号墳(4-7) 東頭集中区	土師器 高 环	残 存 高: 2.6	八の字形に広がる口縫部端部	内面はナデが主体で、端部内面はケギであります	灰黑色2.5Y 6/2 内底底現れ 金雲母・カゼン石多量、白色粒含む
4号墳(4-8) 東頭集中区	土師器 高 环	残 存 高: 6.6 口縁部後径: 17.4 环 壁 後 径: 12.6 环 壁 後 径: 5.0	外反する口縫部に、端部は直に外反する。後は比較的明瞭で、器壁は厚く造られる	内面端部は横ナデ、端部下端は細い刷毛の横ナデ内面は斜削りの端毛(端目)の後、口縫部が横ナデ	4-3と同色・胎土とも近似する
4号墳(4-9) 東頭集中区	土師器 高 环	残 存 高: 6.0 口縁部後径: 20.0 环 壁 後 径: 11.2	外反する口縫部で端部は外反する口縫部で、後は明瞭である器壁は比較的薄く造られる	端部内面は横ナデ。口縫部端部は内面段をもつ	4-6と同色・胎土ともに近似する
4号墳(4-10) 東頭集中区	土師器 高 环	残 存 高: 5.9 口縁部後径: 21.4 环 壁 後 径: 12.2	外反する口縫部で、端部は外反する。後は直立する。器壁は底部から口縫部にかけ、徐々に薄くなる	端部内外面ともに横ナデ。端部上半との境には斜削りを割んでいる	4-6と同色・胎土ともに近似する
4号墳(4-11) 東頭集中区	土師器 环	全 高: 5.8 口縁部後径: 14.7 厚 部: 5.0	丸底で口縫部が外反し、口縫部端部は本半径にて外反する。端部は底部が厚く、口縫部にかけて薄くなる	外縫は回転利用のハラケズリ。底部は不完全方向の手持ちヘラナダ。口縫部端部は横ナデ内面は横ナデ内面は底部を中心にして射抜の先の長いケギの後、上半は横ナデ。金雲母粒が多く、白色粒・カゼン石を少量含む	外面: 淡青色5YR7/8 内面: 淡青色10YR8/6 内面にカゼン石多く、白色粒含む
4号墳(4-12) 東頭集中区	土師器 环	全 高: 5.0 口縁部後径: 12.5 厚 部: 4.3	外反する口縫部で端部は直立する。器壁は底部から口縫部にかけ、徐々に薄くなる	端部下端は長いケギの後、弱いナデ。内面端部から内面は横ナデ内面底部近くは不定方向のナデ	淡黄褐色: 7/7 内底底現れ 底部から端部にかけて一部黒頭がある内部は一層に明るい褐色を呈する 金雲母粒が多く、白色粒・赤褐色が少々含まれる
4号墳(4-13) 東頭集中区	土師器 环	残 存 高: 3.9 口縁部後径: 12.6	外反する口縫部で端部が外反し、更教的浅である器壁は厚い	底部外縫には手持ちの不定方向のハラケズリ。口縫部端部は横ナデ内面は横ナデ内面は底部を中心にして射抜の先の長いケギの後、口縫部は横ナデ	にふい色5YR6/4 外面に黒頭を有する 金雲母粒・カゼン石・白色粒が多い。生痕はなんらか
4号墳(4-14) 東頭集中区	土師器 环	全 高: 4.9 口縁部後径: 4.3	外反する口縫部で端部は直立する。器壁は底部から口縫部にかけ、徐々に薄くなる	底部外縫は口縫部下端まで手持ちの不定方向の刷毛。口縫部端部は横ナデ内面は横ナデ内面は底部を中心として射抜のナデ	浅黄褐色7.5YR8/4 底部付近に黒頭がみられる 内面は少しひび 金雲母粒多く、白色・赤褐色が少量
4号墳(4-15) 東頭集中区	土師器 环	全 高: 4.0 口縁部後径: 3.5	外反する口縫部で端部は直立する。器壁は直立する。器壁は底部から口縫部にかけ、徐々に薄くなる	底部外縫は口縫部下端まで手持ちの不定方向の刷毛。口縫部端部は横ナデ内面は横ナデ内面は底部を中心として射抜のナデ	浅黄褐色7.5YR8/3 内底底現れ 金雲母粒多く、カゼン石・白色・赤褐色が少
4号墳(4-16) 東頭集中区	土師器 环	残 存 高: 4.3 口縁部後径: 35.2	外反する口縫部で端部は直立する。器壁は直立する。器壁は底部から口縫部にかけ、徐々に薄くなる	底部外縫は口縫部下端まで手持ちの不定方向の刷毛。口縫部端部は横ナデ内面は横ナデ内面は底部を中心として射抜のナデ	根色2.5YR7/7 内底底現れ 金雲母・カゼン石多量

(5) 5号墳 (第26~30図・写真図版11)

O10~Q12にかけて検出され、周溝は北西側の一部が残っていた。東側周溝については、石室から東方向に設けた確認トレンチで、南北にはしる大溝により削平されていることが確認できた。周溝底からは土師器広口壺が3個体分出土している。埋葬施設は調査区南崖面で板石を平積みした竪穴系の石室が検出された。床面近くには側壁が落ち込んでおり、副葬品などの検出はできなかった。石室に用いられた石材はすべて輝石安山岩で、カクセン石を含まないものである。

埋葬施設 (第27図・写真図版11)

竪穴系の石室で、東側壁約1.1m北側壁約8.5mがの残存していた。検出面の海拔は14.66m付近で、根石の下面レベルは約14.21m付近にあり、残存高は40cmほどである。両側壁は直に積まれているが、コーナー部分には小さめの板石を用い隅丸として、持ち送りを行っていることが特徴である。埋葬施設の主軸はN-17°-Wである。

東側壁から約15cm離れた位置に、東側壁に平行して板石が立てられている。長さ約68cm、最大幅約36cm、厚さ約4.5cmを測る。検出時には側壁に用いられていた板石が落ち込んでおり、床面の残存状況は悪く、落ち込んだ石材の下面付近に床面を想定した。床面想定海拔は14.0m付近で、側壁の根石下面とは約20cmほどの差を測る。

東側壁に平行して立てられた板石の最高点は14.32m、床面との差は約30cmを測る。北側小口には板石は存在せず、立てられていた痕跡も確認できなかった。

石材の利用は、最下段に比較的大きめのものを用い、上になるにつれて徐々に小さい石材を用いていく。最下段の石材幅と検出面近くの石材幅は2倍近くの差がみられる。このようにみると、土のみの裏込めでは天井石などの重量を支えられない構造と思われる。そのため、検出面付近では東側壁で板石を控え積みしている。

構築方法については板石を方形に並べた後、幅20~15の帯状に白色粘土を敷きつめ、その上に次の段の板石を並べる。それが繰り返され、粘土で目張りを行う非常に丁寧なつくりである。

また、最下段から3段目ではL字に丸く加工された石材を用いて、コーナーと側壁とを一枚の石で造っている。

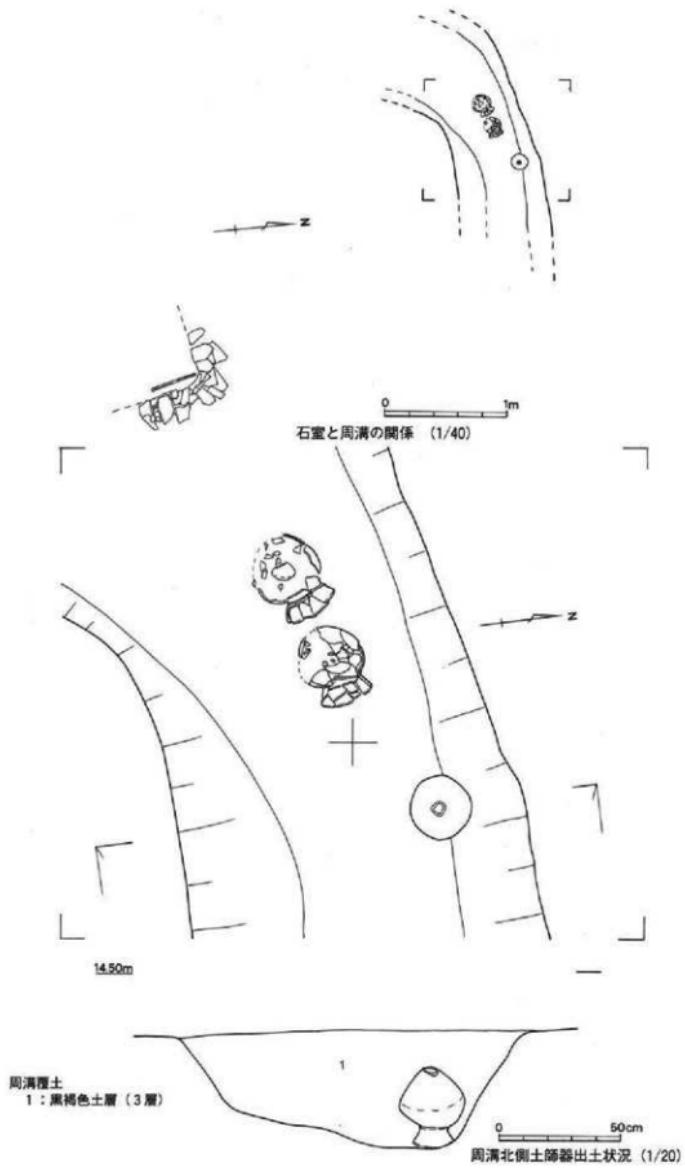
墓壇は明確な形では確認できなかったが、下段の裏込めには石材を用いず、黒色土のみを用いておりそれほど大きなものではないと思われる。しかし、東側壁には検出面近くで裏込めに板石を用い、その下部には目張りとして粘土が敷かれている。検出面よりも上部の構造は、下部とは異なっているものと思われる。

周溝 (第26図・写真図版11)

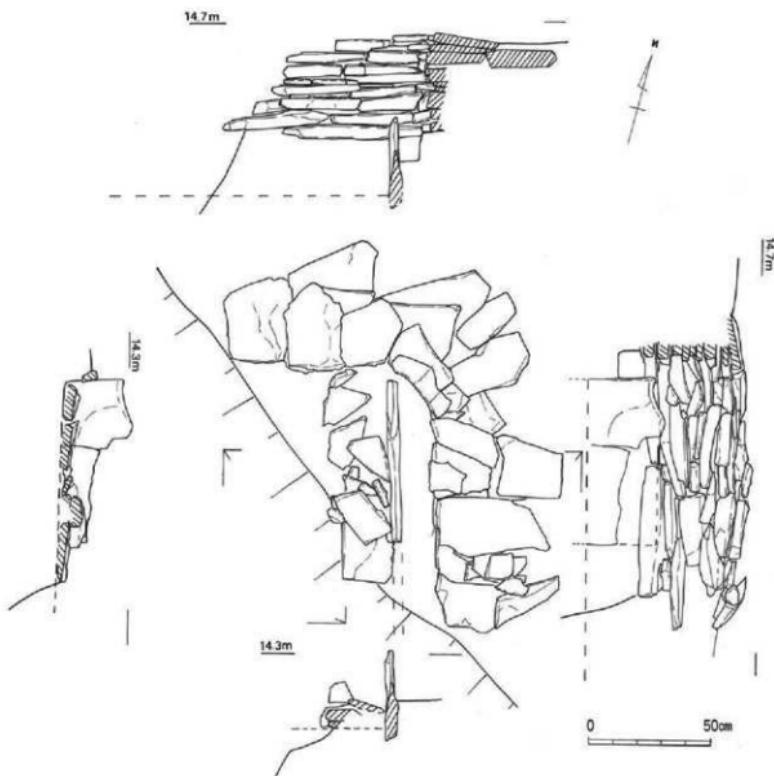
周溝は石室北壁内側から石室主軸方向に約3.1mの位置に立ち上がりが位置し、直径6~7mほどに復元できる。ただし、周溝全体は残存していないために墳形については断定できない。

周溝幅は最大1.45m、深さは48cmを測り、掘り込みの傾斜は緩く、立ち上がりの傾斜は急である。今回調査した古墳の中では比較的しっかりした周溝である。周溝内覆土は墳丘の崩壊土と思われる薄い土砂の堆積が確認でき、その上に壺が完形に近い形で出土している。それ以上の土層については、同色同質のため分層できなかった。

検出面の海拔は周溝掘り込み肩部で14.20m、立ち上がりで14.22mを測り、北側がやや高い。周溝底海拔は13.92m~13.75mを測り、西から東に傾いている。石室床面の海拔よりも低い位置まで周溝は掘り込まれている。



第26図 5号墳周溝・遺物出土状況 (1/40・1/20)



第27図 5号墳埋葬施設展開図 (1/20)

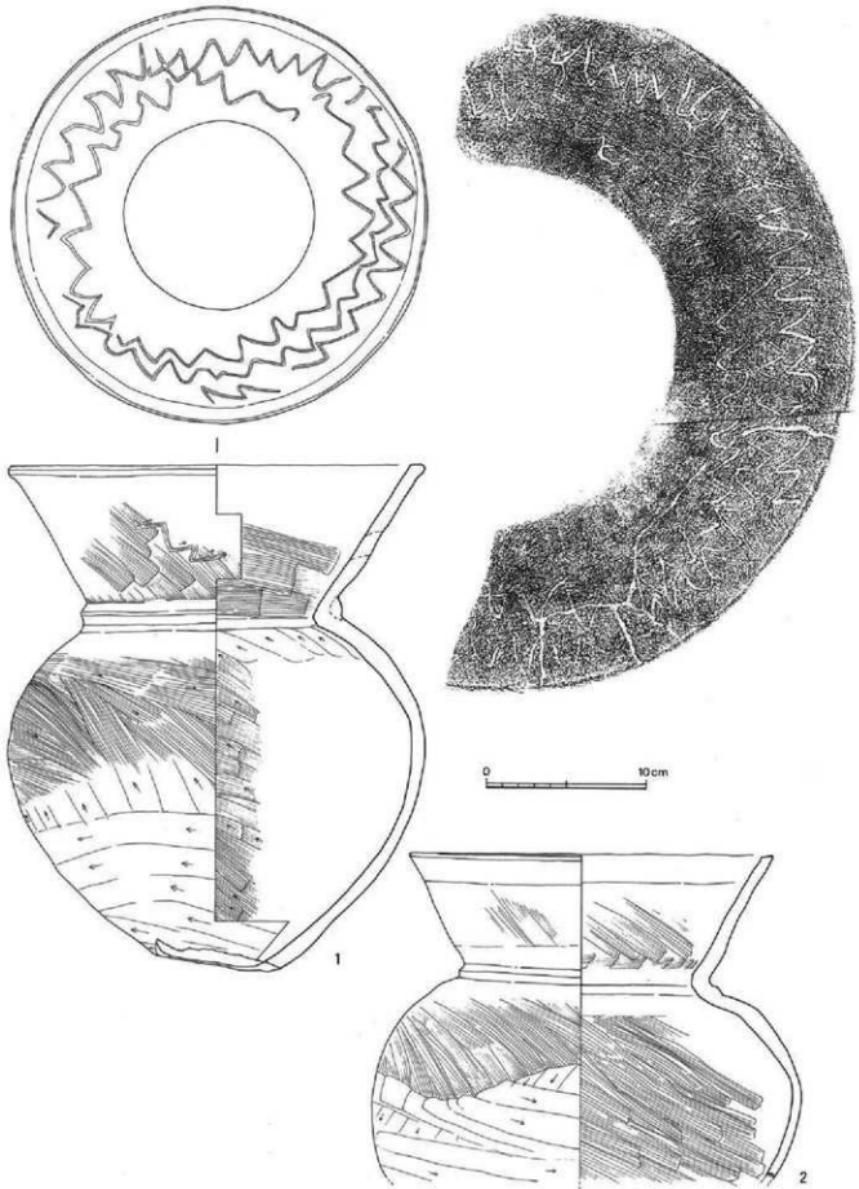
遺物出土状態 (第26図・写真図版11)

周溝底の立ち上がり寄りに土器部広口壺が3個体出土している。内2個体は東に口縁部を向け横になった状態で、他1個体は口縁部を周溝底に付け、底部を上にし逆さの状態で出土している。周溝立ち上がりに寄って出土しており、横になっている壺との距離はおよそ55cmを測り、この個体のみ出土状況が違っている。

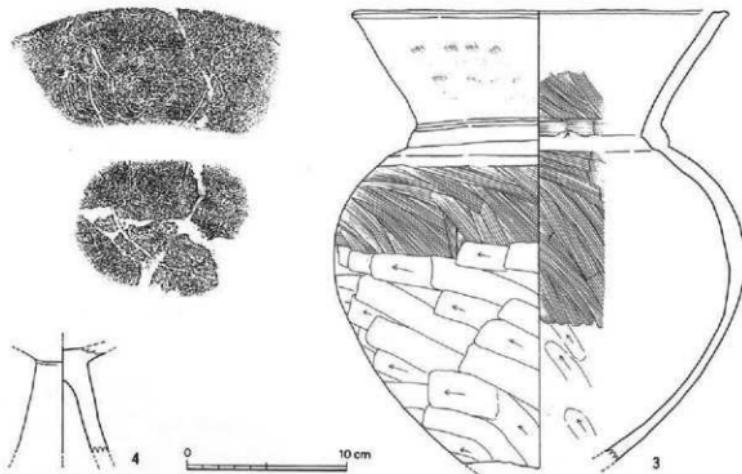
逆さのものは完形品で出土し、横になっていた2個体は、上になっていた部分は小さい破片、下になっていた部分は大きな破片で出土している。2個体の内、西側のものは胴部中心直上から拳大よりやや大きい円環を一つお落し込み、破壊された状態で出土している。

それぞれの海拔は逆さになった壺底部で14.1m、横になった2固体のうち、東側口縁部で14.03m、西側口縁部で14.024m、落とし込まれた円環上面では14.04mを測る。

完形で出土した個体には底部に焼成後の穿孔が行われており、内部には土が入っていたがそれほど



第28図 5号墳周溝出土遺物① (1/3)



第29図 5号墳周溝出土遺物② (1/3)

第5表 5号墳出土土器観察表 (第28図・第29図)

出土位置(因幡番号)	種別	出目 (cm)	形態的特徴	技法的特徴	胎土/色調
5号墳 (5-1)	土器部 壺	全 高: 31.0 口 縁 部 径: 8.7 口 縫 部 径: 25.5 腹 部 径: 15.6 肩 部 最大径: 25.7	直に外反する口縫部で腹部に執土縫を 巻き付ける。肩部は前方からやや張り中位よ りやや上上で最も張る。基盤は胴部中 位以下で薄く削られる	口縫部外側に斜位の衝立花、横カナ 部は斜位を巻き付けている。腹部外側は 斜位の削毛で、胴部下半で長いスリーケ ーブルカットがかけられ、胴部内面は外 側面と同様に削毛が施される	浅黄褐色 7.5YR 8/6 腹部下半か ら底部にかけて、底盤が丸られる口縫 部内面削毛上半には丹が塗られていい る金雲母粒が多く白色粒を少量含む
5号墳 (5-2)	土器部 壺	残 存 高: 22.0 口 縫 部 径: 15.0 腹 部 径: 26.2 口 縫 部 高: 8.5 こう	直に外反する口縫部で腹部に執土縫を 巻き付ける。肩部は前方からやや張り中位よ りやや上上で最も張る。基盤は胴部中 位以下で薄く削られる	直位・斜位とも5-1と同じ この個体のみへうき模なし5-1よりも 焼きしきが良い	胎土・色調とも5-1と同じ
5号墳 (5-3)	土器部 壺	残 存 高: 28.2 口 縫 部 高: 8.5 口 縫 部 径: 23.0 肩 部 突 起: 15.6 肩 部 最大径: 25.0	直に外反する口縫部で、腹部上層は直 取りされる肩部が斜位最大径が中位より上にあり、重心に向いた位置にある。 底部は成形後で穿孔された胴部以下は薄 く上げられ、底盤付近はカズリ抜 される	口縫部内外側とも斜位の細い花、費 アモリ部は執土縫を巻き付けている。腹部外 側は斜位の削毛の後、胴部下が削り、ス リーケーブルカットが行われ、胴部内面 は外側スリーケーブルで、常に胴部内面 は底盤付近G付近で不定方向のチヂ れ、底盤付近はカズリ抜	胎土・色調とも5-1と同じ 5-1よりも焼きしきが良い
5号墳 (5-4)	土器部 壺	残 存 高: 6.5	比較的弱い肩部で中実の複合で、ソ ケット式ではない	内外面とも素ナデ	褐色 2.5Y R 6/8 内 金雲母粒・白色粒が多く、黄色粒を含む

詰まっていたなかった。周溝に落ち込んだ段階である程度の土砂が入っていた可能性がある。

横になっていた2個体も土圧などにより破損していたが、破片は浮いており、周溝底に壇丘崩壊土とともに落ち込み、周溝の埋没とともに内部に土砂が緩やかに入り込み、海拔14.02-03あたりまで埋没した段階で、礫が落とし込まれたものと思われる。海拔14.02あたりでは周溝は半分ほど埋没しているが、落ち込んだ土器はまだ顔を出している。そのため人為的に石が落とされ、壺は破壊されたものと考えられる。

出土遺物（第28～30図・写真図版11）

高坏脚部片1～4、広口壺3個体1～3が周溝より出土している。出土した広口壺は頸部に粘土紐を巻いている点、底部が尖り底となる点、内面は刷毛目調整・外面下半はヘラ削り調整が行われる点などの特徴があり、県内遺跡では初例である。

形態的・法量的には塚原古墳群内で方形周溝墓（4世紀後半）から出土例がみられるが⁽³⁾、一野遺跡例のものが底部が尖り気味で、内・外面の調整が異なっている。対岸にはみられない特徴であろう。また、頸部に粘土紐を巻きつける例は管見では見当たらないので、島原半島独自の形態的特徴である可能性も高い。

1の壺は全高約31.0cmを測り、底部が焼成後に穿孔されている。

2は底部まで復元できなかったが、底部片には焼成後に穿孔された痕跡がみられる。

3の底部は同じように焼成後に穿孔されており、出土した3個体はすべて焼成後に底部が穿孔されている。

口縁部と胴部最大径がほぼ同じで、口縁端部はわずかに外反している。頸部には粘土紐がまかれしており、特徴的である。胴部内外面とも丁寧に長いストロークの刷毛目がみられ、その後胴部外面以下に長いストロークのケズリが行われている。口縁部内外面は刷毛調整が行われた後、横ナデが加えられている。

1の口縁部内面には波状にヘラ描きがみられ、外面にも一部で不明なヘラ描きがみられる。3の口縁部外面と胴部上半の一部にもヘラによる不明な文様が描かれる。

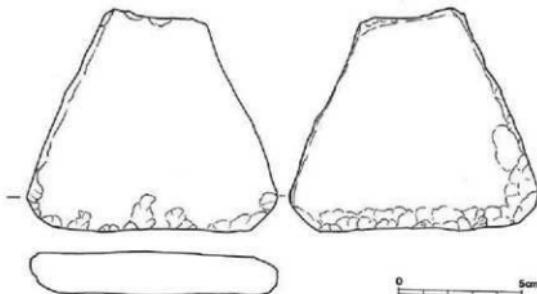
4の高坏脚部は脚部がそれほど開かないタイプで、出土品中では小型の部類に復元できる。

第30図も周溝から出土した遺物で、二等辺三角形の頂点を打ち欠き、下辺を丹念に調整している。カキなどの貝殻収穫のために使用された石器と思われる。⁽³⁾ カクセン石を多く含んだ安山岩製である。

註

1 野田・松本・島津・江本『塚原』熊本県教育委員会1975

2 長崎県文化課 福田一志氏よりご教授



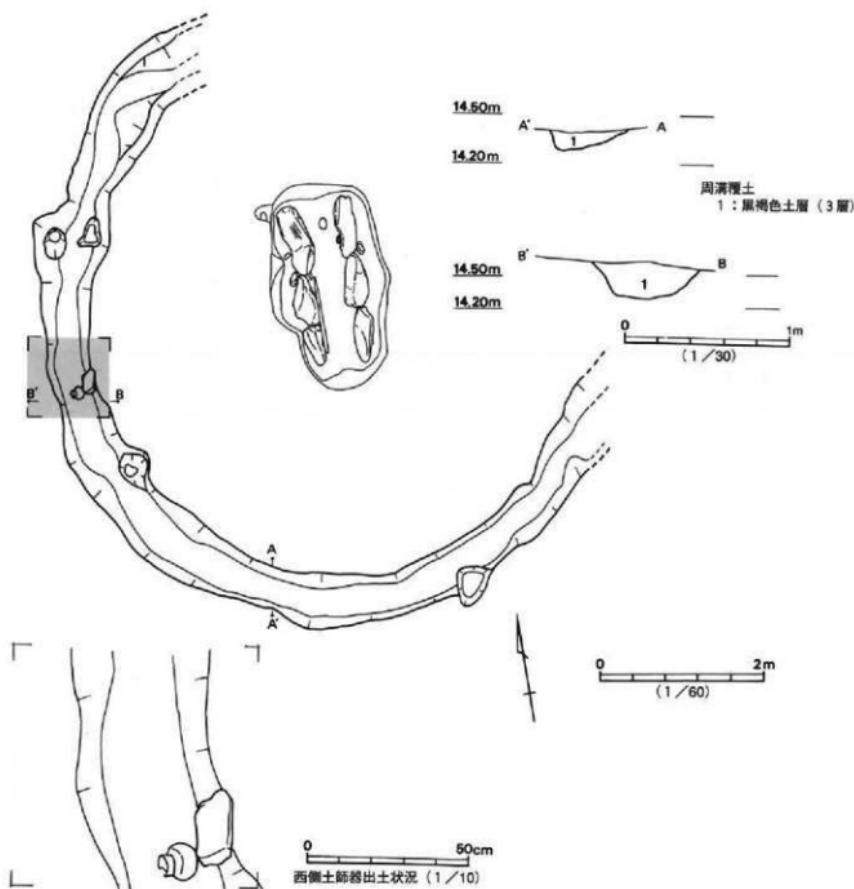
第30図 5号墳周溝出土石器 (1/2)

(6) 6号墳 (第31~34図・写真図版12)

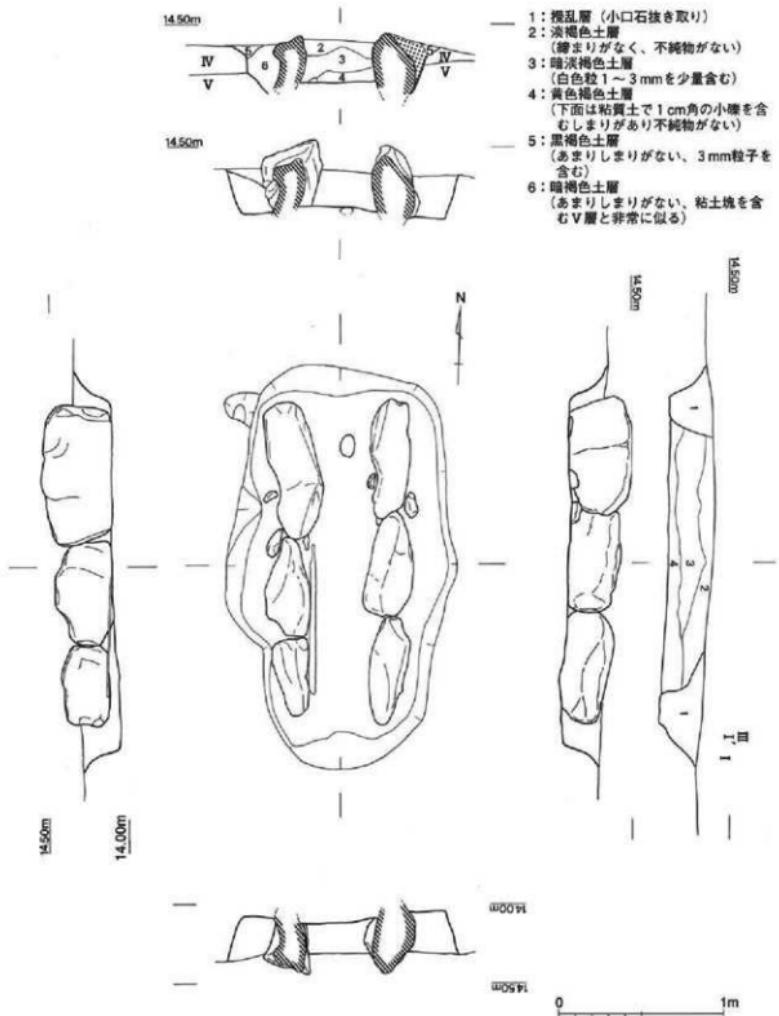
N10~O10にかけて検出され、周溝は3/4周し、埋葬施設の中心は南側周溝の肩部から3.62mを測り、やや北寄りの位置にある。埋葬施設は南北の小口石が抜かれていたが、西側側壁に寄って大刀と鉄鎌が、北側東部あたりに枕石が一石検出されている。石棺内覆土の観察では小口石が抜かれる段階ですでに石棺内部に土砂が堆積していた様子である。

埋葬施設 (第31~32図・写真図版12)

石棺内の幅は床面近くでは約50cm、床面から上に20cmの位置で約42cmを測り、両側壁は内側にやや



第31図 6号墳周溝・遺物出土状況 (1/60・1/30・1/10)



第32図 6号墳埋葬施設展開図 (1/30)

傾斜して立てられている。両側壁とも根石は3石で構成されているが、北側のものが大きな石を利用している。天井石を載せるために側壁の高さを合わせたものと思われ、東側側壁の一番南の根石上に島原半島特有の白色粘土が目張りとして帯状に残っていた。2号墳箱式石棺の構造と類似するものである。西側壁北側根石上の海拔は14.55cm、東側壁北側根石上の海拔は14.5cmを測る。おそらくこの海

抜で天井石が載るものと思われる。大刀直下の海拔は14.13mを測り、それらから復元すると石棺の深さは約42cmを測る。埋葬施設の主軸はN-2.5°-Wである。石材はすべて雲仙産安山岩である。

両小口石が取り去られているが、抜き取り穴の心々間は、約1.9mを測る。石枕から南小口まではおよそ1.75mを測り、埋葬人物の身長はそれ以下に復元できる。

根石の状態から北側から組まれていた様子で、根石間の隙間に粘土が詰められ、大きな隙間には内側から拳大の縫を埋め込み、粘土で目張りがなされていた。

人骨などは検出されず、副葬品として西側壁に寄った腰から下の位置に大刀一振と鉄鎌1が出土している。大刀は切先を南に向いて、側壁から4~5cm離して置かれており、鉄鎌は大刀の柄付近に北に向けて置かれていた。矢羽や矢柄は検出できず、大刀も木質部分はほとんど失われており、鏽跡が刀身・柄の至る所に及んでおり、取上げ時に5片に破損してしまった。

第33図1は残存長約93.9cmを測り、直刀である。刀身約81cm、柄は闇から約13cmまで残存し、それ以下は失われている。目釘穴は闇から約6.8cmと約13.5cmの位置にあけられている。

2は鉄鎌で、鎌身長6.2cm、幅3.9cm、頭部長4cmを測り、闇はみられず、茎部には樹皮が巻かれている。鎌身幅が3cmを越え、頭部に比べ長く、大型で三角形鎌の部類に入ると思われる。^[31]類品は福岡県老司古墳3号石室で闇を持たないものが出土しているが、^[32]一野遺跡6号墳出土品が鎌身が長く、鎌身は薄いつくりである。

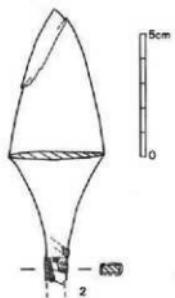
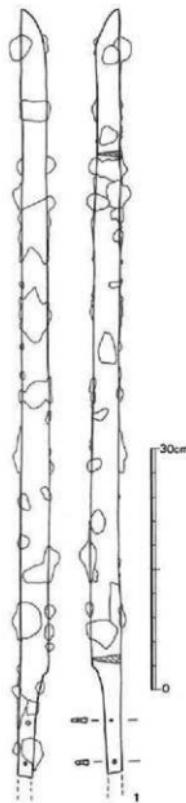
周溝（第31図・写真図版12）

周溝の検出面最大幅は北側で0.8mを測り、深さは西側セクション付近で最深の27.8cmを測る。周溝はほぼ円形に3/4めぐり直径は検出面で6.6mを測り、埋葬施設の中心から西側周溝肩部までは2.96mを測る。

検出面の海拔は北側掘り込み肩部で14.535m、西側で14.574m、南側で14.371m、南東側で14.29mを測り、西から南東に傾斜する。周溝底海拔は北側セクション付近で14.361m、西側で14.356m、南側で14.286m、南東側で14.177mを測り、おなじく西から南東に傾斜している。周溝底にレベル差がみられ、周溝の掘り込みは地形に左右されていた様子である。

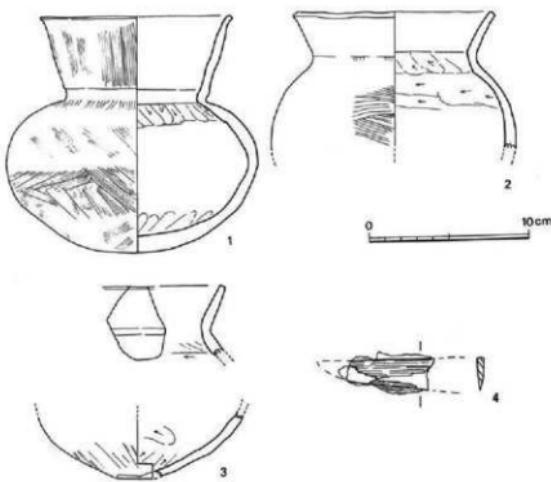
第6表 6号墳出土土器観察表（第34図 1~3）

出土位置(面積番号)	種別	法量(m)	形態的特徴	技法的特徴	胎土/色調
6号墳(6-1)	土師器 甕	全 高: 14.4 口縁部径: 11.7 腹 部 径: 8.6 胴部最大径: 15.4	直立する口縁部で全高に対して1/3を占め、口縁部は発達している口縁部径も胴部最大径に近い胴部最大径は中位にあり、体盤が張り丸底となる	外面は崩毛目で口縁部や腹部は模ナデ内面は崩削以下は不定方向のナデで、腹部附近に粘土棒の痕跡が残る口縁部内面は模ナデ	淡黄色2.5YR 8/4で崩削下半から底部にかけて、一部で混泥がみられる 金糸帯・黒色粒が多い
6号墳(6-2)	土師器 甕	直 高: 8.5 口縁部径: 12.6 腹 部 径: 10.0 口縁部高: 2.9	直に外反する口縁部で、端部上面は直取りされる胴部は丸くくられ、3号出土甕と同様な胴部となろう	崩削外表面は鋸齿の崩毛目で、口縁部内外面は模ナデ内面は模ナデ内面はヘラナメリの既不定方向のナデ頭部内面は崩削のナデ	灰褐色10YR 8/1 口縁外表面に黒斑があらわれる金糸帯・カクセン石が多く、白色・赤色粒が少量ある
6号墳(6-3)	土師器 甕	口縁部片と腹片で、形態や色調・胎土から同一個体である	直に外反する口縁部で、端部上面は直取りされる丸底凹形の底部には施成後に穿孔が行われているまた、6-2とは別個体	口縁部内外面は模ナデ、底部外表面は崩毛目、内面底部附近はケズリその腹部は不定方向のナデ	に長い黒帶色10YR 7/3外表面には長い橙色5YR 7/3~4 口縁外表面に黒斑あり



石棺内出土鉄器

第33図 6号墳副葬鉄器(1:1/6, 2:1/2)



第34図 6号墳周溝出土遺物(1/3)

遺物の出土状態(第31図・写真図版12)

周溝の埋没状況は、覆土の分層が困難であったが、西側周溝内側寄りから土師器壺(第34図1)が完形で出土しており、墳丘崩壊に伴い壠部に供えられたものが落ち込んだものと思われる。

小型の壺2・3は北西側周溝覆土から破片のみが出土している。

出土遺物(第34図・写真図版12)

土師器壺1は直立する口縁部に丸い胴部が付き、丸底の形態である。

3号噴出土品よりも大型であるが、形態は類似する。

小型の壺2・3は直に外に開く口縁部で、端部は外反せず、3号噴出土壺よりも古い要素を残している。壺は、内面ヘラケズリ、外面は刷毛調整で、焼成後に底部を穿孔している。

4は刀子片で、周溝覆土内からの出土である。切先が失われ残存長約3.4cm、刀身幅約1.3cmを測り、一部外面に木質が残る。

註

- 杉山英宏「古墳時代の鐵鋌について」『権原考古学研究所論集』第八
吉川弘文館(東京)1988年
- 山口・吉留・渡辺編「老司古墳」福岡市教育委員会 1969

(7) 7号墳（第35～37図・写真図版13）

L6～O9にかけて検出され、南側で烟境界による擾乱がみられた。埋葬施設は比較的新しい時代に大きく擾乱を受けており、石材はすべて持ち去れており石室壙方も失われていた。しかし、若干の鉄器類が出土し、擾乱の規模から箱式石棺であった可能性が高い。

周溝（第35図・写真図版13）

周溝は外周で約12m、内周で約10mを測る。検出面最大幅は東側で約1.55mを測り、深さは東側セクション付近でもっとも深く約35cmを測る。検出面の海拔は北側掘り込み肩部で14.865m、西側で15.107m、南側で14.766m、東側で14.712mを測り、北西から南東に傾斜する。周溝底海拔は北側セクション（A-A'）で14.77m、西側（D-D'）で14.735m、南側で14.531m、東側で14.333mを測り、北西から南東に傾斜し、約44cmの高低差を測る。周溝底にレベル差があり、周溝の掘り込みは地形に左右されていた様子である。

周溝の埋没状況は、覆土の分層が困難であったため明らかではない。

遺物の出土状態（第35図）

小型の脚が付く壺が東側周溝内で破片で出土した。破片は大きく完形品に復元できた。海拔は14.7m付近で出土し、周溝底ではないが周溝内側に寄って出土している。また、西側周溝内でも同じように破片が大きく完形品に復元できる壺が海拔14.72mあたりで出土している。これも周溝底ではなく、周溝内側に寄って出土している。これら2点は壇丘裾に供獻されていた土師器が、壇丘の崩壊とともに落ち込んだものであろう。

出土遺物（第36・37図・写真図版13）

埋葬施設擾乱覆土から鉄鎌1点（第37図1）刀子片2点（第37図2・3）、摩滅した高壺脚部片1が出土している。

周溝からは東側で高壺脚部片（第36図1）、脚部片（第36図2・3）、小型の脚部が付く壺（第36図5）（完形近くに復元）、南側では完形に復元できる壺（第36図6）、壺片（第36図8）、高壺脚部片（第36図4）、覆土上面から壺底部片（第36図7）が出土している。

5の小型の脚が付く壺は今回の調査区では出土例は他にみられない。北九州の住居跡出土土師器編年を整理した柳田康雄によれば、II期4世紀前半に位置づけられる。⁽ⁱⁱⁱ⁾しかし、供伴する口縁壺部が内傾する大形の壺6は、須恵器が伴う3号墳出土土師器に類似している。今後検討せねばならないが、5については、本古墳群では5世紀末頃までのこる器形として整理しておく。

鉄製品・石製品では、埋葬施設擾乱覆土内から鉄鎌片1、周溝覆土から刀子片2、砥石片1がそれぞれ出土している。（第37図）

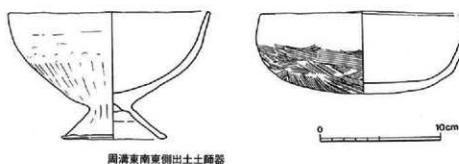
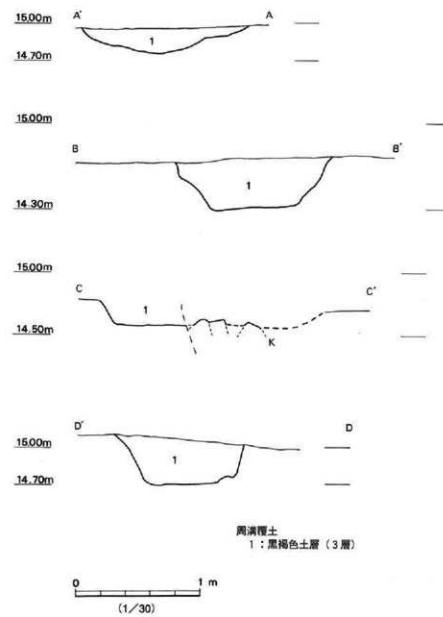
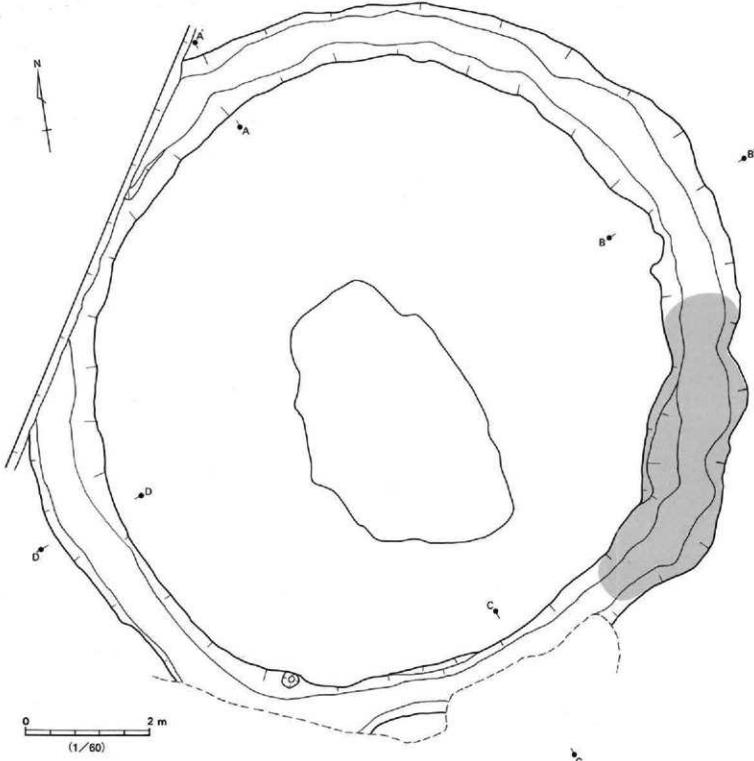
1は刀身が失われているが頭部が長く、大型の三角彫もしくは圭頭彫と思われる。残存長は5.9cmを測り、巻かれていた樹皮が長さ約1.5cmで残っており、闊はみられない。

2・3は刀子片で別個体と思われる。2の柄には若干木質が残っており、3は柄の部分と思われる。

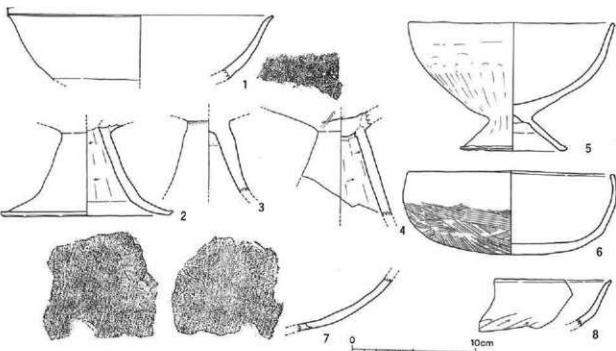
4は方形の砥石片で研面は表面と側面と2面観察でき、実測図の裏面は剥離面である。2号墳周溝出土の砥石と比べ、薄いくりである。

註

- 1 柳田康雄「土師器の編年2 九州」『古墳時代の研究6卷—土師器と須恵器—』雄山閣出版（東京）1991



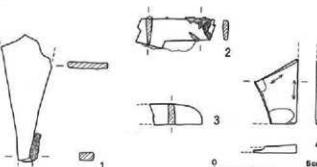
第35図 7号墳 周溝及び土層図 (1/60・1/30)



第36図 7号墳周溝出土物 (東南東側集中区：1～3, 5～6, 8 西側：4) (1/3)

第7表 7号墳出土土器觀察表 (第36図 1～8)

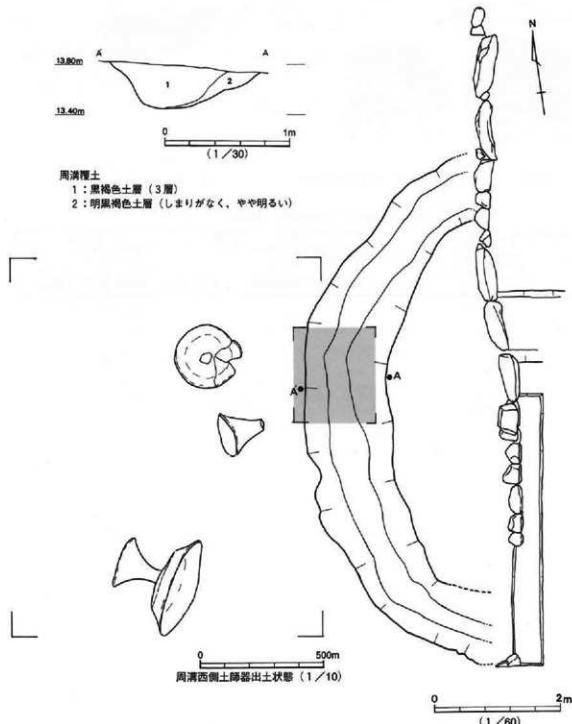
出土位置(周囲番号)	種別	直徑(cm)	形態的特徴	技術的特徴	胎土/色調
7号墳(7-1)	土器部 高 环	直径: 5.2 口径: 21.0 底径: 16.0	丸く立ち上る丸の内縁部で器底は外反す と杯の脚は明瞭で、比較的厚いつく りである	外縁部分には横ナギ 器内面はタカリ、領内面は横ナギ、 外縁は横ナギ	浅黄褐色7.5YR 8/3～4 外縁に 黒斑点あり 全表面: カクサン石・白色粒が多い
7号墳(7-2)	土器部 高 环	直径: 7.2 口径: 24.0 底径: 18.0	円錐形でだらんと弧がる器形で、中 部の器合はソック式である	器内面はタカリ、外縁は横ナギ 外縁は横ナギ	浅黄褐色7.5YR 8/3 赤みが多い 全表面: カクサン石が多い、 白色粒も含む
7号墳(7-3)	土器部 高 环	直径: 5.8 口径: 18.0	筒形の組合式タッケ式ではなく、中 央である	構成が新しいが、筒部内面には横ナギ である	褐色7.5YR 7/6～7/5
7号墳(7-4)	土器部 高 环	直径: 8.3	器部は特に内腹部に広がる	筒内面はタカリ、外縁は横ナギで器形 に沿って盛る	全表面: カクサン石・白色・赤色 白色粒も含む
7号墳(7-5)	土器部 小 口 縁	直径: 10.2 口径: 28.8 底径: 8.4	器のある丸底の环に小形の脚部があり く器部は円錐状になり、中部の器合 部を含めて下部ではなまら	器部外縁は斜削状に削りさし、口縁 は斜削で器部内部を盛るなどされて おり、脚部は横ナギ	浅黄褐色7.5YR 8/3～4 内面は黒褐色 全表面: カクサン石が多い、白色粒 も含む
7号墳(7-6)	土器部 高	直径: 7.1 口径: 16.4 底径: 16.9 高 底	比類のない器の器底の丸底は器底である 神祇、底部が丸く内部下部が大きめ である、底部が厚く平たくらむ変形 してい	器部外縁から底面まで削り、器底は 斜削で器部内面を盛るなどされて おり、丁寧である口縁部外縁は斜 削をしていて器底は9度で均一	褐色7.5YR 8/3～4～用事褐色2.5Y R 5/3 施釉付近には黒斑点がある 全表面: カクサン石が多い、カクサン石・白 色・黑色粒も含む
7号墳(7-7)	土器部 高	直径: 4.0	裏い体面ではない底面は施釉面に着 き、施釉されている器底は9度で均一	器部外縁も裏い器底も施釉台がみられ てなく(タカリ)	全表面: カクサン石・白色粒が多い カクサン石・白色粒多く、焼製
7号墳(7-8)	土器部 环	直径: 3.7	口縁部が外反する	外縁下部は持たれタカリ、上半は 横ナギ	浅黄褐色7.5Y R 8/3～4 全表面: カクサン石が多い、白色粒 も含む



第37図 7号墳出土遺物 (1～3:石室攪乱内出土 4:周溝出土) (1/2)

(8) 8号墳 (第38~39図)

H13~J14にかけて検出し、東側約2/3は烟の造成により削平されていた。埋葬施設はすでに失われており、石材は煙境に転用されていた。石垣東側に確認のためのトレンチを設定し、西側周溝底より低いレベルまで掘り下がったが石室掘方や東側の周溝は確認できなかつた。長さ80cm厚さ20~15cm幅60cmほどの雲仙産安山岩5~6個が煙境に転用されており、2号墳と同規模の箱式石棺が復元できる。



第38図 8号墳周溝・遺物出土状況 (1/60・1/30)

周溝（第38図・写真図版14）

周溝の検出面最大幅は約1.3m、深さ37~40cmを測る。残された周溝で円周を復元すると、検出面周溝内法で直径9.5mほどを測る。検出面の海拔は西側立ち上がり上面で13.835m、南側立ち上がり上面で13.667mを測り、北西から南側に傾斜している。周溝底海拔は南側周溝中央で13.413m、西側で13.46m、北西で13.457mを測り、やや南側が低くなっている。周溝底にレベル差がみられ、周溝の掘り込みは地形に左右されたようである。

遺物の出土状態（第38図・写真図版14）

周溝の埋没状況は、まず墳丘盛土の崩壊がみられ、その崩壊土（2層）直上に高坏などの土器が倒れ込んで、その上に黒褐色（1層）が堆積している。土器器高坏には完形品が多く、土器器が墳丘裾に供えられてからそれほど時間をおかずずに墳丘は崩壊している状況である。高坏以外は完形にならず、小型の壺や壺などは故意に破壊され墳丘に置かれていた可能性が強い。

出土遺物（第39図・写真図版14）

土器器は周溝西側に集中し、高坏が9~10（1~12）、小型の壺が1（13）、壺が1（14）出土している。内高坏は6個体が完形近くに復元できた。他は破片による復元実測である。

高坏は脚器部が開くタイプが3個体（1~3）、脚部が円錐状に開くタイプが5個体（4~8）ある。いずれも大型品で小型品はみられず、小型品を出土している4号墳出土品とはやや時期差があるものと思われる。同じように大型品を出土している遺跡は島原半島内では南高来郡国見町上篠原遺跡出土品にみられる。⁽³⁰⁾ 上篠原遺跡では大型品と小型品がみられ、8号墳に先行し、4号墳と併行する時期が想定できる。

壺部の形態は壺部上半が外に開き端部が外反するタイプで、厚さや調整などはほぼ共通している。ただし、1・5の壺部外面にヘラガキがみられる。壺部と脚部との接合は円錐状の粘土塊を埋め込んでおり、すべての個体で、その粘土塊には丹が濃く塗られている。円錐状の粘土塊を埋め込んだとの調整はナデがほとんどであるが、12は刷毛により行われている。法量は高さ15cm、口縁部径20cm、脚部幅径15cmの範囲に収まり、大型の頃ばかりである。

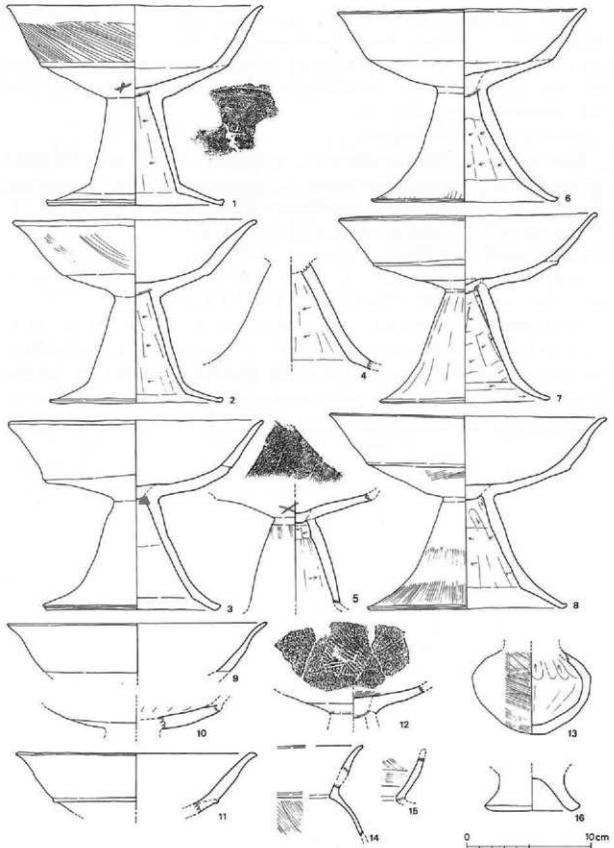
壺は口縁部のみが出土し、頸部から外に広がり端部が外反するタイプに復元できる。小型の壺で3号墳出土品に口縁部形態や調整が類似する。

小型の壺は底部から胴部までに復元でき、2~3cm角の破片ばかりの接合資料である。

15は古いタイプの壺の口縁部で、16は弥生時代からの伝統の強い台付壺の脚部である。これらは古墳群の時期に合わせ、墳丘盛土内に含まれていたものと思われる。

註

1 謙見富士郎編『上篠原遺跡概要報告書』長崎県立国見高等学校考古学研究部1988



第39圖 8號墳周溝出土遺物 (1/3)

第8表 8号墳出土土器観察表(第39図 1~16)

出土位置(団体番号)	種別	法蓋(cm)	形態的特徴	技法的特徴		施工/色調
				外縁	内縁	
8号墳(8-1) 北西側集中区	土器部 高 扇	全 高: 15.8 口縁 奥径: 20.4 环 部 奥径: 14.2 环 部 深さ: 6.5	环部: 外反し端部がさらに外反 脚部: サリナリ近縁部で急激に聞く 大型で器形がない	环部外縁: 粗面(裏面)と細面のみ複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ後端部内面が楕 ナ形	环部外縁: 黄色±5YR 8/3~4 脚部外縁: カッキン石が多く、金属物等や白 色も含む 脚部内縁: ハサツリ	淡黄色±5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-2) 北西側集中区	土器部 高 扇	全 高: 14.5 口縁 奥径: 19.4 环 部 奥径: 11.8 环 部 深さ: 5.0	环部: 外反し端部がさらに外反 脚部: サリナリ近縁部で急激に聞く 大型で器形がない	环部外縁: 粗面(裏面)と細面の複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ後端部内面が楕 ナ形	环部外縁: 黄色±5YR 8/3~4 脚部外縁: カッキン石多く、白 色も含む 脚部内縁: ハサツリ	浅黄褐色±7.5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-3) 北西側集中区	土器部 高 扇	全 高: 15.0 口縁 奥径: 19.4 环 部 奥径: 14.8 环 部 深さ: 5.0	环部: 外反し端部がさらに外反 脚部: サリナリ近縁部で急激に聞く 大型で器形がない	环部外縁: 粗面(裏面)と細面の複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ後端部内面が楕 ナ形	环部外縁: 黄色±5YR 8/3 脚部外縁: カッキン石多く、白 色・赤色も含む 脚部内縁: ハサツリ	淡黄色±5YR 8/3 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-4) 北西側集中区	土器部 高 扇	全 高: 15.0 口縁 奥径: 19.4 环 部 奥径: 14.2 环 部 深さ: 5.0	环部: 外反し端部がさらに外反 脚部: サリナリ近縁部で急激に聞く 大型で器形がない	环部外縁: 粗面(裏面)と細面の複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ後端部内面が楕 ナ形	环部外縁: 黄色±5YR 8/3 脚部外縁: カッキン石多く、白 色・赤色も含む 脚部内縁: ハサツリ	淡黄色±5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-5) 北西側集中区	土器部 高 扇	全 高: 15.8 口縁 奥径: 19.4 环 部 奥径: 14.2 环 部 深さ: 7.8	环部: 外反し端部がさらに外反 脚部: サリナリ近縁部で急激に聞く 大型で器形がない	环部外縁: 粗面(裏面)と細面の複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ	环部外縁: 黄色±5YR 8/3 脚部外縁: カッキン石多く、白 色・赤色も含む 脚部内縁: ハサツリ	淡黄色±5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-6) 北西側集中区	土器部 高 扇	全 高: 15.3 口縁 奥径: 19.4 环 部 奥径: 14.8 环 部 深さ: 5.3	环部: 外反し端部がさらに外反 脚部: 半水に間に開く 大型で器形がない	环部外縁: 粗面(裏面)と細面の複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ	环部外縁: 黄色±5YR 8/3~4 脚部外縁: カッキン石多く、白 色・赤色も含む 脚部内縁: ハサツリ	淡黄色±5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-7) 北西側集中区	土器部 高 扇	全 高: 15.0 口縁 奥径: 20.6 环 部 奥径: 14.6 环 部 深さ: 5.5	环部: 下にはよく聞き 脚部: 内縁部に開く 大型で器形がない	环部外縁: 粗面(裏面)と細面の複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ	环部外縁: 黄色±5YR 8/3~4 脚部外縁: カッキン石多く、白 色・赤色も含む 脚部内縁: ハサツリ	淡黄色±5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-8) 北西側集中区	土器部 高 扇	全 高: 15.6 口縁 奥径: 20.4 环 部 奥径: 14.6 环 部 深さ: 5.7	环部: 下にはよく聞き 脚部: 内縁部に開く 大型で器形がない	环部外縁: 粗面(裏面)と細面の複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ	环部外縁: 黄色±5YR 8/3~4 脚部外縁: カッキン石多く、白 色・赤色も含む 脚部内縁: ハサツリ	淡黄色±5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-9) 北西側集中区	土器部 高 扇	全 高: 15.9 口縁 奥径: 22.3 环 部 奥径: 15.0 环 部 深さ: 5.9	环部: 下にはよく聞き 脚部: 内縁部に開く 大型で器形がない	环部外縁: 粗面(裏面)と細面の複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ	环部外縁: 黄色±5YR 8/3~4 脚部外縁: カッキン石多く、白 色・赤色も含む 脚部内縁: ハサツリ	淡黄色±5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-10) 北西側集中区	土器部 高 扇	全 高: 2.0	环部下半の繩目 脚部: 繩目	环部外縁: 粗面(裏面)と細面の複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ	环部外縁: 黄色±5YR 8/3~4 脚部外縁: カッキン石多く、白 色・赤色も含む 脚部内縁: ハサツリ	淡黄色±5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-11) 北西側集中区	土器部 高 扇	残 有: 4.8 环 部 奥径: 13.0	环部: 下にはよく聞き 脚部: 内縁部に開く 大型で器形がない	环部外縁: 粗面(裏面)と細面の複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ	环部外縁: 黄色±5YR 8/3~4 脚部外縁: カッキン石多く、白 色・赤色も含む 脚部内縁: ハサツリ	淡黄色±5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-12) 北西側集中区	土器部 高 扇	残 有: 2.3	环部下半と脚部上部分 脚部: 繩目	环部外縁: 粗面(裏面)と細面の複数 环部内縁: 被せた 脚部外縁: ハサツリ 脚部内縁: ハサツリ	环部外縁: 黄色±5YR 8/3~4 脚部外縁: カッキン石多く、白 色・赤色も含む 脚部内縁: ハサツリ	淡黄色±5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-13) 北西側集中区	土器部 高 扇	残 有: 6.5 环 部 奥径: 9.4	丸い縁にこぶしの小切妻片 脚部: 繩目	外縁: 折伏の縁目の崩毛 内縁: 縁毛と糸合せ 脚部外縁: 糸合せ 脚部内縁: 糸合せ	外縁: 折伏の縁目の崩毛 内縁: 糸合せ	淡黄色±5YR 8/3~4 金属等: カッキン石多く、白 色も含む
8号墳(8-14) 北西側集中区	土器部 高 扇	内縁外縁の口縁部	外反する口縁 縁部は外反する 小形の妻	脚部外縁: 剛毛 脚部内縁: ケズリ	脚部外縁: 剛毛 脚部内縁: ケズリ	にのみ白色±10YR 7/3 外縁: 黒色が多い 金属等: カッキン石多い
8号墳(8-15)	土器部 高 扇	口縁部	内縁外縁の口縁部	口縁外縁: 糸合せ 口縁内縁: 糸合せ	口縁外縁: 糸合せ 口縁内縁: 糸合せ	内縁外縁: 糸合せ
8号墳(8-16)	土器部 合併部	脚部中央から引き継がれる台付縁 脚部片	脚部外縁: 糸合せ	脚部外縁: 糸合せ	脚部外縁: 糸合せ	内縁外縁: 糸合せ

(9) 層位出土遺物 (第40~43図)

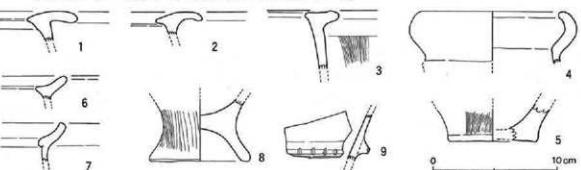
第40図は層位出土の弥生土器である。3層以上からの出土で、中期後半を中心とした時期が主体である。図示したものの他に、丹塗りの壺片が多数出土しているが、摩滅が激しいため完形に復元できなかった。

1~3は壺の口縁部片、4は袋状口縁部片、5は壺底部片である。須次式の範疇にはいるものであろう。

6~7は対岸の肥後地域の中期の代表的な口縁部形態を示し、黒髮式の範疇に入るものであろう。口縁部内面が丸く盛み、端部が反ることが特徴である。7は若干口縁部が立ち気味で、端部の処理が雑である。

8は後期に属する壺底部片である。外面に刷毛調整がみられ、内外面は丁寧にナデが施される。

9は突帯を持つ壺の胴部片で、突帯に刻み目を施している。



第40図 層位出土弥生土器 (1/3)

第41図は層位出土の土師器である。

1は壺で、完形近くに復元できた。口縁部が外に開き端部が外反し、浅めの形態である。外面は不定方向のヘラ削り、内面中央は不定方向のナデ、口縁部近くは内外面とも横ナデである。

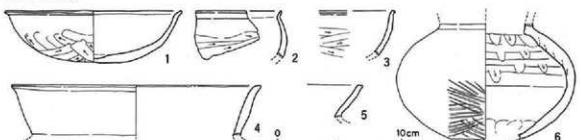
2は壺口縁部片で最大径が胴部中位あり、口縁部が内傾し端部は外反する。深い形態の壺で、外面にはヘラ削りが施されている。胎土は精製されており、焼成は非常に良い。

3は口縁端部が外反する壺で、口縁部は外に開く深い形態である。外面には細かいヘラ削りが施され、内面は横ナデである。

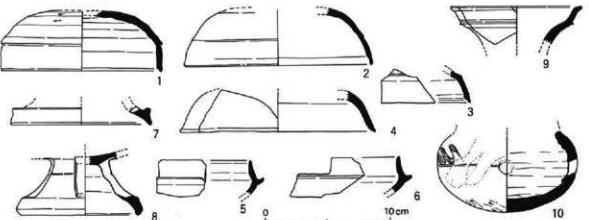
4は壺の口縁部片で、外に開き端部は外反している。内外面とも横ナデである。

5は小型の壺の口縁部片で、弱く内傾して外に開き、端部が外反する。丁寧な薄いつくりで4世紀代のものであろう。

6は小型の丸底壺の胴部片で、胴部最大径は中位以下にあり、1~3号墳出土品と類似した形態である。外面底部近くには荒い刷毛目調整がみられる。内面は粘土紐の接合痕跡が残り、底部中央はナデがみられる。



第41図 層位出土土師器 (1/3)



第42図 層位出土須恵器① (1/3)

第42図は層位出土須恵器で5世紀後半～6世紀前半代におさまる。

1は3号墳出土品と類似する壊蓋で天井部を欠いているが、深い形態である。口縁部高は約2cmを測り、稜は明瞭で鋭いつくりである。端部の内面には段があり、比較的明瞭である。外面には回転を利用したヘラ削りがみられ、端部は横ナデである。

2・4は壊蓋口縁部片であり、稜は明瞭ではなく口縁部はゆるく開いている。端部内面には段を有し、比較的深い形態に復元できる。

3は2と同じ形態であるが、口縁部の稜が明瞭で端部も鋭いつくりとなる。胎土は薄い小豆色を呈するが、陶質土器ほど焼きしまりは良くない。

5・6は坏身で立ち上がりは1.5cm以下と低く、受け部の延びは0.5cm程度である。端部は鋭いつくりである。

7・8は透かしを有する高坏脚部片である。端部形態や調整では7が丁寧で鋭く、胎土でも7は薄い小豆色を呈しており、比較的のしまりがよい。

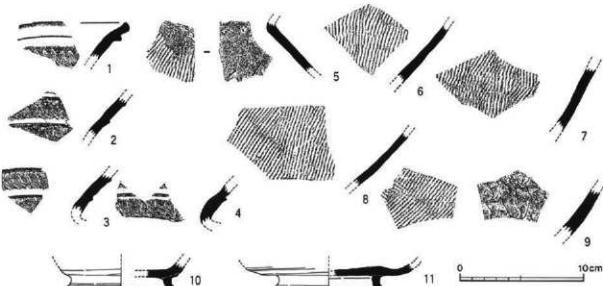
9は逸口縁部片、10は体部片である。9は二重口縁で端部の稜は比較的明瞭である。内外面とも丁寧に調整されており、胎土はやや明るめの灰色である。10は外面に自然釉がかかり、中位に描かれた櫛拂波状文が隠されている。内面には横方向のナデがみられる。

1・7・8は九州では初期須恵器の部類に入り、5世紀代でも第4四半期頭に位置づけられるものである。3号墳や1号墳出土須恵器と同時期と思われる。

第43図は須恵器蓋片と高台付坏片である。1～4は壊の口縁部片で接合はできなかつたが、同一個体と思われる。口縁部から頭部まであり、復元では3段以上の稜を持っています。稜の間には櫛拂波状文が施され、口縁部は複合口縁となる。口縁部のつくりや稜は鋭く、丁寧なつくりである。胎土は薄い小豆色を呈しており、焼きしまりは比較的の良い。5～9は壊の胴部片で1～4と胎土や焼成が似ており、同一個体と思われる。薄いつくりで平均で0.4cmに仕上げられている。外面には平行叩きを施し、内面は当て具を丁寧にナデ消している。

10・11は高台付杯の底部片である。10は高台径と坏底部径がほぼ同じとなるタイプ、11は高台径が坏部径よりも小さくなるタイプである。

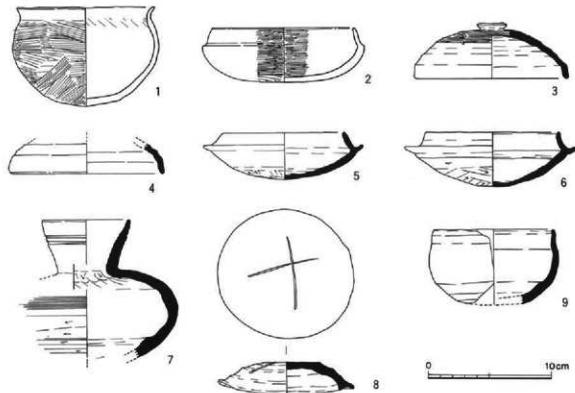
図示できなかつたがほかに長頭蓋肩部片・胴部片、提瓶胴部片、坏片がみられ、坏片には焼成があり良くなく、外面の色調がやや小豆色となるものもみられる。



第43図 層位出土須恵器② (1/3)

(10) 国見高等学校考古展示室収蔵資料 (第44図・写真図版2下)

1・2は土師器で、他は須恵器である。須恵器は全体的に焼きが悪く、うすい青灰色を呈している。1は土師器の环で、胴部が内湾し口縁端部が外反する深い形態をとる。胴部外面は刷毛目調整で、口縁部のみ横ナデ。2は模倣环で接は明瞭で、端部は薄く造られる。口縁端部が短く内傾し、内外面とも丁寧なミガキ調整である。



第44図 国見高等学校考古展示室収蔵資料 (1/3)

3はつまみ付きの坏蓋で、外面はヘラ削りが行われ、天井部付近にカキ目が施される。端部は丸くつくられ、口縁部は直に立ち深いつくりである。4は坏蓋口縁部片で端部は丸くつくられ、口縁部はやや頗き気味である。内外面とも横ナデがみられる。5・6は坏身であり、5がやや小さい。底部は削りにより約2mmの薄さであり、立ち上がり端部は内傾し、受け部は水平に延びている。外面はヘラ削り、上半～口縁部にかけて横ナデである。7は平底である。口縁部は直に開き、端部内面が薄く造られる。口縁部外面には2条の沈線が施され、胴部上面には短い幅でカキ目が、胴部下半に沈線が一条施される。外面胴部下半はヘラ削り、上半は横ナデ、頭部内面には接合時の指ナデの痕跡がみられる。8は小型の蓋で、浅い造りで端部は明瞭であるが器壁は厚い。焼け歪みが激しく、口縁部は波打っている。内外面とも横ナデで、天井部にヘラ記号がみられる。9は深みのある杯で口縁部は直に立ち上がり、端部はやや内傾する。底部から胴部下半にかけヘラ削りがみられ、口縁部から内面にかけて横ナデである。

1は口縁端部が外反し深い形態を呈するため5世紀後半、2は須恵器模倣坏で立ち上がりのあり方を考えると6世紀代にはいるものであろう。3は牛頭IV期に下限を、4～6は牛頭IVBに下限がくるものと思われる。実年代は6世紀後半代を中心とする。7は牛頭Vに下限があり、6世紀末から7世紀初頭であろう。8は牛頭V～VI期にみられ、7世紀中頃の年代であろう。9は牛頭IVB～V期にみられ、7世紀中頃であろう。

今回紹介した資料は国見高校考古展示室で展示されている一野遺跡の資料であり、その資料的価値は高いものである。今回調査された古墳群に続く時期の遺物であり、後続する古墳が存在することはすでに報告されている。^[10]

しかし、既存の報告資料では遺物の所在が不明である場合が多く、古田「一野遺跡概報」(1960)や古田「一野遺跡」(1964)などは良好な資料を図示しているが、その所在が不明である。今回紹介した資料は古田「一野遺跡概報」(1960)に類似するものが多く、その時の資料と思われる。又、国見高等学校考古展示室に収蔵されている一野遺跡出土の鉄刀は、古田(1960)出土鉄刀と同一である。

註

- 1 古田・初村・内村「一野遺跡概報」(長崎県南高来郡有明村大三東) 長崎県島原土木事務所1960
古田正隆「一野遺跡」(南高来郡有明町) 有明町教育委員会1964
長崎県教育委員会「一野遺跡」「長崎県埋蔵文化財集報X」長崎県文化財調査報告書第86集1986
高野信司編「一野遺跡」有明町教育委員会文化財調査報告書第11集1992

参考文献

- 大川清・鈴木公雄「工楽善通編『日本土器事典』雄山閣出版(東京) 1996
研究会資料 舟山良一「牛頭窯跡群出土須恵器」九州土器研究会(大野城まどかびあ) 20000722～23
柳田康雄「土師器・須恵器 2九州」「古墳時代の研究6巻～土師器・須恵器」雄山閣出版(東京) 1991

第4章 古墳群の検討

今回の調査では合計8基の古墳が検出され、島原半島ではじめての古墳群の調査である。現段階での見解を以下の3点について整理していきたい。

1) 土器の序列と実年代

第9・10表は周溝出土土器を器種ごとに整理したものである。

周溝出土土器でもっとも多い器種は高坏、次は壺である。すべての古墳の周溝に共通して出土する器種はみられない。古墳の規模は周溝径や埋葬施設の構造において相違しており、全てを同じ序列の被葬者として整理することはできない。墳丘に供献される土器の構成もおそらくそれらに影響されているものと思われる。^(注)

第9表 古墳組成表

	埴丘形態	周溝 径	埋葬施設	埋葬施設主軸	副葬品
3号墳	円墳	径11m	横穴系石室	N-7°-E	大刀 刀子
1号墳	円墳	径10m	堅穴系横口式	N-2.5°-E	
2号墳	円墳	径8m	箱式石棺	N-13°-W	長頸鏡4
8号墳	円墳	径12m	箱式石棺?		
4号墳	円墳	径9m	箱式石棺?		
7号墳	円墳	径12m	箱式石棺?		大刀2 刀子2
6号墳	円墳	径6.6m	箱式石棺	N-2.5°-W	大刀1 鉄鏡1
5号墳	円墳?	径14m	堅穴系石室	N-17°-W	

第10表 周溝出土遺物一覧

	土 脇 器					須 惠 器			周溝規模 (m)	埋葬施設	副葬品
	高坏	坏	小型壺	壺	他	壺蓋	环身	他			
3号墳	0	6	2	0		2	2	1	径11m	横穴系	大刀 刀子
1号墳	1片	3	1	1		0	0	2	径10m	堅穴系横口式	
2号墳	7	0	1	1	1片	1片	1片	1片	径8m	箱式石棺	長頸鏡
8号墳	7	0	1	1		0	0	0	径12m	箱式石棺?	
4号墳	9	5	1	1片	1片	1片	1片	1片	径9m	箱式石棺?	
7号墳	3	2	0	0	0	壺底腹片1	脚付坏1	0	径12m	箱式石棺?	大刀 刀子
6号墳	0	0	1	2		0	0	0	径6.6m	箱式石棺	大刀 鉄鏡
5号墳	1片	0	0	0	広口壺3	1片	1片	1片	径14m	堅穴系石室	

・須恵器採用直後の土師器

1・3号墳出土の須恵器は、初期須恵器の特徴をもっている。そのため土師器については須恵器採用以前と以後とに大きく分けることが出来る。まず、須恵器と共に土師器を整理していく。1・3号墳からは土師器高坏1片、壺9、須恵器墓3、壺1が出土している。それに対して、須恵器のみられない2・4～8号墳では高坏26、壺7が目立つ。須恵器出現以前と比べ、高坏が圧倒的に減少していることは、古墳出土土器群における時期設定のメルクマールの一つとなろう。

壺は大きく3形態に分類でき、口縁端部が内湾するものの、口縁端部が外反するもの、直立するもの

がみられる。口縁端部が内湾するものは浅い形態で、その他はそれより深い形態である。口縁端部が内湾するもの5固体全ては3号墳から出土し、端部が外反するもの1固体と共伴関係にある。1号墳では口縁端部が外反するものと直立するものがある。3号墳の時期に口縁端部が内湾する坏が主流を占めており、1号墳はその前段階のあり方として整理できる。また、端部が内湾する坏の出現とともに、ミガキの技術が坏の内外面や丸底壺の脚部に採用されている。それ以前の坏の外面にはヘラ削りが多くみられる。国見高等学校収蔵資料の中には、6c前半に位置付けられる模倣坏でミガキ技術が確認でき、6cには坏に定着した技術である。丸底の壺は高さが15cm前後を測り、口縁部は直立し脚部は中位に最大径をもち、頭部直上に弱い掘れをもっていることを特徴としている。

小型の壺は外に開き端部が外反する口縁部にやや長脚の脚部をもち、丸底を呈している。外面は刷毛目、内面はヘラ削りで、ストロークはく骨念に調整されている。器壁は脚部上半を中心へ薄く仕上げられている。

以上のように坏の形態的・技術的特徴を整理すると、1→3という雰囲順に復元できる。

・須恵器採用直前の土師器

次に須恵器出現直前の土師器について整理してみる。5・6号墳を除く4古墳の周溝から土師器高坏が出土しており、器種構成のなかで高坏が優位を占める点は特徴である。高坏には大きく3つがあり、2号墳出土品にみるような小脚化し坏部の発達した形態、8号墳を代表とする坏端部が外反し口縁部径20cm、全高15cmほどを測る大型の形態、4号墳で3固体ほど出土する口縁部径15cm全高13cmほどを測る小型品である。7号墳出土高坏は8号墳に近い形態をみせる。

4号墳出土の小型の高坏は坏端部が直に開き、脚部裾が広がる形態で器壁は厚く作られており、大村市黄金山古墳出土品に類似する特徴をもつが、脚部がエンタシス状にふくらんでおらずや新しいと思われる。4号墳にみる大型の高坏は口縁端部の外反する率が弱く、内湾するものもある。8号墳にみる高坏は大型品のみで口縁端部は外反するものがほとんどである。4号墳出土の大型高坏は、8号墳出土高坏に近い形態をもっている。

4・8号墳の高坏を比較すると4号墳出土品は新しい要素と古い要素が同居しており、8号墳になると新しい要素のみの構成を示すと整理できる。2号墳出土の高坏は8号墳出土品よりも脚部が小ぶりで坏部が大きく発達しており、8号墳出土品の脚部が退化したような感じをうける。共伴する丸底壺の形態は須恵器出現以後の形態に類似しており、土師器高坏を多く出土する古墳ではもっと新しく位置づけることが可能である。

以上の整理をもとに、高坏を出土した2・4・7・8号墳は、4号墳→8号墳・7号墳→2号墳という序列に整理できる。7号墳出土の大型の壺や脚付の壺については類例が少ないためここでは明確な整理を避けておく。しかし、焼成後に底部を穿孔した壺底部片や端部が外反する壺口縁部片が出土しているため、2号墳よりも古いと仮定できる。

次に6号墳出土土師器を整理していく。小型壺の口縁部片1脚部から口縁部にかけての破片1、焼成後穿孔の底部片1が出土している。口縁部は直に開き端部は外反せず厚めにこくっている。外面は刷毛目調整、内面はヘラ削りのあとナデ調整が加えられている。大村市黄金山古墳出土品にみる小型壺と比べて口縁部の開く率が大きいやや新しいものと思われる。しかし、どちらの方はヘラ削りがより丁寧に行われたようであらわされる。また8号墳から小型壺の口縁部片が出土しているが、端部が外反しており、6号墳出土例はそれよりも古く位置づけられる。丸底の壺は全高14.4cm脚部最大径

15.4cmをはかり、2号墳出土品に法量は類似する。しかし、口縁部が直に聞く点がことなり、2号墳出土品よりも古い要素を残しているものと思われる。

・出土品の実年代

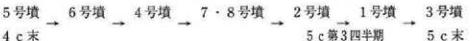
5号墳出土の壺については当遺跡では類品がみられず、熊本県塚原古墳群の方形周溝墓出土品の中にはほぼ同じ形態で同じ法量のものがみられる。^[32]しかし、本遺跡出土品とは調整手法の点や体部がやや尖底気味である点が異なる。塚原古墳群では二重口縁の壺、胴部が発達していない丸底壺などがあり、4世紀第4四半期頃に位置づけてよいものとおもわれる。5号墳からは他に中実の高坏脚部片が出土している。黄金山古墳出土の高坏脚部は中実である。塚原古墳群出土品や黄金山古墳出土品との検討から、5号墳出土の壺の年代は黄金山古墳からやや後出するか同じ時期に整理しておく。実年代では4世紀末頃を中心と考えたい。

九州における初期須恵器は、小田富士雄氏により整理されている。^[33]それによれば、九州では5世紀紀第3四半期にはいり須恵器の生産がはじまる。

長崎県本土部での須恵器の出土は、もっとも古いものは国見町上篠原遺跡出土の陶質土器、時津町前島古墳群出土の罐、無蓋高坏があげられる。^[34]今回1号墳から出土した須恵器は県内本土部では前島古墳群出土罐の直後の段階の特徴を持ち、5世紀第4四半期でも古い時期に位置づけらる。3号墳出土須恵器壺身や層位出土品には5世紀第4四半期におさまるものである。^[35]

・古墳群の拡大

上記の整理によって、古墳築造順は今の段階では以下のように整理しておく。



但し、2・1・3号墳のグループの南に10mほどの間隔をおいて5・6・4・7・8のグループが位置しており、時期的な隔離もしくは系統的な隔離が存在する可能性がある。

埋葬頭位についてみると、6・2号墳では北側小口には枕石が配されており北頭位と考えられる。堅穴系横口式石室である1・3号墳では石室幅が1m弱と狭く、蒲原氏が指摘するように主軸平行の埋葬形態で北頭位に復元できる。それらの主軸はN-7°-E~13°-Wに取まつておる、北頭位は踏襲されている。また、5号墳の石室長軸はN-17°-Wを測り、同じく北頭位の可能性がある。埋葬施設が検出された古墳では、埋葬頭位に関して系統的な隔離はみられない。

これらの古墳群は埋葬頭位や墳丘形態・規模などを踏襲しながら、北側に徐々に墓域を拡大していくことは確実である。国見高校考古展示室収蔵資料や過去の調査で検出された古墳も今回の調査区の北側に位置しており、墓域はさらに北側に広がっていることが復元できる。

註

- 1 塩谷 修「古墳出土の土師器に関する一試論」『古墳文化の新視角』雄山閣出版（東京）1983
- 2 野田・松本・鳥津・江本『塚原』熊本県教育委員会1975
- 3 小田富士雄『九州地域の須恵器・陶質土器』『陶質土器の国際交流』大谷女子大学資料館編 柏書房（東京）1989
- 4 福田一志編『前島古墳群Ⅱ』長崎県時津町教育委員会1994
- 5 中村 浩『東周陶器の研究』柏書房（東京）1981

参考文献

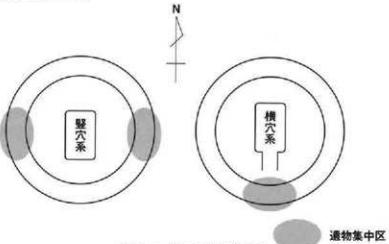
古門雅高「黄金山古墳出土土師器の検討」西海考古創刊号 西海考古同人会1999

2) 遺物の出土状態

埋葬施設からは、6号墳を除いて原位置で出土した副葬品・遺物はない。6号墳の箱式石棺内部から東側壁に寄って腰のあたりに柄が当たる状態で切っ先を南にして大刀一振が出土している。また、柄のあたりから鉄鎌1点が矢羽を南にして出土している。矢羽・矢柄はすでに腐食していた。床面真上に、埋葬者の右下脛から下に副葬品として供えられていた2点である。

周溝からは墳丘裾に供えられていたであろう土器群が、周溝内に落ち込んだ形で出土しており、墳丘のどのあたりに置かれていたのかがある程度復元できる。

まず、4号墳では東側と西側の周溝内部に集中しており、埋葬施設の東西にあたる位置から出土している。高坏や壙は完形品に復元できたが、他の器種は部分的に復元できたのみで、器種によって出土状態が異なっている。2号墳では東側のみで出土しているが、西側の周溝の残りがよくないため、本来は西側にも集中していたものと思われる。ここでも高坏、壙などは完形品近くに復元できたが、他の器種は復元できなかった。8号墳では東側に高坏を主とした集中がみられる。7号墳でも西側と東側とに集中区がみられる。6号墳では周溝西側から壙が完形品で出土し、他にも土師器が出土しており西側の集中区は確認できる。



第45回 遺物集中区概念図

さて、以上の5基の古墳は埋葬施設が箱式石棺に復元できる一群である。1号墳と3号墳は横穴系埋葬施設を採用しているが、その場合はどうであろうか。1号墳では周溝の南側～西側に集中して、須恵器と土師器が出土しており、高坏は破片が1点のみられる。須恵器壙は1点が完形品に復元でき、底部を穿孔している点が特徴である。3号墳でも南側に集中して出土しており、須恵器の壙蓋や身などは完形品で出土している。

このように埋葬施設の変化によって周溝から出土する遺物の位置や質が変化しており、大変興味深い事実と思われる。

箱式石棺などの豊穴系の埋葬施設とは異なる横穴系の埋葬施設の採用によって、それまで墳丘裾東西に供獻されていた土器群が、横穴系埋葬施設の入口にあたる南側に集中していることはそれをよく物語っている。また、横穴系埋葬施設の採用にともない墳丘裾に供獻される土器の器種構成と質が変化し、須恵器が加わり高坏の供獻が減少している。供獻される土器群も質的に変化しており、埋葬施設に対する考え方の変化が影響しているものと思われる。おそらく埋葬に伴う儀式も変化しているものと思われる。

3) 5号墳について

・周溝 5号墳からは周溝北側に3固体の盞が出土している。周溝の大部分はすでに消滅しており状況は不明であるが、調査区内ではもっとも大きい古墳となることは間違いない。他の7基とは明らかに異なる様相を示している。

・埋葬施設 5号墳の埋葬施設は①扁平な板石を平積みした構造で、側壁部分はほぼ垂直に積み、コーナー部分ではやや弱い持ち送りをおこなっている。②内部には東側壁に沿い板石を立て、石室と棺との境界をつくっている。まず、①は4世紀代に多用される堅穴式石室の構造に類似するものである。しかし、②はおなじ扁平な板石を平積みする横穴系の石室にみられる石障に類似している。そのような構造をもつものは研究史では横穴式石室の導入段階にみられる構造として整理されている。それによれば平面プラン方形で、複数埋葬を前提として石障を四壁にめぐらせることが特徴である。ⁱⁱⁱ⁾しかし、5号墳では側壁のみに立てており、四壁にめぐらるものではない。既存資料の特徴に一致するが、異なる構造をもっている。

・使用石材 箱式石棺や堅穴系横口式石室では石材はほとんど安山岩を用いていたにもかかわらず、一番古いと思われる5号墳では雲仙に産しない良質な輝石安山岩を用いている点が注目される。^{iv)}利用されている輝石安山岩には角閃石を含まず、その分布は九州では長崎火山帯などの局的な分布を見る。長崎市曲崎古墳群でも肉眼による観察では同じ石材を利用している。今後岩石学の力を援用して、有明灘や橘湾沿岸周辺の扁平な削石を利用する古墳の石材供給地を探る必要性が出てきた。

このように周溝のあり方、周溝内出土の遺物の状況、埋葬施設の構造、使用石材などが他の7基の古墳とは明らかになっている。この相違を時期的な差と考えることは妥当であろう。しかし、埋葬施設の性格や周溝出土遺物に同じ形態の盞が3個体みられることなどは、時期的な問題だけでは解決しないと思われる。おそらく被葬者の性格に大きく左右され、他7基とは違ったあり方を示すものと思われる。

5号墳については解決すべき問題が多く、今後再検討していかねばならない。

註

1 森下浩行「九州型横穴式石室考」古代学研究115 古代学研究会1987

2 藤原宏行「堅穴系横口式石室考」「古墳文化の新視角」雄山閣出版（東京）1983

2 長崎大学教育学部 助教授 長岡信治氏から石材についてはご教授いただいた。曲崎古墳群の石材については報告者の肉眼観察である。

4)まとめ

今回調査が行われた古墳群は、島原半島での横穴系埋葬施設の採用と須恵器の出現とを具体的に把握できる遺跡として整理できる。また須恵器の出現と横穴系埋葬施設の出現による埋葬形態の変化や死者に対する意識の変化が、具体的に把握できる遺跡である。

住居跡関連遺跡ではすでに国見町上篠原遺跡で陶質土器の採用がみられる。しかし、一野遺跡では墓に須恵器が採用されているため、今後周辺遺跡で古墳時代の須恵器を出土する良好な遺跡が期待できることは間違いないであろう。

また、台地全体に古墳群が広がっていることは間違いない、今後その範囲の確認調査を行い、古墳群の実態をより具体的に整理していく必要がある。

第5章 自然科学分析

長崎県有明町一野遺跡 2号墳出土の人骨

分部 哲秋, 佐伯 和信, 岡本 圭史, 長島 聖司
(長崎大学医学部解剖学第二教室)

はじめに

長崎県南高来郡有明町に所在する一野遺跡は、駐車場、倉庫建設に伴い平成12年10月から翌13年2月にかけて有明町及び長崎県教育委員会によって緊急発掘調査された。その結果、縄文早期以降、弥生時代、古墳時代及び中世の土器などの遺物が発掘されるとともに古墳群が発見され、うち1基より人骨の一組が検出された。

長崎県下においては弥生時代の人骨は比較的多数が出土しており、これまでの研究成果として、この地域から出土する弥生人骨は、前時代の縄文人の形質をそのままに近い状態で受け継いでいるものと考えられている。一方、長崎県における古墳時代の人骨の出土例は非常に少なく、弥生人の形質が古墳時代へとどのように継続され、また変化したかについてはよくわかっていないのが現状である。本古墳時代人骨の遺存量は少ないが、幸いにも歯が残存しており、これらについて形質人類学的検討を行うことが可能だったのでその結果を報告する。

資料及び方法

一野遺跡は、図1に示す南高来郡有明町大三東甲117番地に所在し、本遺跡では縄文時代以降各時代の遺物のほかに古墳8基が発掘されている。これらの古墳のうち、2号墳の主体である箱式石棺より人骨の一部が検出された。所属時代は、別項の考古学的所見に述べられているように古墳時代中期（5世紀）と推定されている。

遺存していた人骨は歯牙を主としており、共同研究者の佐伯が藤田（1949）による計測基準に基づいて歯の計測を行い、その計測結果を縄文時代人などの報告例と比較して性別の同定及び人骨の特徴について検討を行った。

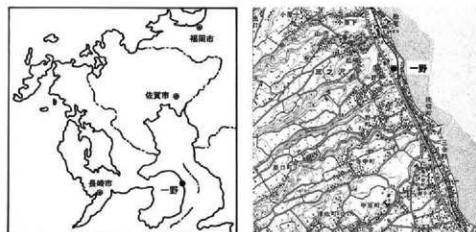


図1 一野遺跡の位置

所 見

2号墳人骨（男性、壮年）

本人骨は、頭蓋では歯が10本、四肢骨では大腿骨の一部及び骨種不明の微小骨片が多数残存している。大腿骨は骨幹の一部であるが、 $2\text{cm} \times 2\text{cm}$ の大きさであり左右の別や性別を同定することはできない。残存歯を術式に示すと次のとおりとなる。これらの歯は遺存状態が比較的しっかりしており、重複がないことと大きさがほぼ一定していることから同一固体と判断される。なお、歯の咬耗の程度は BROCA の 1~2 度の範囲にあって軽度であり、年齢は壮年と推測される。

///M ₁ P ₂ ///	///:	不明显
///P ₃ P ₄ ///	///CP;P ₁ M ₁ M ₂ M ₃	

一野2号墳人の歯の計測結果及び比較資料を表1に掲げた。比較資料については、繩文人は松村（1995）によって計測された本州の縄文人の集計であり、西北九州弥生人は内藤（1971）が縄文人の継続と位置付けた弥生人の歯を小山田、他（1995）が計測した結果である。また、北部九州弥生人は金間（1965）が報告して以来、近年では多くの研究者が大陸からの渡来系として認めている弥生人であり、歯は前述の松村（1995）が計測している。これらの結果から先住の縄文人や主として長崎県離島の各遺跡から出土する西北九州弥生人の歯は、渡来系弥生人の歯の大きさよりもかなり小さいことがわかっている。

一野2号墳人骨の歯の大きさを残存しているもので比較してみると、上顎、下顎の頬舌径及び近遠心径とともに縄文人や西北九州弥生人男性の平均値よりもはるかに大きい。次いで、この計測値を北部九州弥生人男女の平均値と比較してみると、北部九州弥生人女性とは1項目が同じ値を示す以外はこれよりもかなり大きく、さらに男性とは大部分の項目においてほぼ同等かこれよりもやや大きい値を示している。したがって、本人骨の性別は男性と推測される。また、本人骨は1体ではあるが、渡来系と称される北部九州弥生人男性の平均的歯とはほぼ同じサイズの歯を備えており、当地方においても古墳時代中期頃には渡来系弥生人の影響を受けた人々が存在していたことを示唆しているものと考える。

ま と め

長崎県南高来郡有明町に所在する一野遺跡は、平成12年10月から翌13年2月にかけて発掘調査され、その際、8基の古墳のうち2号墳（古墳時代中期）より人骨の一部が検出された。この人骨に関する形質人類学的調査の結果をまとめると次のとおりである。

1. 2号墳人骨の遺存部は、左右不明の大腿骨骨幹の一部と歯が10本である。
2. 歯の計測値から推測して、本人骨の性別は男性と同定される。また、年令は咬耗の程度から壮年と推測される。
3. 歯の計測結果を縄文人及び北部九州の渡来系弥生人などと比較すると、縄文人及び西北九州地縄弥生人の男性平均値よりもかなり大きく、また、北部九州弥生人の男性平均値とほぼ同じ大きさを示した。

[稿を終えるにあたり、研究の機会と助言をいただいた長崎県教育委員会並びに有明町教育委員会の諸先生方に深謝いたします]

表1 一野2号墳人骨の歯の計測値及び比較

		一野		北部九州弥生人 男性		北部九州弥生人 女性		西北九州弥生人 男性		绳文人 男性	
		右	左	N	M	N	M	N	M	N	M
上頸	I ₁			68	7.56	53	7.25	18	7.37	125	7.29
	I ₂			60	6.87	47	6.60	16	6.71	118	6.69
	C			72	8.68	48	8.10	13	8.26	71	7.96
	P ₁			77	9.74	61	9.45	20	9.43	153	9.27
	P ₂	9.56		72	9.52	61	9.19	20	9.13	184	9.00
	M ₁	12.43		76	12.06	67	11.53	19	11.82	189	11.78
舌	M ₂			61	11.84	51	11.32	14	11.49	175	11.45
	I ₁			59	6.02	57	5.74	11	5.88	79	5.93
	I ₂			79	6.47	71	6.23	18	6.22	108	6.20
	C		7.84	86	8.13	70	7.44	25	7.63	115	7.44
	P ₁	8.45	8.55	83	8.35	79	8.07	28	7.64	173	7.79
	P ₂	8.98	8.94	86	8.76	76	8.38	23	8.24	193	8.33
下顎	M ₁	11.47	79	11.33	68	10.96	15	11.39	218	11.23	
	M ₂	11.31	70	10.73	43	10.23	17	10.74	207	10.47	
	I ₁			57	8.81	51	8.49	18	8.21	108	8.51
	I ₂			50	7.44	47	7.17	16	6.93	106	7.10
	C			65	8.17	46	7.87	13	7.59	68	7.55
	P ₁			77	7.59	61	7.30	20	6.89	153	6.90
近遠	P ₂	6.93		67	7.10	57	6.93	18	6.57	183	6.46
	M ₁	10.91		68	10.68	62	10.28	18	10.55	190	10.28
	M ₂			60	9.86	50	9.54	15	9.63	172	9.12
	I ₁			54	5.44	52	5.34	11	5.03	61	5.27
	I ₂			71	6.19	62	6.03	18	5.39	91	5.72
	C		7.19	85	7.24	62	6.74	25	6.65	112	6.73
心径	P ₁	7.32	7.45	79	7.38	76	7.17	27	6.72	172	6.91
	P ₂	7.62	7.72	84	7.49	71	7.22	24	6.95	190	6.94
	M ₁	12.05	66	11.82	56	11.36	14	11.72	210	11.61	
	M ₂	11.91	67	11.35	43	10.74	17	11.18	201	10.80	

参考文献

- 1) 藤田恒太郎(1949), 歯の計測基準について, 人類学雑誌, 61:27-32.
- 2) 藤田恒太郎(1965); 歯の話, 岩波書店: 57-98.
- 3) 金関丈夫(1955); 弥生人種の問題, 日本考古学講座, 4, 弥生文化, 河出書房
- 4) Matsumura, H.(1995); A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum Monograph 9.
- 5) 内藤芳彌(1971); 西北九州出土の弥生時代人骨, 人類学雑誌, 79:236-248.
- 6) 内藤芳彌(1981); 4 弥生時代人骨 日本人 I., 人類学講座, 雄山閣: 57-99.
- 7) 中條孝博, 永井昌文(1989); 3 弥生人 I. 形質, 弥生文化の研究 I, 雄山閣: 23-51.
- 8) Oyamada J., Manabe Y., Kitagawa Y., Rokutanda A., Nagashima S. (1995); Tooth size of the protohistoric Kofun people in Southern Kyushu, Japan. Anthropological Science, 103:49-60.

図 版



遺跡遠景①



遺跡遠景②



調査地から熊本県長洲方面



舞岳



調査地近景



作業状況①



作業状況②



作業状況③

図版 2



土坑



燒土



—野式出土状況（第7図 10）



弘法原式出土状況（第7図 17）



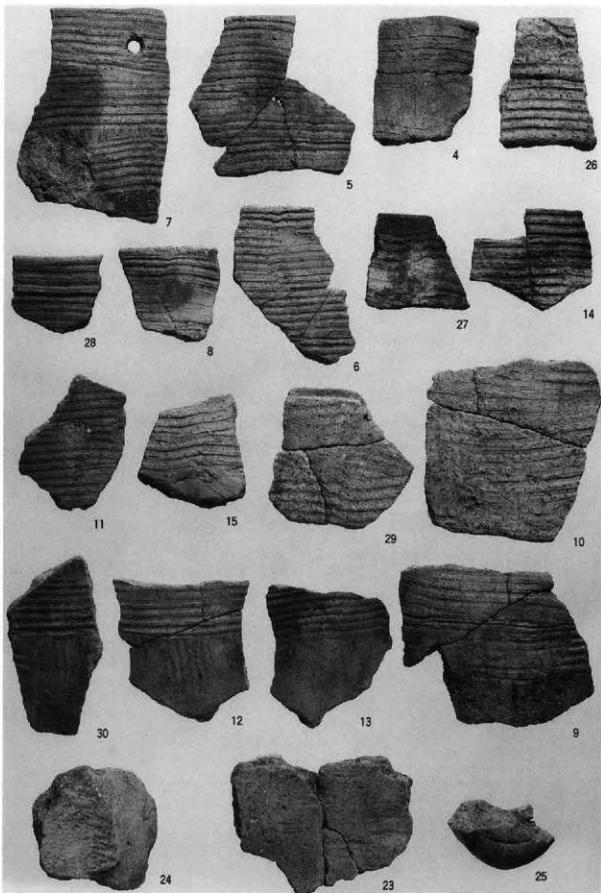
三棱尖頭器出土状況（第9図 1）



TP 1南壁土層

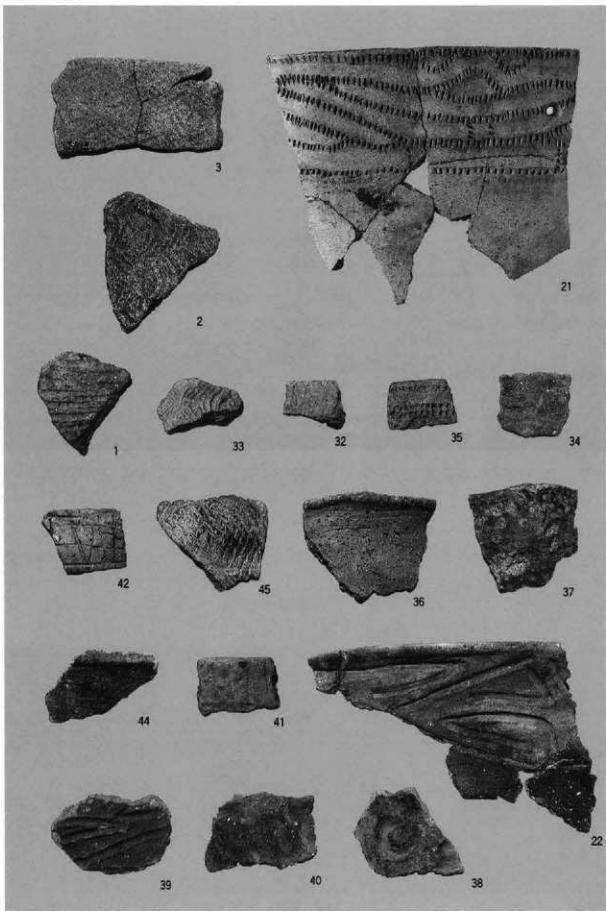


国見高等学校考古展示室収蔵遺物

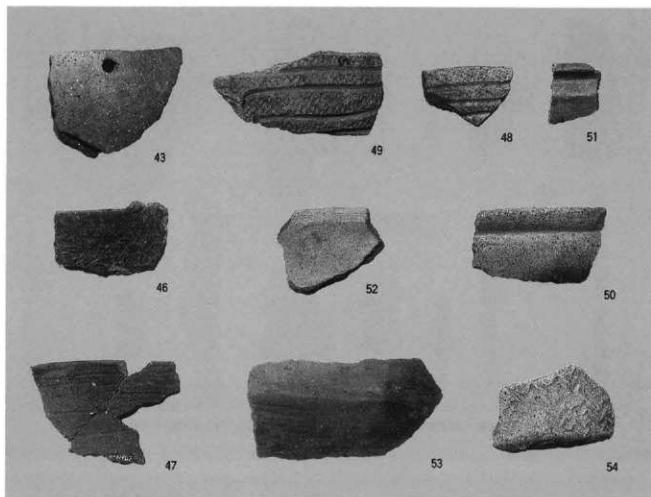


绳文土器①

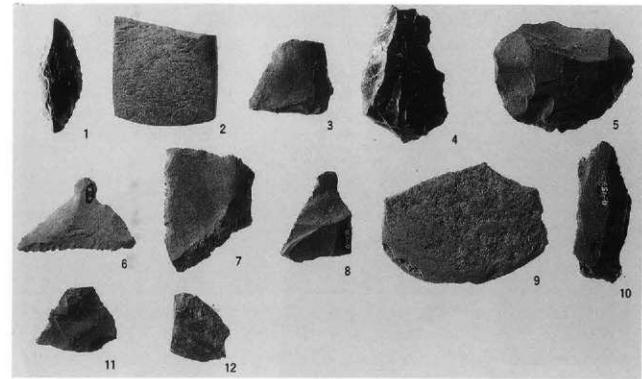
図版 4



陶文土器②

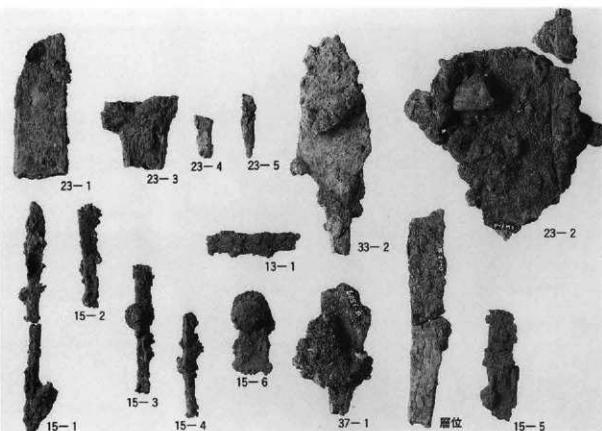


縄文土器③

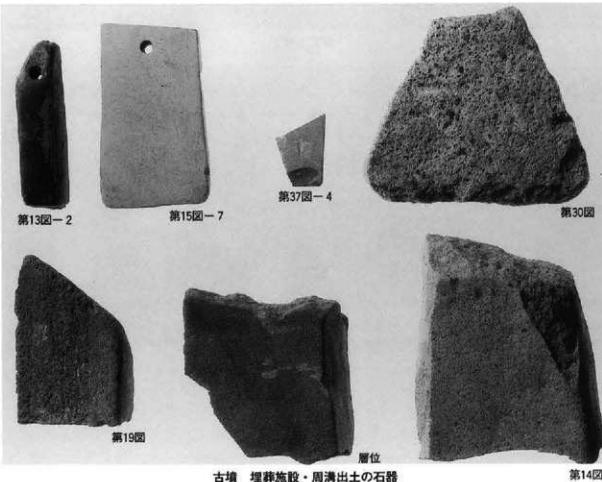


石器

図版 6



古墳 埋葬施設・周溝出土の鉄製品 (番号は本文図に対応。例: 第15図 5→15-5)



古墳 埋葬施設・周溝出土の石器



1号墳検出状況①(南から)



埋葬施設(南から)



1号墳検出状況②(南東から)



6



2



周溝内土師壺出土状況(第12図 3)



3

周溝内出土遺物(番号は本文第12図に対応)

図版 8



2号墳検出状況（東から）



埋葬施設①（東から）



周溝内遺物出土状況①（東側集中区）



埋葬施設②（枕石出土状況）



周溝内遺物出土状況②（拡大）



周溝底研石出土状況（底面直上出土）



4



5



6



8



3



1

2号墳周溝内出土遺物（番号は本文第18図に対応）



3号墳検出状況（北東から）



埋葬施設（北から）



周溝内遺物出土状況①（南東側集中区）



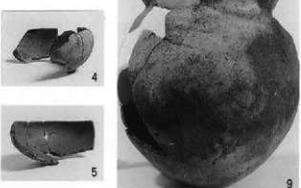
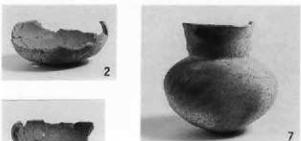
周溝内遺物出土状況②（南東側集中区）



周溝内遺物出土状況③（南西側集中区）

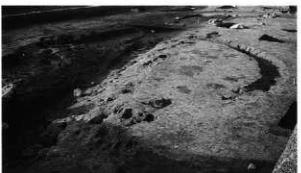


第42図1 屢位出土品



3号墳周溝内出土遺物（番号は本文第25図に対応）

図版10



4号墳検出状況①



4号墳検出状況②



周溝内遺物出土状況①(東側集中区)



同左②(拡大)



周溝内遺物出土状況③(西侧集中区)



4号墳周溝内出土遺物(番号は本文第25図に対応)



5号墳周溝内遺物出土状況①



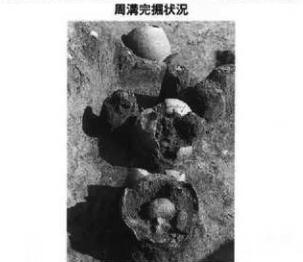
埋葬施設①(上面)



周溝完掘状況



埋葬施設②(南から)



5号墳周溝内遺物出土状況②(拡大)



埋葬施設③(東側盤)



3に落とされた円鏡



5号墳周溝内出土遺物(番号は本文第28・29図に対応)

図版12



6号墳検出状況（西から）



埋葬施設①（北から）



埋葬施設②（北から）



埋葬施設②（北から）



埋葬施設②（北から）



副葬品（第33図1）



周溝内出土遺物（第34図）

1



7号墳検出状況①(北から)



4



7号墳検出状況②(西から)



6



2



5

7号墳周溝内出土遺物(番号は本文第36図に対応)

図版14



8号墳検出状況（北から）



周溝内土師器高环出土状況



6



1



7



3



5



8



13

8号墳周溝内出土遺物（番号は本文第39図に対応）

報告書抄録

ふりがな	ひとの						
書名	一野遺跡Ⅱ						
副書名							
卷次							
シリーズ名	有明町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第14集						
編著者名	宇土 靖之・竹中 哲朗						
編集機関	有明町教育委員会						
所在地	〒859-1415 長崎県南高来郡有明町大三東戸1438番地1 TEL0957-68-1101						
発行年月日	西暦 2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 * * * * *	東経 * * * * *	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
一野遺跡	長崎県 南高来郡 有明町三之沢	31-22	92-41	32 45 55	130 21 5	H12.10.24 H13.2.2	1200 国庫補助 (駐車場・ 倉庫建設)
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
一野	遺物含包地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世	土坑 古墳群	縄文前期～晩期の土器・石器 古墳時代中期 土器類・須恵器	島原半島ならず長崎県本土部では初の古墳群の調査となり。古墳時代中期の墓葬の変遷を伺える良好で貴重な遺跡である。 また、本土部ではもっとも古い須恵器を出土している。		

有明町文化財調査報告書 第14集

一野遺跡Ⅱ

2001年3月31日

発行 有明町教育委員会
長崎県南高来郡有明町大三東庚1438-1
TEL 0957-68-1101

印刷 (株)昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL 0957-22-6000

